永友古書店

松本 由樹彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永友古書店

【Ｎコード】
Ｎ５３１５Ｅ

【作者名】
松本　由樹彦

【あらすじ】
「ねえ、それはなにしてんのかな？」「ちょっと静かにしててください」親父が死んで、過去に囚われ、保険金ニートに成り下がった身動き取れない俺の前に突如現れたちょっとアレな女子高生。で、そいつはいきなり本読みまくった。意味わからん。でもそのときすでに人生のターニングポイントが始まっていたみたいです。

1　先細りの商売ッスから

人生の最盛期は青春時代であるっていうのは本当で、人生六十過ぎてからなんていうのは年寄りのみじめな負け惜しみだ。本当。で、青春が青春としてもっとも栄華を極めるのは高校の三年間。これも正しい。高一のときの担任が『青春の本当の価値、その尊さ、そしてその美しさは過ぎてみなければわからないものなのであるよ』ってフランス人の泥棒みたいな口ひげを撫でながら言ったことがある。あほかと思った。そんなもん俺はリアルタイムで実感してたし、周りの連中だってみんな知ってた。だからこそあの三年間、俺はやりたいことをやりたいように全力でやり続けた。心残りなんて一つもない。いや、それは言いすぎだけど。でも自己採点なら何の迷いもなく百点をつけられるパーフェクトな青春を俺は送った。もしいまの記憶を持ったまま中学三年の秋とかに戻ることになったとしても俺はまた同じ高校を受けるし、同じ仲間と同じ時間を過ごしたいって真剣に思ってる。だってあんなにハッピーでエキサイティングでスリリングな最高の日々が待ってるってわかってるのにどうして他の選択肢選べるよ？それに二回目なら一回目よりもさらに上手く立ち回れるし、しくじったところをサクセスに切り替えることもできるんだ。まあそのミスもミスで楽しかったんだけど。とにかく幸せな高校生活でした。

でも青春って言葉はだせえ。俺は青春っていうフレーズが排水溝で生まれる小蝿と同じくらい嫌いだ。耳に入れただけで鼓膜が膿みそうになる。さっきから青春青春連呼してたのは残念ながら他に適当なメタファーを思いつかなかったからでしかないし、実際いまの俺は喉がからからで全身に鳥肌を立てて毛布に包まって震えている。だから通常の俺は俺の高校生活を青春なんて呼ばない。高校時代、俺の仲間も誰一人青春なんて発言をしたことがなかったし、もしそんなことを言うやつがいたら俺たちはそいつが悔い改めるまで殴る

か、そいつを追放するかのどちらかを選ばなければならなかっただろう。でも追放したいやつなんて一人もいなかったからたぶん殴っちゃっただろうな。もちろんそれは、もしそんなことがあったとしたらの話だし、言うまでもないことだけど、そんなことなどないままに俺たちは無事高校を卒業した。でも最近俺の仲間たちは結構その言葉を使ったりする。思い出話としてだ。はは。そしてそんな話をしていると恥ずかしくなってくる。青春という言葉そのものの持つ宿命的な恥ずかしさと、あの頃の『青春真っ只中の俺』という存在がもたらした既決済みの恥ずかしさだ。俺は冷や汗を浮かべながら身悶えすらする。それを人は成長と呼ぶのかもしれない。俺はそう呼ぶことにする。まあしかしだ、それでもなお俺の高校時代はちっとも色あせることはなく、四十八色のビビッド・カラーでいまも鮮やかに彩られているのである。俺の心の奥、いや、結構上のほうで。

店に格言辞典があったから青春の格言調べてみた。

『青春が楽しいというのは迷想である。青春を失った人達の迷想である』サマセット・モーム。

『青春の時期は、いつの時代でも恥多く悩ましいものだ。もう一度やれと言われてもお断りしたい』吉行淳之介。

『ああ！青春！――人は一生に一時しかそれを所有しない。残りの年月はただそれを思い出すだけだ』アンドレ・ジイト。

ジイトが熱い。

それはさておき四月の朝、俺が駅前でだらだらティッシュを配っていると、いきなりガラガラドシャドーン！てバカでかい音がして、なんだと思って音のしたほうを見ると、どうやら道路を挟んだ向こう側で高層ビルを建設中だったクレーンがうっかり鉄骨を歩道に落として誰かが下敷きになったらしく、すでに通行人というか野次馬がその周りに殺到していて、俺もティッシュを路肩に置き去りにし

て駆けつけてみたら青ざめた顔した作業員が被害者のおっさんを引きずり出しているところで、そのおっさんは頭から血を流してぐったりしていて、俺はあんまり動かさないほうがいいんじゃないかなーとか思いながら見てたんだけど、よく見たらそれ親父だった。後から聞いた話だとそのときすでに死んでいたらしい。漫画チックであっけないけど壮絶な最後だった。永友龍太郎、享年五十歳。合掌。

母親はとっくに病気で他界、祖父母もすでに墓の中。ということでこの永友虎太郎、弱冠二十歳が親戚一同並びにご近所の皆様方の暖かいサポートを受けながらどうにかこうにか喪主の大役を務めあげたのはもう三ヶ月も前になる。四十九日も過ぎて骨親父は土に返り、俺は親父が死んだ日にそのままティッシュ配りをフェードアウト。かけもちしてたピザ屋のバイトも辞めて、この三ヶ月なんもしてない。別に親父を失ったショックから立ち直れないとかそういうわけじゃない。多額の保険金と巨額の慰謝料プラス香典その他もろもろが俺の手元に丸ごと入り、正直、普通に暮らすだけなら十年は持ちそうなのだ。もともと高校を卒業してから大学にも行かずに定職にも就かず、気が向いたときに簡単なアルバイトで小銭を稼ぐの気ままなパラサイトだった俺にとっては、息子の現状についてそれなりに口うるさかった親父がいなくなったことは悲しい反面うれしくもあり、今まさに俺は実家一人暮らしを謳歌していた。ちなみに俺の家はこの界隈で唯一の古本屋だ。じいさんが始めて親父が継いで、去年創業五十周年を迎えた歴史ある永友古書店。でも親父が死んでからは『喪中』の札貼ってずっとシャッター閉めたまま。別に店開けてもいいんだけど、なんとなく周りに『虎太郎くん、お父さんの後を継いだのね』とか思われるのがしゃくだし。ぶっちゃけ儲からないし。ゲームも売っててＤＶＤも貸してくれる大手チェーンに客取られてうちみたいな零細個人経営店舗はもはや生き残るすべないし。しょうがない。だから親父が懇意にしていた高松さんていう業者さんに電話一本入れまして、来週にはうちの在庫を全部引き取ってもらうことにした。親父がせっせと買い集めた片身みたいな

もんだけど、うちに置いといてもしょうがないし。邪魔なだけだし。こんなもんはとっとと売り払ってマネーに変えちゃおう。第一、この商店街ももう壊滅寸前だし。半分以上シャッター閉まってるし。そういう時代なのよね。駅前大型ショッピングモールな時代。古い本より新しい日本って。ついでにこの家も売るつもり。この家、一階はほとんど店舗で段差で仕切られた奥に台所と飯食うテーブルがあって左に進むと風呂があってトイレがあって二階が居住スペースなんだけど、もう築五十年の木造だ。もちろん何度も改築・修繕はしてるけどいくらなんでも限界でしょ。二階って言ったってもともとが平屋なのを改築してくっつけた二階だから一階の広さの割りに小さい。でも一人で住むには広いし古い。本の始末がついたら物件探そう。地元出る気はないから３ＬＤＫくらいで駅近いとこ。というわけで日々リッチに過ごしてる俺。今日は昼過ぎに起きて三百円のカップ麺食って、タバコ吸いながら音楽かけて、昨日買ってきたクローズ全巻読んでる。もちろんよその古本屋で買った。うちの店、漫画置いてないの。アダルトもない。亡き親父曰く、じいさんの代からのポリシーだそうで。あほくせえ。ＢＧＭはハービー・ハンコック。親父は柄にもなくジャズとかボサノヴァとか好きだったから生きてるときは親父の影響受けてるとか勘違いされたくなくてでかい音で聴けなかったんだけど、いまは思う存分大音量で流してる。親父が無意味に難癖付けて嫌ってたハービー。俺は好きだ。

夕方になって裏口玄関のピンポン鳴って、出たら脩平がいた。小一からの付き合いになる俺の無二の親友の脩平。

「こーたろー、駅行こー」

「おー」

脩平はいま大学生。脩平の言う『駅』っていうのはこの辺で一軒だけの駅裏にあるキャバクラのこと。まあ昨日も行ったんだけどね。ここには高校の同級生とか先輩とか後輩とかがいっぱい働いてる。そんなとこ行って何が楽しいんだって思うかもしれないけど同窓会みたいで案外楽しい。今夜俺と脩平についたのはみんな高校の同級

生だった。そのうちの一人の未来って子は脩平の彼女。ここではくるみって名前になってるけど。で、店入ってからずっと脩平が未来にべた張りで離そうとしません。キャバクラで働いてるの心配ならお願いしてでも辞めさせりゃいいのに。で、俺はというと高一のときに同じクラスだった晴香ちゃんと楽しくお喋り。おとなしくて頭良くてかわいくてぶっちゃけ大好きだった晴香ちゃん。優等生で学級委員とかもやってて俺らとはタイプ違うからほとんど絡んだことなかったのに、まさかキャバ嬢と客って立場で話すときが来るなんてあのころは思ってもみなかった。だってあれから五年しか経ってないんだぜ？つっても五年か。五年も経てばいろいろと変わるか。憧れの学級委員はキャバ嬢になって、俺は保険金長者になって、親父は灰になる。そういうこともあるし、何よりそれが現実だ。あーあ、今日って何曜日だっけ？つーか何月かもよくわからん。どうでもいいけど。晴香ちゃんに聞いてみよう。笑ってくれると思うから。

「晴香ちゃーん」

「本名で呼ばないで」

「ひなのちゃーん」

「なーに？」

「今日何曜日だっけ？」

「木曜日だよ」

笑ってよ。

家に帰ったのが確か三時で、そのままベッドに倒れて眠りました。あんま覚えてないけどまたボトル入れた気がする。飲みすぎた。次に起きたのは一時半。明るいから昼で、汗かいてるからもう夏だ。俺は酒の抜けない頭でぼんやり天井の木目を眺めながら、いつまでもこのままじゃ駄目だよな、なんてまともなことを考えたりしてみた。いくら金があるからって一生遊んで暮らせるほど余裕があるわけでもなく、十年は暮らせそうとは言っても、こんなトイレに水流すみたいに金使いまくる生活を続けてたらだいたい二年かそこらで

破産だ。とにかく、ずっとこんな生活を続けるわけにはいかないっていうことだけははっきりとわかる。だから俺はついに腹を決めてベッドから跳ね起きて布団を引き剥がして窓開けておりゃっと手すりに引っ掛けた。っていい天気だなおい。夏空だ、夏空。入道雲ないけどヒコーキ雲ある。昼下がりの寂れた商店街に俺が布団をパンパン叩く乾いた音が鳴り響く。でかい洗濯ばさみで布団をロックして、ミニ冷蔵庫から缶ビール出して一気に半分くらい飲んでからタバコをくわえて火をつけた。なんつーか、すげー達成感。今日の仕事はもう終わった感じ。腹減ってるから食うもの探したけど、パンもカップ麺もストックなし。めんどくさいから食わないでいようかなって思ったけどそれにしても無性に腹が減るから仕方なく顔洗って着替えて自転車乗って近所のスーパーまで。

「虎太郎ちゃん」

ウィンナーロールとカップ麺五個と海鮮焼きそばと野菜ジュースとお茶とコーラとビール六本とバタピーとチーカマとハーゲンダッツのバニラを買い物カゴに突っ込んでレジに並んでると後ろから声かけられた。後ろにいたのは一度見たら夢に出てきそうなちりちりパーマのおばさん。俺の家の三軒隣の魚屋の奥さんだ。親父の葬式のときにはずいぶん世話になった人なのだ。

俺はペコリと頭を下げて「こんちわッス」と挨拶した。

「しばらく姿見なかったけど、元気だったかい？」

「はい、元気ッス」

「そうかねぇ。ちょっとやつれたように見えるけど」

「ないない。絶対気のせいってやつッス」

俺ははははと笑いながら言った。食って寝てるだけの俺がやつれるわけがないだろうって。でも奥さんは俺のカゴの中身見ながら微妙に心配そうな顔をしてる。

「なんか困ってることあったらいつでも相談に来なよ。昨日今日の付き合いじゃないんだから」

「へえ」

「ご近所みんな、虎太郎ちゃんのこと気にしてるんだよ。龍太郎さんが亡くなってもう三ヶ月なのに一向に店開ける気配もないし、あんまり姿も見せないし、あれでずいぶん落ち込んでんじゃないかって」
「いや、そういうわけでもないッスけど。つか、俺、店継ぐ気はないッスから」
俺がそう言うと魚屋の奥さんは聞いてるこっちの気が滅入りそうなくらいに重たいため息をついた。
「やっぱりそうなのかい？」
「ええ。先細りの商売ッスから」
奥さんは何か言いたそうな顔で俺を見ていた。同じ商店街の自営業者。大型店舗に客を取られて経営は苦しい。だいたい奥さん自身だってスーパーに買い物に来てるくらいだ。もちろん魚は買ってないけど。
「まあ、虎太郎ちゃんの人生だから、好きにすればいいさね。でも古本屋がなくなるのは残念だよ」
俺はあいまいに笑って見せた。それで感付かれたみたい。
「…あんた、まさか、この町も出てく気じゃないだろね？」
「あーっと、言いにくいんスけど、そのうち出ようと思ってます。そんな遠くに行く気はないスけど、あの家、一人で住むには広すぎるんで」
魚屋の奥さんは眉間にしわを寄せて、なにか物悲しげな表情をした。そんな顔されるとなんかちょっと悪いことしてる気分になる。奥さんはしばらく、たぶん無意識に頭のちりちりを指でつまんでまっすぐに引っ張っていた。手を離すとまたちりちりに戻って、俺は笑うのを我慢した。
「なんて言うか、世知辛いねえ……」
俺は魚屋の奥さんに、「しょうがねえッスよ」と言おうと思った。でもその言葉は喉までもたどりつけずに俺のからっぽの腹の中に落ちた。しょうがないんだ。やる気もないし未来もない。だからいっ

そ全部やめて新しく始めればいい。今あるものを全部捨てて、新天地で新しいことをやる。親父が死んで、金ができて、店を売って、また金ができる。いい機会だ。

でも何にもやる気がない。

2　触らないでください！

家に帰るとエアコンつけて、海鮮焼きそば食いながらビール飲んでタバコ吸った。さっき帰りがけに魚屋の奥さんに、「アジのいいのが入ったから後で取りにおいでよ」って言われたけど断った。ただでくれるっぽかったけど魚のさばき方とかわかんないし。なんかグロいし。今は部屋で寝転んで中古車情報誌読んでる。昨日コンビニで買ったやつ。うちの車は親父名義のぼろぼろのライトバンなんだけどマジでぼろい。俺が小学生の頃からすでにぼろかった。あれをどっかで廃車にして女の子乗っけても恥ずかしくないかっこいいやつに買い換えようと思うんだけど、正直、車ってあんまり興味ないからわからんね。とりあえず外車にしよ。箔付くし。メイド・イン・イタリーのスピード出るやつにキャバ嬢乗せてハイウェイ走るのだ。キャバ嬢といえば晴香ちゃん。さっきメール来てた。『あしたはどこいこっか（はぁと）』みたいな。とりあえず返信せずに放置です。『どこいこっか』って行くことすでに決定済なんすか？晴香ちゃんとは先週もデートした。で、鞄買ってあげたの。薄ピンクでお姉な感じのプラダのトートバッグ。なんであんなのが二十万もするのかわからんけど買ってあげた。で、お返しにホテルで時価二万円相当のサービス。最後まではやらしてくれないの。だからちょっとわりに合わないんだよね。別に見返り求めてるわけでもないし、ぶっちゃけもう好きでもないんだけどさ。俺が好きだったのは学級委員の晴香ちゃんで、今のバキッとしてすげーきれいなんだけど、なーんかあか抜けすぎて逆にすたれちゃった感じの晴香ちゃんのことは別に好きじゃない。ていうかひなのとかいうからむしろひく。だから俺的にはただの暇つぶしなんだけど、上から目線な付き合いなんだけど、もし向こうが俺のことスポンサーとか金づるとか思ってるんだとしたらかなりむかつくんだけど、ところがその二万円のサービスっていうのが結構いかったりする。あーどーするかな明日。

今週の土日はウインズ行ってしこたま馬券を買い込もうとか思ってたんだけど。まあいいや。後回し。今はクローズの続き読もっと。

一時間くらいでページめくるのがめんどくさくなってきたからそのまま寝た。

起きたら夕方だった。俺はうつ伏せで寝てて、ほっぺた触ったらどうもくっきり畳の跡。あー、なんか体中痛い。運動してないのにふくらはぎが筋肉痛ってどういうこと。ちゃんとベッドで寝ればよかったよ。そうだ布団干してた。エアコンつけっぱなしで寒いし。俺は先月から脱ぎ捨ててあったジャージの上着を羽織ってタバコくわえて窓開けて布団を取り込みにかかる。あい、いいね、お日様の匂い。やっぱ取り込む前にもう一回叩いとこう。布団叩き持って身を乗り出すと、真下に女の子が立っててこっち見上げてた。なんか制服着てて学校指定っぽいスポーツバッグ持ってるけど、中学生には見えないからたぶん高校生だ。で、ほとほと困り果ててたところにぱっと救いの手が差し伸べられたー、みたいなきらきらした目でこっち見てる。夕陽のせいか夏のマジックか知らないけれど、なんかえらいかわいく見えた。

「すいませーん、永友古書店の方ですかー？」

「えーっと、まあ、そうッスけど」

一応、客っぽいので丁寧語で返事をする。って、別に店やってないんだけど。

「お休みなんですかー？」

「えーっと、はい」

「お休みのところすいませんけどー、探してる本があるんですー。開けてもらえませんかー？」

「いや、すんませんけど、ちょっと店は開けられないッス。あと、

うちには大した本ないんで」
「でもここにあるはずなんです」
女子高生はいままでよりも一回り大きい声で言った。多少距離があるからそれなりに大きな声を出さないと聞こえない。夕暮れの寂れた商店街。人通りは多くないもののやっぱり目立つし恥ずかしそうだ。俺もなんか恥ずかしい。それにどうやら事情もあるみたい。俺は布団取り込んでタバコ箱に戻してジャージ脱いでTシャツのしわチェックして軽く寝ぐせ直しながら階段降りてサンダル履いて裏口から外に出て、シャッターの前で女子高生と対面した。うん、普通にかわいい。前髪パッツンな黒髪ショートで顔が余計に小さく見える。目はやっぱりきらーんってしてて、胸ちっちゃくて、脚きれいで、まったく似てないのに学級委員だった頃の晴香ちゃんを思い出した。しかも夏の夕暮れ。オレンジ色の光に包まれて、ノスタルジックかつセンチメンタルな気分です。
「お願いです。お店、開けてください」
女子高生はまっすぐ俺を見て言った。で、俺は目を逸らしてしまう。いい年して小娘ごときにって思うかもしれないけどさ、なんか今の俺はこんな青春真っ只中そうな子と目を合わせちゃいけないような気がして。髭も伸びてるし。
「せっかく来てもらって悪いんだけど」
俺はシャッターの張り紙を指差した。『喪中　しばらくの間休業します。店主』。
「ていうことなんだ。だからお引取り願えますか」
女子高生はしばらくアラビア語の案内板でも見るみたいな目で俺の手書きの張り紙を見てた。あるいは俺の字が下手すぎるだけかもしれない。
「しばらくって、いつまでですか？」
「あー……、実のところ、やめるんで。古本屋」
「じゃあこれ嘘じゃない」
女子高生のパッツンの下の眉がピクリと動いた。

「嘘って言うか、これ書いた頃はまだ決めてなくて」
「この店主って誰ですか？」
「俺だけど」
「店主って、店のオーナーってことですよね？店長ですよね？」
「いやだから、便宜的にそう書いてるだけだって」
「お願いします。開けてください」
女子高生はがばっと思いっきり頭を下げた。
「悪いけど、無理」
「せっかく遠くから来たんですよ？」
「どんだけ遠く？」
女子高生の言った地名はここから車で一時間くらいの町だ。遠いといえば遠い。
「ここしか手がかりがないんです。事情はちゃんとお話しますし、ちゃんと買いますから」
「いや、そんなこと言われてもさ」
女子高生はくちびるを噛みながら俺を睨んだ。ってちょっと待って、目潤んでないか？
「……どうしても駄目なんですか？」
「駄目。泣いても駄目」
ちょっと俺、頑なすぎるか。でも泣けばだいたいのことがどうにかなると思ってる女って腹立つんだ。俺は君にそういうふうに育ってもらいたくないのだよ。わかってくれ。
「じゃあ、土下座します」
女子高生はひび割れたアスファルトに生足の膝をつこうと身をかがめた。
「え、ちょっ…」
俺は慌てて女子高生の肩を押さえて止める。さすがにそれはまずいだろ。さっきからなにげに通行人とか周りの店の人たちが俺たちのやりとり見てるし、ここで土下座なんかされたらご近所に変な噂が立つ。

「触らないでください！」
女子高生が叫んだ。
うわぁ、終わった。完璧に終わった。魚屋の奥さんがすごい顔してこっち来るし。
「わ、わかったから。とりあえず裏口から入って」
「はーい。ありがとうございまーす」
女子高生はけろっとした笑顔になって、小走りで裏口に向かった。俺にはスキップにすら見えるな。ああ、わかってるよ。はめられたってことくらい。
「虎太郎ちゃん！あんたなにしてんだい！」
思いっきりビクッとして振り向くとすでに魚屋の奥さんが真後ろで目ぇ剥いてた。さっきすごい顔してるって思ったけど、近くで見るとなんか魔王みたいだな。この人ちりちりから角生やすんじゃないか？
「や、なんもないッス。あれは親戚の子ッス」
俺は作り笑いを浮かべながら適当なことを言って、ダッシュで女子高生の後を追った。

3　ちゃんとわかってるじゃないですか

家の中に入っても、女子高生の姿は見当たらなかった。一階は電気つけてなかったから薄暗い。

「おーい、女子高生」

「こっちでーす」

店舗のほうから声が聞こえた。俺は店舗に向かって明かりをつけた。女子高生は本棚の前で立ち尽くしていた。

「……いっぱい本がありますね」

「古本屋だからな」

俺はレジカウンターの椅子に腰を下ろした。親父が年中座っていたクッションぺらぺらのパイプ椅子。俺も時々は店番なんかをしたりしていて、こんな墓石みたいに硬い椅子に座り続けてよく痔にならないもんだなって思ってた。そういえばここに座るのは親父が死んでから多分初めてで、ここから本棚を眺めるのもずいぶん久しぶりな気がする……って、ちょっとどうかしてるな俺。さっきのノスタルジ気分が抜けてない。そんなことよりだ。すでに女子高生は鞄からメガネ出してかけて、「よし」とか言ってなんか気合を入れていて、それから壁に立てかけてあった脚立に上って一番奥の本棚の左上の本を手に取って、読み始めた。ああ、さては電波だなこいつ。全然意味がわかんねえし。せっかくかわいいのに残念だ。

「ねえ、女子高生」

「なんですかー？」

女子高生はページを繰る手を休ませずに返事をした。次々にページをめくっていく。さては速読マスターか。

「電気暗いから、目悪くなるよ」

「もう悪いから大丈夫です」

女子高生はシャシャシャシャっと素早くページをめくっていく。どうやら活字を読んでいるわけではなさそうだ。

「ねえ、それはなにしてんのかな？」
「ちょっと静かにしててください」
女子高生は最後のページをめくり終わると本棚に戻し、その隣の本を抜き取ってまたページを繰り始めた。俺は二階に上がってタバコとライターと灰皿を持って来て、冷蔵庫からコーラを出して、カウンターでコーラ飲みながらタバコを吸った。親父が生きてたときはこんなこと絶対できなかったな。もし見つかったらぶん殴られる。女子高生は一心不乱に本に目を通している。俺は壁に掛けられた時計を見る。もうすぐ七時。その下のカレンダーは、親父が死んだ四月のままだ。
「じょーしこーせーい」
「なんですか？」
女子高生はむっとした口調で返事をした。
「事情、説明してくんない？」
「私、急いでるんです」
「あのさぁ、ここ俺ん家なのね。で、もう夜なんだわ。そろそろ飯でも食おうかと思ってたりなんかするんだけど、家の中に知らない人がいると落ち着かないんだよね」
「帰れって言うんですか？」
「うん」
「じゃあ、さっきみたいに近所の人に助けてもらいます」
俺の脳裏に魔王の恐ろしいひん剥かれた目玉が浮かんだ。もちろん角付き。
「じゃあ帰れって言わないから何してるのかだけでも教えて。ぶっちゃけ気味悪いんだけど」
女子高生はしばらく天井を見ながら考えて、しょうがないなあっていう感じのため息をついて、本に指を挟んで閉じて、スカートを引っ張りながら脚立に座った。
「喪中って、誰が亡くなったんですか？」
「親父。鉄骨に押し潰されて死んだ」

「ああ、それニュースで見ました。たしか三ヶ月くらい前ですよね？」
俺はうなずいた。でも反応がないので、「そうだよ」と言った。
「大変でしたね…。ご愁傷様です」
女子高生は神妙な面持ちで言った。
「実は、私も喪中なんです。先月、お母さんを病気で亡くして……」
「……ご愁傷様でした」
女子高生はわずかに微笑んでから顔を伏せた。なんていうか、このしんみりした空気ちょっと痛い。
「……えーと、それでうちに何しに来たのかな？手がかりがどうとか言ってたけど」
「私、父親もいないんですよ」
さらにしんみりするな、これ。俺も母親いないけど、別に気の利いたこととか言えないし。
「兄弟もいないんです」
女子高生うつむいたままです。
「それは…、大変だね」
「父親を捜してるんです。お母さんは一人で私を育ててくれたんですけど、父親のことは何も話してくれませんでした。きっと言いたくないんだと思って、私はお母さん好きだし、困らせたくなかったからそのことはこれまで一切聞かなかったんです。だからどんな人なのか、どこにいるのか、生きているのかさえも知らなくて…。でもずっと気にしてたんです」
「うん」
「でもお母さんが息を引き取る間際になって、私、父親のことを尋ねたんです。いま聞かないと一生わからないままだと思って」
「うん」
「お母さん、こう言ったんです。『永友古書店の本のなか』って。それが最後の言葉でした」
「……は？」

「お母さんすっごい読書家で、いっぱい本を持ってたんですけど、一年くらい前にそれをほとんど処分しちゃったんです。多分、この永友古書店に」
女子高生はすうっと顔を上げて、いとおしそうに店内を見回した。
「つまり、女子高生のお父さんは、本？」
身長四十メートル体重一万トンくらいの巨大な沈黙が俺と女子高生の間にずっしりと横たわっていた。やがて女子高生はおもむろに脚立から下りてツカツカと歩いてきて、カウンターにそっと手をついた。
「店長、もしかして相当頭弱い人ですか？」
至近距離から俺を斜めに見下ろして睨みつけてる女子高生。俺はむかついたので今度は目を逸らさなかった。でも言い返す言葉も特になかった。だってわけわかんねえし。やがて女子高生は視線を落として長いため息をついた。灰皿の中の灰が舞い散ったので、俺は女子高生に見せつけるようにそれを静かに指で払った。
「たぶん、お母さんがここに売った本のどこかのページに私の父親の名前か連絡先が書いてあると思うんですよ」
出たよ超拡大解釈。俺は苦笑いながら頬杖をついた。
「そんな深い意味ないんじゃないの？」
突然、女子高生がカウンターをバン！と叩いたから灰皿が跳ねた。俺は散らばった灰を見ながらコーラを一口飲んで、やっぱりビールにすればよかったと思った。
「だって！お母さんがこの世で最後に言った言葉なのよ！意味がないわけないじゃない！」
ってやべえ！この子なんかすごい怒ってるし。声震えて息も荒いし。顔真っ赤だし。
「ごめんごめんごめん！そういうつもりじゃないんだって。ちょっと落ち着いて――――」
でも女子高生は耳まで真っ赤にして口をぎゅって閉じて鼻膨らませて肩を上下させてて。これあれか？過呼吸ってやつか？よくわか

んないけど。
「っちょっと飲み物持ってくるわ」
俺は走って台所の冷蔵庫まで行って、昼間に買ったパックの野菜ジュースと紙コップを持って来て、まだはあはあ言ってる女子高生の前で急いで注いで手渡した。過呼吸だったら袋とか渡すほうがいいんだっけか？でも女子高生はそれを一息にぐいっと飲み干した。
「まだいる？」
「なんで紙コップなんですか？」
「洗うの面倒だし」
「……エコじゃない」
女子高生はそう言うと、自分で野菜ジュースを注いでコップ半分くらい飲んだ。
「ふぅ。おいしいですね、これ。今度買ってみようかな」
女子高生はにっこり笑って、ごちそうさまって言いながら紙コップをカウンターに戻した。なんか知らんがずいぶん情緒不安定だな。まあ母親なくしたばかりじゃ無理もないか。俺は一応女子高生を目でけん制してから横向いて、二本目のタバコに火をつけた。
「要するに、女子高生の父親を探す鍵はうちの在庫の中にあると？」
「なんだ、ちゃんとわかってるじゃないですか」
女子高生は感心したように言った。つまり俺なめられてる。「どんな本？」と俺は尋ねた。片っ端から見ていくのはあほすぎるだろ。俺だってどこにどんな本が並べられてるかくらいはわかるのだ。
「まったくわかりません」
「まったく？」
「全然」
「いや、全然ってことはないっしょ？お母さんがどんな本読んでたか……」
「わかんない。私、本読まないし」
「小説系なのか、実用書系なのか、写真集系なのかくらい……」
「だから、わかんないんですよ」

この女子高生、まったく悪びれる様子もなく。むしろちょっとイラついてないか？
「だから順番に見てるんです」
「……そか」
俺は煙を吐きながらつぶやいた。なんかタバコが旨くない。まだ半分くらいしか吸ってないけど灰皿に擦りつけて消した。女子高生は壁時計に目を向けた。
「でも、確かにもう遅いですもんね。学校終わってすぐに来たんだけど、ちょっと道に迷っちゃって。今日はあそこの棚だけ調べて、なかったら明日また来ます」
「明日も来るの？」
「はい。みつかるまで来ます」
「俺、明日は出かけるつもりだったんだけど」
「いいですよ。おかまいなく」
そういうわけにもいかないだろ。それに、
「それにさ、店やめるってさっき言ったよね？」
「聞きました」
「本、処分するんだ」
女子高生がきょとんとしてフリーズした。大丈夫？とか言うのもあれなので、俺はパンと手を叩いた。
「……え？」
「処分」
凍りついていた女子高生の表情が、徐々に驚愕の方向に推移して。
「いつ？」
「来週の月曜日に業者が引き取りに来る」
「月曜って、あと三日しかないじゃない」
「今日を入れてね」
女子高生は青ざめた顔で店内を見渡した。大きな店ではないものの、蔵書数は万単位。これらの全ページをチェックするとしたら、とても三日では足りない。てゆうか実質二日だし。

「……それ、延期できないんですか？」
「無理だよ。業者さんも忙しいし」
「だって、そんな、せっかく……」
女子高生はそこまで言うとカウンターに手を掛けたまま、下を向いて黙りこくってしまった。かわいそうだけど仕方がない。俺にできるのはなんとかあと三日でみつかることを祈るだけだ。しばらくすると女子高生はとうとうその場にしゃがみこんでしまって、俺は女子高生の細長い指を眺めながらコーラを飲んでた。年代物の壁時計がコチコチ音を立てて時を刻む。俺が生まれたときからずっとここにかかっていて、いままで気にしたこともなかったけど、結構音が大きいんだな。
「女子高生」
「なんですか？」
「何歳？」
「……高二です」
コチコチコチコチコチコチコチ。それにしても腹が空いたな。
女子高生が突然ばっと立ち上がったから俺若干のけぞった。女子高生は顔を伏せたまま、無言で本棚の前に向かった。父親捜しを再開するのかと思ったら、バッグを拾ってメガネを外した。で、ひどくしょぼくれた様子でまたこちらに歩いてくる。
「帰るの？」
女子高生が俺の真横で足を止めた。
「……コンビニありますか？」
「出て左に真っ直ぐ行ったらあるけど」
「買い物してきます」
飯か。
「っていうことは、また来るんだよね」
女子高生はコックリとうなずいた。
「泊まります」
時計の音がうるさくて上手く聞き取れなかったんだと思う。

「なんて言った？」
「下着とか買ってきます」
「ちょっと待て」
俺は歩き去ろうとする女子高生の手首を掴んだ。女子高生はバランスを崩して、でも踏みとどまって、それから俺を見下ろした。しかも涙目。

4　もうご飯食べていいですか？

散々御託を並べたところで女の子と二人きりでいるときに泣かれようもんなら問答無用でどうにかしようとするのが男という生きものであり、そうしないやつにはきっと赤い血など通っていないはずだ。で、問答無用な俺がとった行動はというと、女子高生をおんぼろライトバンの助手席に乗せて駅前のデパートに連れてった。九時までやってるし。女子高生は下着とかＴシャツとか短パンとかバスタオルとか歯ブラシとかをマッハで買い揃えていたみたいだけど、くっついて回るのもなんなので俺はトイレの前のベンチでなんだかなあとか思いながらぼーっとしてた。せっかく出てきたんだし飯ぐらい食って帰りたかったんだけど、女子高生が、「時間がもったいない」って言うから食品売り場で弁当買って帰った。なんだかなあ。

「店長」

車に戻ると女子高生がすぐに俺に声かけた。てかこの呼ばれ方、一瞬誰のこと言ってるのかわからなくなるな。

「なに？」

「私、もうご飯食べていいですか？」

帰ったらすぐに本探し再開したいんだろうけどさ、

「いいけど、お茶ないよ」

「……やっぱり帰ってから食べます」

俺はそれなりに急いで帰ってやろうという気にはなっていたので、とっとと車を出した。道は結構すいてる。しばらくして信号待ちで女子高生が口を開いた。

「店長」

だから俺はお前のバイト先の店長とかじゃないんだが。

「なに？」

「これって、誰の曲ですか？」

女子高生は車内ＢＧＭについて言及している。このライトバン、

いまどきカセットしか聴けないからｉｐｏｄを接続して聴けるようにしてあるのだ。
「ハービー・ハンコック」
「の、なんてアルバムのなんて曲ですか？」
「スピーク・ライク・ア・チャイルドってアルバムのスピーク・ライク・ア・チャイルドっていう曲」
女子高生は、「ふうん」と言いながら腕を組んだ。
「店長ってジャズとか聴く人なんですね。結構意外です」
だろうな。信号が青に変わる。
「つまんねえだろ。ミスチルとかに変えるか？」
「や、そんなことないです。すごくいい曲だなって思って聴いてました。いろいろな音が複雑に折り重なってて、見逃せないサスペンスドラマみたいです」
「ほう」
味なことを言う。
「はい。今度借りてこようかな。ツタヤとかにありますよね？」
「あー…、そこそこ大きいとこならあるんじゃね？」
ＣＤ貸そうか、って言いそうになったけど、やめた。
次の信号待ちで俺は窓を全開にしてタバコに火をつけた。パワーウインドウじゃないから手動回転。前の車のブレーキランプが消えて、俺は腕を車外にぶらんと出したままアクセルを軽く踏む。
「店長」
「なに？」
「店長って、ヘビースモーカーなんですか？」
「たぶんね」
何か小言を言われたら、「お前に文句言われる筋合いはないわ」って言おうと思っていたけど、女子高生はそんなことは言わなかった。その代わり、俺が車内の灰皿にタバコを捨ててウインドウを閉めた後に、「私もタバコ吸いたい」とかなんとか言った。
「だめ」

「けち」

月極の駐車場に車を置いて、女子高生と家の脇道に入ると裏口の前に人影があって、まずいなーと思ったらやっぱりそれは脩平で、さらにまずいことに未来までいた。

「おー、こーたろー」

俺の姿を見つけた脩平はぶんぶん両手を振り回す。道幅狭いんだから壁に手当たってるの気にしろよ。引き返したいけど無理だな、これは。

「おー。どしたの？未来まで」

俺は右手を上げて、普段通りの調子で返事をする。

「今日はアタシ休みだから、久しぶりに三人で普通に飲みに行こうと思って」

「そーいうことよん。電話ぷるぷるしてもこーたろーでてくんないからきちゃったよー」

あ、あと脩平は終始こんな口調です。

「わりい。携帯置きっぱだったわ」

「てか、それももういいわ。その背中に隠れてる子はどこの子？見たところ高校生だけど」

未来がにたぁっと笑って俺の後ろで小さくなってる女子高生を指差した。

「こーたろー、どこから持ち帰ってきたんよー？」

「あー、親戚の子。ちょっと遊びに来てるんだ」

「親戚ー？でも親父さんの葬式のときにはいなかったよねー？」

脩平って女のことになると無駄に目ざとくて、ちょっとうざい。

「あのときは、ほら、ちょうど修学旅行とかぶってて———、な？」

俺は苦し紛れに女子高生に振っちゃって、女子高生はあたふたしながら素早く二回うなずいた。

「親戚って、どういう親戚？」

依然にやけてる未来が言う。
「あーと、母さんの妹の娘？」
語尾上げちまった。
「てことは、いとこだ」
「そう、いとこ」
「名前は？」
えー、名前、聞いてねえし。まずいな、なんか適当に名付けるしか――――。
「茉莉子です」
女子高生がちょい大きめの声で言った。それから斜め前、俺の隣に歩み出る。
「こーたろーくんのいとこの、大宮茉莉子っていいます」
うーわーあー。女子高生改め大宮茉莉子とやらは未来と脩平に笑いかけてるけど、俺の名前ちげーから。墓穴掘ってますから。
「茉莉子ちゃんは、こーたろーと仲いいんだ？」
未来お姉さんが勝ち誇ったように笑っています。
「はい」
もう余計なこと言うな、茉莉子。
「茉莉子ちゃん、かぁいぃねぇ」
よだれ垂らしそうな脩平に首を傾げて微笑みかける茉莉子。俺はもう気が気でなくて、早くうちに入りたい。
「茉莉子ちゃん、気をつけてね」
未来が茉莉子に視線を注いで、続いて俺を見る。
「こーたろーお兄ちゃんは茉莉子ちゃんにいやらしいことするかもしれないよ？」
「しねーよ」
俺は半笑いで否定する。
「そうですよー。こーたろーくんと私は兄妹みたいな関係ですから」
また余計なことを言った茉莉子も俺にならって半笑い。
「でも、いとこって合法だよ？」

なんか未来、マジで怖い。
「……未来やめろ。この後まったく無意味に気まずくなる」
現に茉莉子は隣で引きつった笑みを浮かべてたり。
「そうだよねぇ？ごめんねぇ。脩平、行こ」
未来は通りのほうに歩き出した。俺と茉莉子は壁に寄って道をあける。
「えー？茉莉子ちゃんもいっしょに飲みに行きゃいーじゃーん！」
「うっさい！あんたアタシと二人じゃいやなの？」
「やなわけないじゃーん！」
脩平は変な走り方で未来の後を追いかけていった。あー疲れた。とりあえずどうにかなったけど、後日突っ込まれるの確定だわこれ。
「こーたろー！」
行ったと思った未来が角から顔を出してる。
「晴香に言っとく」
そう言って未来は顔を引っ込めた。脩平の奇声が段々遠くなっていく。俺は壁にもたれてため息をついた。って、そういや晴香ちゃんにメール返してねえな。
「ナイス演技だったでしょ？」
茉莉子は得意気な顔で俺見てるけど。見てるけどさ。
「……中、入るぞ」
俺は鍵を開けて扉を引いた。

5　なんか悲しいね

「こーたろーじゃない？」
俺は温めすぎてしなびたエビフライを噛み潰しながらうなずいた。
「だってあの男の人、こーたろーって言ってたよ？」
「脩平は喋り方バカだからそう聞こえるんだよ。俺は虎太郎だ」
「でもきっとばれてないよ。二人ともいとこだって思ってるよ」
「いや、未来は絶対気付いてたね。聞こえよがしにこーたろーこーたろーうるさかっただろ？」
茉莉子は、「うーん」って言ってから麦茶を一口飲んだ。ちゃんとガラスのコップに入れたやつ。
「じゃあ今度会ったとき大変だね」
なにその私とは関係ないみたいな言い方？まあそうなんだけどさ。あー、なんか食欲なくなってきたな。
「店長」
「なに？」
「こたろーって、どんな字書くの？」
「虎に普通の太郎」
「タイガー太郎？かっこいいじゃん」
「ちなみに親父は龍太郎。じいさんは獅子太郎」
「すごーい！じゃあさ、もし男の子生まれたらなんて名前にするの？」
俺は少し考えて、
「第一候補はつば九郎だな」
茉莉子は首を傾げた。さっきからよくしてるけど、クセなのかな。
「なんで九郎？てか、つばってなに？」
「わかんないならいいよ」
茉莉子はくちびるを尖らせて、「ぶー」って言った。うける。そんなんマジでする奴いるんだな。未来が変なこと言うから無駄に意

識しちまうし。よくないよくない。
「茉莉子ってほんとの名前？」
「本名だよ。大宮茉莉子」
「ふうん」
「ふうんって、それだけ？」
「素敵なお名前ですね」
「ありがと」
茉莉子はアルカイックに微笑んだだけで、そのあとは何も言わずに黙々と箸を進めた。そういえばさっきからタメ語使われてる。別にいいけどさ。それだけ距離が縮んできたってことだろ。縮めてどうするって話もあるけど。
弁当を食い終わると俺はもちろん食後の一服。茉莉子は早速本探しを始めた。俺は風呂を沸かして、茉莉子と反対側の壁沿いから手をつけることにした。でも一冊目でいきなりめげそうになった。この作業、想像以上にめんどくさい。心の軸をべっきべきにへし折ってくれるわ。これを三日で数万冊なんて、やっぱりちょっと無理じゃないか？
「あれ？ていうか店長」
「なに？」
「手伝ってくれるの？」
「一人じゃどう考えても終わんねーだろ、これ」
まあ二人でも終わんねーけどな。
「店長！」
「でかい声出すな。もういい時間なんだし」
「店長、実はいいやつなんだね」
いや、いまさらそんなこと言われても逆に傷つくだけなんですけど。
「最初はどうしようもないろくでなしだと思ってたけど、本当に助かります」
俺は背中を向けたまま手をひらひら振って茉莉子に答えた。

「一個でも書き込みがあったら私に報告してよ。私、お母さんの字は見ればわかるの」
「わかった」
「でも、絶対に見落としとかしないでよ」
「わかってるよ」
「ページ飛ばしもやめてよ。二度チェックしてる余裕ないんだから」
「わかってる」
「これはないだろって本もちゃんと調べてよ。案外そういうところに本物が眠ってて――――」
うるさいな。
「おい女子高生」
「茉莉子」
「おい茉莉子」
「なに？」
「先に風呂入っちゃえば？」
「えー、後でいいよ」
「遠慮すんなって」
「や、私が入った後のお風呂で店長何するかわかんないし。残り湯ボトルキープとかされるのやだし」
「……」
このガキ。
「怒った？半分は冗談だから気にしないでね」
「……先入るわ」

風呂から上がると茉莉子はまだ脚立の上でフルスピードでページめくってた。すなわちまだまだ最初の本棚の最上段なのだ。
「お先ー。湯、冷める前に入れよ」
俺は頭拭きながらカウンターの親父椅子に座った。つか俺、なんで急にこんな喋り方してんだろ。これって一番風呂絶対主義な親父

が俺に毎晩言ってたセリフなんだが。
「店長の入ったお風呂にはなんか変なの浮かんでそうだから入りたくない」
茉莉子は俺を見ようともせずに事務的に言った。ピキッときた。なんか変なのってところにピキッときた。
「っじゃあ入んじゃねーよ！」
茉莉子はゆっくりぐるっと首を回して俺をじーっと睨んで睨んで、脚立からぴょんと飛び降りた。それからさっき買ってきたデパートの袋を抱えて俺んとこ来た。
「いちいち怒鳴んないでよね。冗談だってわかんないの？」
「うっせ、家出娘が」
茉莉子は目をつむって斜めに首を振った。
「ハサミ」
「あ？」
「ハサミ貸して！タグ切るの！」
俺はレジのペン立てからハサミを抜き取って茉莉子に渡した。茉莉子はカウンターの上に袋の中身を出して、プチンプチンとタグ切って、ハサミをカウンターに叩きつけるように置いて、何も言わずに風呂に向かった。つか新品とはいえさっき会ったばっかの男に惜しげもなくパンツ見せんなよな。もうちょっと幻想抱かせろや。俺は茉莉子の背中に、「お湯抜いといてなー」ってまた親父みたいな言葉をかけて、置きっぱなしのタグとピンをゴミ箱に誘導してからタバコに火ぃつけようとしたんだけど、そういえば昼にスーパーでハーゲンダッツ買ったことをナイスなタイミングで思い出した。一個しかないから食うなら今だ。俺は冷凍庫からスペシャルハイクオリティなバニラアイスを取り出して、戸棚からうちの食器で一番かっこいい銀のスプーンを持って来て、レジカウンターで食べ始めた。うまい。知ってるけどやっぱり異様にうまいよ。マジ二十世紀最大の発明。
「あー！ダッツ食べてるー！」

「ってお前早ぇーだろ！」
見ると買ったばっかのTシャツ着て短パン履いた茉莉子が駆け寄ってくる。タオル被ってるけど髪べっちゃべちゃ。
「なんなのお前？五分くらいしかたってねーじゃん。ちゃんと洗ってねーだろ。絶対女子じゃねーよ。いまどきスポーツ刈りでももっと時間かけるっつーの」
「だって時間もったいないんだもん。それよりダッツー」
「ダッツ言うな。ルーベン・マタスに失礼だろ」
「私の分は？」
「ないから今食ってんだろが」
「なにそれずるい。私もダッツ食べたいもん」
「ないもんしょうがねえだろ。これは俺が俺用に買ったの」
「じゃあ半分ちょうだい」
何がじゃあ？
「嫌だね」
俺はスプーンくわえてひょこひょこさせながら言った。茉莉子がちょっとあごをひいたから、タオルで顔が見えなくなった。
「……ねえ、店長」
「なに？」
「……私、冷たくされるとすぐ泣いちゃうんだよ。ぐすん」
「———食え」

嘘泣きで俺からダッツを強奪した湯上り小娘は元気一杯で本捜索を再開した。鼻歌まで歌ってやがる。ちくしょう。俺は悔しいからタバコを二本根本までゆっくりしっかり吸い込んで、さっきの続きからページを開いた。やっぱり立って読むのはしんどいから何冊かカウンターに持って来て椅子に座って調べてる。さっきも言ったけどこの作業、精神的に相当きつい。すべてのページにくまなく目を凝らさなきゃいけないし、一ページの見落としも許されない。そう

いう前提で本棚を前にしたときの威圧感とか無力感って結構すごい。自動小銃一丁持ってキングギドラに立ち向かうみたいな気分なんだ。どこにどんなことが書いてあるのかもわからないし、ちょっとでも書き込みが見つかったら茉莉子に見せて、「違う」とか、「関係ない」って言ってもらう。しかも途中でおもしろそうな文章みつけるとちょっと読んじゃったりなんかして、三百ページの本一冊調べるのにだいたい十分くらいかかる。気合入ってる茉莉子は俺の倍くらいのスピードで進めてるけど、やっぱり三日じゃ厳しいよな。もうすぐ日付変わるし。全部調べる前にみつかってくれればいいんだけど、探してる本がすでに売られている可能性ももちろんあるわけで、その場合はもうお手上げだ。第一、うちの本の中に父親を探す手がかりがあるっていうのも単なる茉莉子の妄想かもしれないし。電波系だから。まあ、つべこべ言わずにやりますけどさ。二時過ぎに茉莉子はようやく最初の本棚を調べ終えて、俺のところまで聞こえるでっかいため息をついた。どうやら収穫はなかったようだが、それ以上に途方に暮れてもいるのだろう。なんか痛々しいため息だった。

「茉莉子ー」

「なに？」

「ちょっと休めよ」

「休んでられないよ」

茉莉子はカウンターの俺に弱々しく笑いかけてから脚立に上って、隣の本棚の最上段に手を掛けた。

「店長」

こっち見ないで茉莉子が言う。

「んー？」

「眠かったら寝ていいよ」

「まだ大丈夫」

「今日は何時に起きたの？」

「だから布団取り込んだときだって」

「あのとき寝てたの？」

「うん」
「店長って布団干しながら寝るんだ」
茉莉子はあきれたように言った。言われてみればおかしいな。
「さすがだね」
「うっさい」
「晴香ってだれ？」
「あ？」
「晴香に言っとくって言ってた。あの人」
未来の去り際の一発か。なんでいまさら突っ込む。てかメールまだ返してねえ。
「彼女？」
「違う」
「じゃあ片思いなんだ」
「高校の頃にちょっとな」
不自然に間が開いた。
「今は？」
「今は別に好きじゃない。でも時々デートする」
茉莉子は脚立の上で俺に背を向けたまま首を傾げている。
「よくわかんないけど、なんか悲しいね。そういうのって」
俺が何も言わなかったので会話はそこで途絶えた。言えることがなかったんだ。でもなんて言えばよかったんだろう。別に悲しいわけじゃない。ちょっとセンチメンタルな気持ちになるときはあるけどさ、それって悲しいってことなのかな。
ずいぶん後で俺は自分だけに聞こえる声で、「仕方ない」って言った。

五時前に茉莉子が寝た。そのとき俺は不覚にも昆虫図鑑に見入ってて、このトリノフンダマシってやつが蜘蛛の仲間ってほんとかよ、とか思いながら顔を上げると、茉莉子が本棚の前で丸まって寝息を

立てていた。茉莉子は学校が終わってから来たって言ってたから、たぶん二十時間以上起きてるはずで、さすがにそりゃもう限界なのだ。そのままタオルケットでも掛けて寝かせてやろうかとも思ったけれど、タイル張りの床なんかで寝てちゃ疲れも取れないだろうから、俺は物音立てないように気をつけながら二階に上がって、親父の部屋のエアコンつけて布団を敷いた。死んだおっさんのにおいが染み付いた布団だけど、これしかないから仕方がない。で、茉莉子の肩叩いてとりあえず一回起こそうとして、でも寝顔かわいかったからしばらく見てた。そしたら茉莉子をほったらかしにしている父親という奴に対する怒りがふつふつと沸いてきた。もしこの父親捜しがうまくいったら、俺も一緒に茉莉子の父親に会いに行って、何か言ってやったほうがいいかもしれない。うん、言ってやろう。俺なんてとても褒められた人間じゃないが、それでもどういう事情であれ、実の娘を十七年も無視し続けるなんてことは絶対にしないと思うから。ていうかその父親って茉莉子の存在すら知らない可能性もあるのか。あー、すげーやるせない。俺は茉莉子の鼻をくいっとつまんだ。茉莉子は眉間を狭めてまぶたとくちびるをひくひくさせてから俺の手を払ってうっすらと目を開けた。

「寝るならちゃんと布団で寝ろな。階段上ってすぐ左の部屋に布団敷いたから。あとこのトリノフンダマシってやつ見てみろよ」

茉莉子は半目のまま両手をついてもそもそっと身を起こして、シャツに手を入れて背中をかきながらふらふらと階段を上っていった。トリノフンダマシの件はスルーされた。俺は危なっかしい後ろ姿を見送って、あくびをしながら図鑑を閉じた。どうにか俺も本棚一つ分は調べ終えることができたけど、得るものは何もなかった。ふと思い立って俺はシャッターを上げて外に出た。夜はもう明け始めていて、涼しくって、鳥が鳴いてる。俺は誰もいない商店街の真ん中に立って、タバコをくわえて真上を見上げた。遥か遠くに白い三日月が浮かんでいて、俺はタバコに火をつけないままずっと白い月を見てた。そのうちタバコも吸いたくなくなって、箱に戻して振り向

いた。それから『永友古書店』っていう見慣れた群青色の看板を月を見るよりも長く見てた。

七時まで続きをやってたらさすがに俺も眠くなってきた。一応書き込みがあったものをよけておく。茉莉子が起きたらチェックしてもらうけど、たぶん全部関係ないだな。俺は洗面所で顔洗って歯を磨いて、二階に上がって自分の部屋の襖を開いた。干したばっかりでいいにおいがする俺の布団で茉莉子が気持ち良さそうに眠ってた。

「上がって左の部屋って言っただろが」

俺は小声で不平を言いながら、エアコンつけて、茉莉子に布団掛けてやって、部屋を出た。で、親父臭い布団に包まれて寝た。

6　一緒にどっか消えてよ

親父のにおいが染み付いた布団で寝たからといってかならずしも親父の夢を見るわけではないし、当然枕元に立たれたりもしない。いつもよりも不快な寝汗をかいているのは、親父の部屋のエアコンの効きが弱いからだ。たぶん。普段なら夕方くらいまで寝ちゃってもおかしくない時間に眠り始めたのに、俺が目を覚ましたのは十二時半で、もちろん昼で、しかも一発で見事に覚醒していた。二度寝なんか請われてもできそうにない。俺は上半身を起こして肩と腕の筋を引っ張って、立ち上がってアキレス腱を丹念に伸ばして、親父の部屋を出て俺の部屋に入った。当たり前のようにそこには誰の姿もなく、ベッドは俺がセットしたときよりもきれいに整えられていた。俺はカーテンを開けて窓開けて、手すりにもたれてタバコをくわえて火をつけた。非常にいい天気なんだ、今日も。で、結構張り切ってたりするんだ、俺。でもうちの前に停まってる黄色いミニクーパーはなんだろ。ツレにあんなの乗ってる奴いないし、シャッター閉まってるからって勝手に人ん家の前に停めんなよな。まあいい。すぐにでも茉莉子の本探しを手伝ってやりたいとか思ってるんだけど、『おはよー！お待たせ！よーし、じゃあ今日もバリバリやりますか！お母さんの本、絶対見つけような！』みたいな感じを出すのもそういうふうに思われるのも恥ずかしくて嫌で、ごく普通にいつもどおりぐっすり熟睡してからだらだら起きましたみたいな感じで、寝ぐせも直さず頭の後ろを掻きつつあくびをかみ殺すふりまでしながら階段を下りていくと、暑いからかシャッターの下半分が開いてて、メガネな茉莉子が昨日からさらに本棚二つ分進んで左の壁面の入り口側の棚の前で脚立に上って分厚いハードカバーに目を落としてて、でもすぐに俺に気付いて顔を上げた。

「あ、おそいよー、虎太郎くん」

あい？なによその呼び方。

「おそいよ。永友くん」
別に茉莉子が言い直したわけじゃない。カウンターの親父椅子で脚組んでたんだ。フリフリ白ピンクなキャミソール着て、茶色い髪をアップにしてる、プラダのトートバッグを持った、顔もスタイルも完璧なお姉さんが。
「あれ、晴香ちゃん？」
「おはよ」
晴香ちゃんはにこーっと俺に笑いかけた。あー、とりあえず俺も笑おうとするんだけど、なんか顔ひきつる。やっぱり寝ぐせ、直せばよかった。
「おはよう」
「メール返してくれないから、迎えに来ちゃった」
「あ、そう」
うえ、気まず。顔見れん。
晴香ちゃんはゆっくりと首を動かして、茉莉子にきれいな顔を向けた。茉莉子はさっきからこっちをちらちら見てたんだけど、晴香ちゃんと目が合うと慌てて本に目を戻した。
「いとこ、なんだって？」
「うん。母さんの妹の子どもだから」
「それは間違いなくいとこだね」
「うん」
晴香ちゃんはカウンターに頬杖をついて、アイスシャーベットみたいな微笑を浮かべてじいっと俺を見上げてて、やっぱり全然目が合わせられません。そしたら茉莉子と目が合って、茉莉子はため息ついて脚立から下りて本を裏向けて置いて、メガネを外しながらこっちに向かって歩いてきた。
「虎太郎くん、お風呂の窓が閉まらなくなっちゃったんだけど、見てくれない？」
えらい微妙な助け舟だな、おい。たぶんわざとだ。
「おーおー、それは大変だな茉莉子。晴香ちゃんごめん、ちょっと

風呂の窓閉めてくるから待ってて。すーぐ戻ってくるから。ちょっとしたコツがいるだけなんだ、俺ならすぐに閉められるけど、慣れてないと難しいんだよ。ついでにコツも教えてくるからさ」
聞いてる晴香ちゃんの表情に特に変化は見られなくて、何の言葉も発さず、一ミリもうなずかなかったけれど、とにかく俺は茉莉子と一緒に風呂場に向かった。
「なんなのあの人？」
「なんで入れたんだよ」
「だってめちゃめちゃ押しが強いんだもん」
茉莉子はパッツン前髪をかき上げてそのままてのひらで押さえてた。あー、おでこ初めて見たかも。
「二時間くらい前に来て、虎太郎くんはまだ寝てます、って言ってるのに起きるまで待つって言って聞かなくて。しかも私がいとこって全然信じてないっぽくてなんかいろいろ聞いてくるし、ずーっとあそこから私のこと見張ってるの。すっごい緊張する」
「マジか」
「昨日言ってた晴香さんでしょ？」
「うん」
「約束、してたんでしょ？」
「してねえよ」
「うそ。約束したのに連絡くれないって言ってたよ」
したのか？約束したのか俺？ひょっとして酔っ払ってて覚えてねえとかそういうことか？
「メールも返してくれないって。なんで返さないの？」
てかこの子なんで怒ってんの？
「なんか、めんどくさくて」
「なにそれひどい」
確かに。茉莉子は腰に手を当てて、脱衣場の床を足の裏でぺしぺしと叩いた。
「とにかく、どうにかしてよ。見られてると作業効率が著しく低下

するの」
「帰れなんて言えるわけないだろ」
「そんなこと言えなんて言ってないじゃない。一緒にどっか消えてよ」
俺を見上げる茉莉子の目が据わってる。で、俺微妙にへこむ。
「俺、今日は一日本探し手伝う気になってたんだけど」
「そう思ってるんだったら、あの人連れてどっか行ってきて。それ以上の助けはいらないから」
連れてけったって、これから晴香ちゃんと二人きりになるなんて想像しただけでも胃が痛むんだが。でもたぶん、そうするしかなさそうな状況なのはわかる。昨日のうちに俺が断りのメールを入れておけばよかっただけの話なのだ。すべては俺の怠慢ゆえに。
「……わかったよ」
俺はため息をついて脱衣場を出た。
でもここ、俺の家なんだけどな。

店の前にあったピカピカイエローのミニクーパーはやっぱり晴香ちゃんので、運転席に乗り込んだ晴香ちゃんは茶色いサングラスを掛けてスマートにドライブを始めた。速攻で髭剃って着替えて寝ぐせを直した俺は、まだまだ結構困惑していた。晴香ちゃんがうちに来たことなんていままでなかった。未来たちと一緒に来たこともないし、俺が晴香ちゃんと会うのは駅のキャバクラと、休日の繁華街だけだったのに。だから俺は晴香ちゃんがこんな車に乗ってることも知らなかったし、だいたい免許持ってるイメージもなかった。この車もどっかの誰かに買ってもらったのかもしれないな。すげえ新車の匂いするし。ひょっとして二台目は俺に買わせる算段なのか。怖ぇ。晴香ちゃんは走り出してから一言も口を開かない。運転に集中しているから、というわけではどうやらなさそうで、沈黙を和らげるものはステレオから高音質で流れる耳障りなポピュラーミュー

ジックだけだった。やがて俺は空気の重さに耐え切れなくなって、ウインドウを数センチ開けた。涼しい車内にむっとする外気が流れ込む。夏だ、完璧に。
「夏だね」
先に沈黙を破ってしまったのは、俺だった。晴香ちゃんはサングラスの上の細い眉をピクリとだけ動かした。
「あの子、だれ？」
まだ黙っときゃよかった。
「いとこの茉莉子ちゃん」
「嘘」
嘘ですけど。
「嘘じゃないよ。母さんの妹の娘さんで、いま高二。昨日から遊びに来てるんだ」
「未来ちゃんに聞いたよ。こーたろーくん、だっけ？」
やっぱりそれか。
「なにそれ？」
「昨日あの子が永友くんのことそう呼んでたみたいじゃない。何回も。普通はいとこの名前って、間違えないよね」
「あー……、なんか昔からそう呼ばれてるんだよ。実名に似たニックネームっていうか」
「でもさっきはちゃんと虎太郎くん、って呼んでたよね」
「いやだってさ、未来たちの前でこーたろーって呼ばれんの恥ずかしかったからさ、昨日の夜に『もうこーたろーって呼ぶのやめれ』って注意したんだよ。お前は脩平かっつって。はは」
「ふーーーーん」
晴香ちゃんはネイルが光る右の指先でステアリングをそっと撫でて、それから左手で髪を耳にかけた。こんなときになんだけど、一個一個の仕草がすげーきれい。
「あの子、ずーっと本めくってたけど、何やってるの？」
「――タバコ吸っていい？」

「我慢して」
晴香ちゃんは厳格な口ぶりで言う。
「ちゃんと質問に答えてね」
「本の状態チェック」
ああ、意味がわからん。
「状態チェック？」
「本をさ、処分するんだね、今度。で、その前にページが破れてないかとかのチェックをちょっとずつやってるんだけど、茉莉子にはその手伝いをしてもらってるんだ。手伝いっていうか、どっちかっつーとアルバイト」
「へー、あの子バイトしに来てるんだ」
「そうそう」
「じゃあ最初からそう言えばいいじゃない」
「あー、まあね」
「いくら払うの？」
「日給一万円」
「結構出すのね」
「まあ、いとこだし。お年玉みたいな」
作り笑いのしすぎでほっぺたつりそうです。
「あの子、どこから来たの？」
「え？」
「泊まりで来るってことは、この辺じゃないんでしょ？」
晴香ちゃんのくちびるがしゅるると魔的に吊りあがった。
さて、困ったよこれ。茉莉子が昨日言ってた住所は泊まりがけで来るにはちょっと不自然な距離だ。だから俺が寝ている間に晴香ちゃんが茉莉子に同じ質問をしていたとすると、茉莉子は晴香ちゃんに嘘の住所を言っている可能性が高い。ということは俺ピンチ。
「どこなの？」
赤信号でクーパーをやさしく停車させ、晴香ちゃんは勝利を確信したような笑みを浮かべて俺を見た。

どこだ？どこって言った茉莉子？考えろ。たぶんなんかわかりやすい、俺にもわかる取っ掛かりがあるはずだ。えーっと、茉莉子。大宮茉莉子。

「埼玉」

汗が一滴、頬を伝う。

「……合ってるか」

晴香ちゃんは口惜しそうにつぶやいた。なんていうかビバ大宮だ。

「タバコ、吸っていいわよ」

よーしよしよし。どうにか切り抜けられたっぽい。俺は窓を全開にして、タバコをくわえて火をつけた。あー、実に旨い。

晴香ちゃんはどこに行くのか言わなかったし、俺も特に尋ねる気がなかった。ただ、市街地とは逆方向に進んでいたので、今日はあまり金を使う心配はなさそうだなとか思いながら当たり障りのない雑談。一時間くらい走ってたら海に着いた。俺たちは海辺のお洒落なレストランで遅めの昼食を取って（もちろん支払いは俺）、サーファーの群れを眺めながらのんびりと海岸を歩いた。サーフィン。俺が中学と高校のときに二度挑戦して、その醍醐味をまるで理解できないままに終わったスポーツだ。スケボーは結構できたんだけどな。歩きながら、晴香ちゃんはよく笑った。高校時代も最近もどこかおっとりながらもクールでアジアンな美しさと上品さを兼ね備えた彼女だけれど、なんか今日は子どもみたいによく笑った。俺と晴香ちゃんは高校の頃の話をした。でもやっぱり高校時代の俺たちの間には、高一のときに同じクラスだったということ以外の接点を見出せなくて、だからあんまり話は弾まなかった。あの英語の先生がどうだったとか、そんな話しかできなかった。それがわかりきっていたから、いままでそんな話を持ち出したことはなかったのに、どうしてか今日はそういう話がしたくなって、俺から切り出してしまった。理由はだいたいわかってる。茉莉子が高校生で、俺はそれが

懐かしくて、きっと、うらやましかったのだ。だから高校一年のときにこんなふうに晴香ちゃんと話せていたら、こんな気持ちで二十歳の晴香ちゃんと海岸を歩くことはなかっただろうなって思う。言うなればセンチメンタリズム。晴香ちゃんはきれいだし、並んで歩いてると自分のランクが上がったみたいな錯覚を覚えるけど、でもそれだけだ。どっちかって言うと、早く帰って本探したい。

五時前に車に戻って、来た道をまっすぐ帰った。話題はとっくに尽き果てて、俺は失礼だとは思いながらも携帯電話をいじりながら重厚な沈黙を散らし続けた。日はだんだんと暮れてきて、それでも晴香ちゃんはサングラスを外そうとしなかった。やっぱり今日は様子がおかしい。もしかするとまだ茉莉子のことを気にしているのかもしれない。でもどうして晴香ちゃんがそんなこと気にする必要があるんだろ？って、俺がスポンサー撤退するとまずいからか。

もうすこしで地元の駅を通過する、というところで晴香ちゃんは無言で車を横道に入れた。その意図はわからなかったけれど、俺たちはもう一時間くらい黙りっぱなしだったから、なんとなく声かけづらくて、俺は何も言わなかった。晴香ちゃんはホテルの駐車場に車を入れた。

「あの、お嬢さん、何してるですか？」

「ちょっと休憩」

晴香ちゃんはようやくサングラスをとって、シートベルトを外しながら俺を見た。地下だから薄暗くて顔が見えにくいけど、なんか笑ってるっぽい。

「もうちょっといいよね？」

結局それかよ。

俺はなんかイラっとして、へらへら笑った。

「今日はいいよ。何も買ってないし」

「え？」

「だから、お返ししてもらうようなことしてないからさ」
「……永友くんの言ってる意味がよくわからないんだけど」
晴香ちゃんは右、左、とメトロノームのように順番に首を傾けた。
あー、なんかキレそう。
「ああ、それともそのバッグのお礼は分割なんだ」
俺は窓枠に肘をついて、バックシートのプラダのトートを指差しながら言った。
「ねえ、さっきからなに言ってるの？」
晴香ちゃんはまだ笑ってる。でも笑顔の質は少しずつ変わってきてた。
「金づるは定期的に餌与えないと飛んでっちゃうもんな」
「……そんなんじゃないよ」
「そんなんじゃねーだ？」
晴香ちゃんがビクッと肩を震わしたのがわかったけど、でももう止まらない。
「よく言えるよ。せっかく無視してんのに人ん家まで押しかけてきやがって。ふざけんなよ、なあ！お前俺がバッグとか買ってやんなかったらぜってー俺と寝ようとか思わねーだろ！つかそんでもやらせねーもんな！マジでいい加減にしろよ！今日だって俺は一日中茉莉子の手伝いするつもりだったんだよ。それなのにわざわざ海まで連れまわして何の意味もねーカスみてえな話してさあ、やっと帰れると思ったら今度はホテルだ？やってらんねっつの。今度はなに買わす気だよ？フェラーリか？ああ？この車はどこのエロ親父に買わせたんだよ？」
溢れた感情過剰にぶつけて、明らかに言い過ぎなのはわかってたけど、後で自己嫌悪になるのもわかってたけど、止められなくて、止める気なくて、てかちょっと気持ちよくなってきてて、晴香ちゃんは体こっちに向けたまま、うつむいて鼻すすってた。
「……自分で、買ったもん」
晴香ちゃんは指の背で涙を拭った。

「……いっぱい働いて、お金貯めて、やっと今週納車してもらって……、だから、うれしくって、永友くんとどこか行きたくって……」
「そんなん信じるかっつの。俺も『ひなの』のスポンサーの一人なんだろが」
「違うよ…」
「だったら二十万もするバッグせびんなよ！」
「買ってなんて言ってないよ。いいなって言ったら永友くんが買うよって、私はいいって言ってるのに……」
「じゃあ返せよ。ヤフオク出すから」
晴香ちゃんは泣きながらバックシートにぶるぶる震えてる手を伸ばして、俺が買ったトートバッグを逆さにして中身をばら撒いた。で、それを俺に突きつける。
「……やっぱいらねーよ」
でも晴香ちゃんは俺にバッグをぎゅーって押し付けてくるから、俺はそれを抱えるようにして受け取った。晴香ちゃんは俺を見ながらくしゃくしゃの顔して無理矢理笑った。
「……今日は、ごめんね。本当にごめんなさい。どうしても最初に助手席に乗ってもらうのは、永友くんがよかったの。本当に無理言ってごめんなさい。茉莉子ちゃんにも謝っておいてね……」
二人きりでいるときに女に泣かれて冷たくできるような男には赤い血が通っていないと思う。きっと俺の血は紫だ。俺は空っぽのバッグを持って助手席を降りて、タバコを吸いながら歩いて帰った。

7　大好きだったんだね

そんなに遠くないと思ってたのに歩いたら一時間かかった。シャッターはまだ下半分が開いたままで、中から明かりが漏れている。シャッターをくぐって店内に入ると、メガネスタイルの茉莉子が壁面真ん中の本棚の前にいて、相変わらず真剣な、でも確実に朝よりも疲れてる顔でページをめくり続けていた。

「まだみつかんないのか」

「わ？」

声かけたら茉莉子は肩をビクンと揺らして俺を見た。そのビクつき方からさっきの晴香ちゃんを勝手に連想して憂鬱になる。

「びっくりしたー。おかえり、店長」

「ただいま」

「デート、楽しかった？」

「全然」

茉莉子は顔をしかめてメガネを外してこっちに来た。

「それって、晴香さんのバッグでしょ？」

「返品された」

茉莉子は俺からバッグをひったくった。

「てかこれプラダじゃん。こんな高いのプレゼントしたの？やっぱ保険金ニートはお金の使い方がクレイジーだね」

俺は茉莉子の隣を素通りして、パンツのポケットから財布と携帯とタバコを出して、カウンターに放り投げた。

「欲しけりゃやるよ、それ」

茉莉子はパタパタ走ってきて、俺の正面に回り込んだ。

「なーに？けんかしたの？」

俺は茉莉子を押しのけて親父の椅子に腰を下ろし、激しいため息をついた。茉莉子はカウンターに晴香ちゃんのバッグを置いて、腕を組んで首を傾げた。

「店長」
「何だよ」
「野菜ジュース、飲む？」
「……飲む」
俺は茉莉子が持って来てくれた野菜ジュースを一息に飲み干して、またため息をつき、テーブルに突っ伏して目を閉じた。
「ねえ、なにがあったの？すっごい聞いてほしいオーラ出てるんだけど」
そんなもん出してねえ。
「茉莉子…」
「なに？」
「俺は、最低か？」
「最低だよ」
鬼かこいつ。
俺は顔をずらして目を開いた。茉莉子が真顔で、てかなんか怒った顔して俺を見下ろしてた。
「なんか知らないけどさ、『最低か？』なんて聞くってことは、自分で最低だって思ってるってことじゃない。それで私に『そんなことないよ』って言ってなぐさめて欲しいんでしょ？そう言ってもらったら安心してまた『俺は最低だー』とか言って、私がもう一度『最低じゃないよ』とかって言って。悪いけど私、そんなまがいものの優しさは持ってないの。そういうのがしたいんならどっかよそでしてきてよ。ぶっちゃけうざいから」
言い返す言葉のカケラすら見当たらないが、強いて言うならここはお前の家じゃねえ。
「……お前、なんかすげえな」
「普通だよ」
俺はカウンターに手をついて、背もたれに身を投げた。
「俺、晴香ちゃんにすっげーひどいこと言ったんだ」
「なんて言ったの？」

沈黙三十秒。
「言いたくないなら、言わなくてもいいよ」
「でも俺、晴香ちゃんに謝らなきゃだわ」
「別にいいんじゃない？」
茉莉子は妙に優しい顔して俺見てる。
「晴香さんのこと好きじゃないんでしょ？だったらいーじゃん。店長がひどいこと言いました。それでおしまい」
「……うん」
「だって彼氏でもない店長にこんな高いもの買わせるようなずうずうしい女なんでしょ？傷が深くならないうちに縁切れてよかったじゃない。バッグもまだきれいだしさ、お店に返品は無理だろうけど、売ればそこそこのお金になるよ」
どうやらそれこそが俺の誤解らしいのだが、それよりなにより茉莉子がそんなことを言ったってことのほうが意外だった。朝のこともあって、あまり晴香ちゃんに対していい印象を持っていないのだろう。でも俺が晴香ちゃんに言った内容知ったら茉莉子も絶対に怒るだろうな。やっぱりちゃんと謝ろう。許してもらえるとは思えないけど、キレながらのサディスティック開眼はいくらなんでもひどすぎた。それでも、だ。いまのところ俺が最も優先しなければならないことは、茉莉子の父親捜しなのだ。
「だな」
茉莉子はちょっと目を細くした。
「じゃあ、また私の手伝いしてくれる？」
「おう。いまはそれが最優先だ」
茉莉子はうれしそうににっこりと笑う。
「ありがと。ご飯まだだよね？すぐ用意するね」
「え、なに、料理？」
「うん。ちりちりのおばさんが来ておいしそうなアジくれたからお刺身にしたの」
魚屋の奥さんか。今度お礼言わなきゃな。てか、

「そんなんできるの？」
「できるよー。母子家庭なめないでよ。ご飯はもう炊けてるから、ちょっとだけ待ってて」
茉莉子は得意気な顔して台所に歩いていった。てゆうか刺身って家で作れるもんだったのか。やっぱりすげーなあいつ。

食卓に並べられたアジの刺身はスーパーで売ってる切り身なんてレベルじゃなくて、身が締まってて、そのくせとろってしてて、素材がいいのか茉莉子の切り方がいいのかたぶんその両方なんだろうけどうまかった。しかも傍らには里芋とこんにゃく煮たやつと海藻サラダと酢の物まで。全部作ったらしい。
「結婚してくれ」
「いいよ」
茉莉子は頬を赤らめて湯飲みに口を付けた。てか断れや。ちょっとドキッとしただろが。
「…それはともかくマジでうまいな。家でこんなまともな飯食うのたぶん母さんが死んで以来だよ」
「え、それってだいぶ前でしょ？」
「十年くらい前」
「虎も龍も料理しなかったの？」
太郎付けろ。
「親父は米炊くしかできなかったからな。俺はパンにマーガリン塗るくらいしかできないし。毎日スーパーの弁当食ってた」
茉莉子は箸から里芋を転がすという演技をしながら俺を見ていた。
「……そんな食生活で二十歳まで生きられるんだ」
「スーパーの弁当はそんなに悪くないぜ。十年食っても飽きがこない」
「うわー、そんな人に料理褒められるなんてなんか複雑」
茉莉子はなんか複雑な表情をした。

「料理覚えようとは思わなかったの？」
「料理漫画読んだときとかはちょっと思うけど」
「もういいわ」
「でも、父子家庭なんてそんなもんだって」
「店長」
「ん？」
なんか言いたそうな顔してたけど、
「……ごちそうさま」
茉莉子は食器を重ねて腰を上げた。

食事を終えると俺は風呂にお湯を張って、台所で食器を洗った。料理はできなくても洗い物くらいはやるって。今晩は茉莉子が先に風呂に入って、しかもなかなか出てこなかった。さすがに疲れがたまっているのか、あるいはまた少し二人の距離が縮まったのかもしれない。その間に俺は今朝七時まで調べていた本棚の続きを探り始めた。ここまでの進捗を本棚の数で表すと、茉莉子が七台、俺が一台半くらい。で、永友古書店の本棚全台数はというと、大小の違いはあるけど合計四十八台だ。これから二人で全力を尽くしたところですべてを確認できるとはちょっと考えにくかった。本棚に入りきらない在庫もあるし、というか理論的に絶対無理なのだ。たとえばうちの在庫数を三万冊として、一冊確認するための所要時間が一分で済むとした場合でも、一時間で六十冊、二十四時間で千四百四十冊。それを三日間寝ずに続けたとしても四千三百二十冊。二人で八千六百四十冊だ。そんな超人的ペースでやっても三分の一もいかないことになる。さすがに厳しいと思うんだけど、どういうわけか茉莉子はみつからないなんてことはまったく考えていないようで、それでいて空元気という感じでもなく、それがなんだか頼もしかった。ま、探している一冊にたどりつきさえすればそこでフィニッシュなんだから、可能性は十分あるよな。

風呂場の扉が開く音が聞こえたのは三十分後のことだった。俺は近づく茉莉子の足音を聞きながらも本棚の前に突っ立て文献を凝視し、ページをめくる手を休めなかった。どういうわけか俺は茉莉子に作業に集中してるっていうことをアピールしたいようなので。茉莉子のぺたぺたという足音は一旦遠ざかり、少し間を置いてまた近くに聞こえるようになってきた。

「お先に」

「おー」

「がんばってるねー、店長」

「ってお前何食ってんの？」

「ハーゲンダッツ。店長の分もあるよ。お風呂上りにどうぞ」

スプーンをくわえて微笑む茉莉子。やばいな。茉莉子が天使か妖精のどっちかに見えてきた。

「茉莉子」

「なーに？」

「結婚してくれないか」

「いいよ」

だから頬染めてうつむくな。気まずくなるわ。こいつ『×××しないか』って言ってもおんなじ反応すんじゃねえか？

「……風呂行ってきまーす」

俺が風呂から上がるとすでに茉莉子はハーゲンダッツを食い終えて、バリバリ仕事を再開していて、俺は意気揚々と冷凍庫に向かったのだが、何故かそこに鎮座していたのはスーパーカップで、もっと言うと風呂のお湯が抜かれていた。いや夏だから別にシャワーだけでもいいんだけどさ、そんなに俺が後に入るの嫌か？一体どんなことしてんだよ、あいつの頭の中の俺。まあ文句を言っても仕方がないし大人気ないし、そもそもスーパーカップだってうまい。俺はシャッターをくぐって外に出て、電柱にもたれて座り込み、スーパ

ーカップ食って、空の容器を灰皿にしてタバコを一本吸って、そのまましばらくぼーっとしてた。営業を終えて明かりの消えた店舗が立ち並ぶ薄暗い商店街。隣の金物屋の二階からお笑い番組を見ている金物屋一家の豪快な笑い声が聞こえる。毎度のことだがそんなにおもしろいか？店内から茉莉子が俺を呼んでいる。俺はカップを拾い上げてシャッターをくぐった。

「店長いつまでさぼってんの？さっさと仕事する！」

「あのさあ、俺かなり手伝う気満々なんだけど、そんな言い方されるとすげーやる気なくすんだわ」

「アイス買ってあげたでしょ？」

なにこの上から目線？

「スーパーカップじゃねえかよ」

「ご飯も作ってあげたじゃない」

「あれはうまかったけどさ」

「……プロポーズも受けてあげたじゃない」

いや、だからそんな顔して胸前で手組み合わせながらもじもじとかすんなって。俺も何も言えなくなるから。てか『受けてあげた』ってそこも上からか。

俺はシャッターを閉めて、カップをゴミ箱に捨てて、開いて置いといた本を手に取った。

「やるよ。あさっての朝までひたすらやる。でも途中でちょっと寝る」

「うん。私も途中でちょっと寝る」

「昨日みたいに力尽きる前に二階行けよ」

「わかってまーす」

「てかお前昨日寝てたの俺の部屋だぞ」

「知ってたけど、あの部屋の布団なんか臭かったんだもん」

「亡き父の遺品を臭いとか言うな」

「でも店長のベッドはいい匂いしたよー」

「干したばっかだからな」

「だから今日も店長の部屋で寝るー」
でへーっと笑う茉莉子に無駄に照れる俺。あーもうこの際だから一緒に寝るか。でもこいつマジで拒否らなそうだしな。言えねえ。
「じゃあ茉莉子が寝る前に部屋キープする」
「ダメだよ私より先に寝ちゃ。私のほうが長く起きてるんだし」
「そういえばお前今日何時に起きたん？」
「八時くらい」
「八時って、三時間しか寝てねーじゃん」
「そうなの？私昨日何時に寝たか覚えてなくてさ」
「五時だよ。大丈夫かよ」
「平気だよー」
疲れた顔してなに言ってんだよ。でもきっと茉莉子には何を言っても無駄で、本を見つけ出すまでは最小限の睡眠だけでやりとおすつもりなのだろう。俺は腰に手を当てて軽く息を吐いて、茉莉子に兄のように笑いかけた。
「おし、コーヒー入れるわ」
「コーヒー嫌い」
そうかい。

その後、カバーを外した裏表紙に電話番号がメモってある文庫本を俺がみつけて、茉莉子に見せたのだが、茉莉子曰く、「お母さんの字じゃない」らしく、それでもお母さんが書いてないかもしれないだろって説得したら茉莉子も納得して携帯取り出して番号プッシュし始めて、メガネ外して顔こわばらせてちょっと手震えてて、夜遅いから明日にしなさいなんて言う気にはなれなくて俺も内心ドキドキしながら離れたところでタバコ吸いつつ茉莉子見つつしてたんだけど、やがて茉莉子は残念なのか安堵したのかよくわからないため息をついて、脚立に腰を下ろした。俺は台所に行って冷蔵庫から野菜ジュースを出してコップに入れて持って来て、茉莉子に渡した。

「はぁー、緊張した」
茉莉子はコップを両手で持って野菜ジュースをちびっと飲んだ。
「出なかった？」
「現在使われておりませんだった」
「でも手がかりっぽいの初めてだな」
茉莉子はコップに口をつけたまま小さく首を振る。
「電話番号はこれで八個目だよ。でもお母さんの字はなかったし、全部ハズレ」
知らなかった。
「それ、かけてみたのかよ？」
茉莉子は下唇を突き出してうなずいた。
「昼間にね。でも全員に気味悪がられた」
嫌な予感がする。
「なんて聞いてんだよ」
「『お父さんですか？』って」
うわ、気持ちわる。
「新手の詐欺くせえよそれ」
「女の人が出たときは、『大宮美奈子をご存知ですか？』って聞いてるんだけど」
それもどうかなあ。茉莉子は脚を組んで膝の上に頬杖をついた。で、くちびるを尖らせる。
「でも、たしかにそうなんだよね。お父さんにとってお母さんとか私っていうのは消去済みの記憶なのかもしれないし」
「なあ」
俺は茉莉子の足の先に座り込む。茉莉子は俺に寂しげな視線を向けた。まったく、こんな娘のメモリーをデリートできる父親なんかいるのかよ。って存在知らない可能性もあるけど。なんかもう許せねえ。
「親父さんに会って、どうするつもりなんだ？」
「家庭を崩壊させる、あるいは、死」

ああ、久しぶりに時計の音が気になってきた。
茉莉子はクスクス笑ってる。
「ていうのは冗談で、どうするかなんてそのときになんないとわかんないよ」
「恨んでるのか？」
茉莉子は困った顔して首を傾げた。それからちょっと笑う。
「見たこともない人のこと恨めないよ。お母さんとその人の間に何があったのか、私は全然知らないから」
なんで実の父親のことをその人なんて言わなきゃいけないんだろ、茉莉子が。
「会えたら、殴ろうか？」
茉莉子はしばらく、股割りに挑戦するフンボルトペンギンを見守る飼育員のような顔付きで俺を見てた。
「そんなことできないよ」
「俺が殴るよ。茉莉子と一緒に親父さんに会いに行って、俺がぶん殴ってやるわ」
茉莉子はじっと自分の手を見ている。組み合わせたり、閉じてみたり、開いたり。
「店長のお父さんって、どんな人だったの？」
「親父？……んー、なんていうか、変わった人だったかも」
「どう変わってたの？」
「すっげー天パーで、背高くって、一番好きな食べ物がお茶漬けのあられとか本気で言う人」
「もっと詳しく」
「釣堀でフナ釣るのが好きで、ボウリングが上手くて、すぐ顎外れて、料理できなくて、ヘビースモーカーで、毎晩野球見ながらビール飲んでて、頑固で融通利かなくて、どうでもいいことにこだわる性質で、車洗うの趣味で、映画のロッキーが好きで、意外とジャズとか聴いてて、でもどっちかっていうとボサノヴァが好きで、蛍光灯交換するのが好きで切れてないうちから換えちゃったりして、蛇

が嫌いで、トマトが食べられなくて、乾電池の捨て方がわからなくて、オレのリポDがねえとかわけわかんねえこと言ってすげーキレ出したかと思ったら、その直後に一人でジブリ見ながら泣いてたりする人」
「それから？」
「なにか思いつくとすぐに実行する人。よく日曜の八時くらいに起こされてさ、乗馬行くぞ、とか、潮干狩り行くぞ、とか、クワガタ取りに行くぞ、とか、プロレス観に行くぞ、とか、相撲観に行くぞ、とかさ、そんな早くからやってねーっつーのに朝っぱらから起こしやがるんだよ。わけわかんねー親父だったなぁ」
茉莉子は真面目な顔して何も言わない。俺は俺で違和感を感じていて、それは茉莉子の表情についてではなくて、自分のついさっきまでの思考についてだ。親父のことを思い出すなんて親父が死んでから初めてなんだ。てか人生初だ。ずっと思い出す必要なんかなくて、うざいくらいそばにいたから。
「店長はお父さんのことが大好きだったんだね」
涙が溢れて止まらない。
「ちょ、おま…、それ反則だろ……」
俺はぶわーって出てくる涙をシャツの肩で拭いながら、茉莉子にも母親のことを思い出させて泣かせてやろうと思った。でもそんなことをする必要はなくて、すでに茉莉子はぼろぼろに泣いていた。たぶん勝手に母親のことを思い出して。茉莉子は組んだ脚を解いて膝をつき、幼児退行したみたいに泣き止まない俺の頭を支えるように、てのひらでやさしく挟んだ。
「……だから店長、私のお父さんを殴らないでね」
俺は茉莉子の小さな手の中でうなずく。
「でも、一緒に会いに行ってくれる？」
「……いく」
茉莉子は俺の頭のてっぺんに額をくっつけた。茉莉子の規則正しい暖かな吐息が俺の前髪を揺らした。俺は、抱きしめてくれたらい

いのに、って思った。でも茉莉子はそんなことはしなかったし、たぶんそれでよかったのだ。
「……辛いね」
「……うん」
「……なんで死んじゃうんだろね」
「……わかんね」
「……わかんないよね」
「……わかんねえよ」
茉莉子の嗚咽を聞きながら、茉莉子のぬくもりを感じながら、俺はまるで羊水に守られているような安らかな気持ちで、涸れるまで涙を流し続けた。

8　奥歯グラグラいってんだけど

どれくらいそうしていたのかよくわからない。時間なんて概念は別次元に転移されてしまっていた。その後、作業を再開した赤い目の俺と茉莉子の間にはさすがに微妙な空気が流れていて、昨日とほぼ同じ時間に茉莉子が充電切れたみたいになって眠るまで一言も口をきけなかった。イコールまともな手がかりはみつからなかった。今日は一旦起こすのも気が引けたので、俺は茉莉子をそっと抱き上げて、幅の狭い階段を静かに上って、迷わず俺のベッドに寝かせた。俺ももう寝ることにして、洗面所で歯を磨いた。いま親父の布団で寝るとまたいろいろ込み上げてきて泣いてしまいそうな気もしたが、でもうちにはそれ以外に布団のストックはなく、茉莉子の隣にもぐり込むわけにもいかないので、俺は覚悟を決めて親父の布団に入った。で、案の定、泣きながら眠った。

そして今日は親父の夢を見た。夢の中の俺は何故かボクサーで、トレーナーというかジムの会長は常に一升瓶持ってる小柄なじいさんで、その孫娘が茉莉子だった。ミット打ちを終えた俺に茉莉子がタオルとドリンクを差し出してくれたり、川岸を走る俺の後ろから茉莉子が自転車でついて来たりとか、そういう運動部員とマネージャーの恋的な恥ずかしい感じの爽やかな展開が続き、そのくせ俺は晴香ちゃんと同棲していて、そういう夜のシーンとかがあって、次の試合に勝てたら結婚することになってたりして、俺は来るべきタイトルマッチに向けてハードなトレーニングを積み重ね、ついに迎えた試合当日、十万人収容のコロシアムでタイトルマッチに挑むのだが、俺の対戦相手のメキシコ人が親父だった。タコス食ってたから間違いない。どうやら親父は五十戦無敗の伝説のチャンピオンらしく、レジェンド永友龍太郎とか呼ばれていて、しかも洗脳されて

俺のことがわからなくなってるらしく、試合が始まり、グローブを合わせ、俺はとりあえず挨拶代わりのジャブを繰り出してみるのだが、親父はしゃがみこんでそれをかわし、ひたむきに、親父はひたむきに俺の無防備な向こう脛を激しく蹴り始めた。俺がレフェリーに『ちょっと待ておい！ボクシングじゃねーのかよ！』って胸倉掴んでアピールしても、タキシード姿の黒人の審判は半笑いで『ノー』とか言うだけで、マジかよって思ってたら今度は親父が俺の足にタックルかまして引き倒しやがって、馬乗りになって顔面ボコボコ殴り始めた。しかもすっげー楽しそうな顔で。俺は最初っからこれは夢だってことがわかってたから、もう別にいいやって思いながら殴られてたんだけど、それにしても体が重く感じられて、それは夢にしてはいやにリアルで、どうやら現実の俺の腹の上に何か重たいものが乗せられているようで、あーこれはもしかしたら親父が腹の上に乗ってんのかなあとか思って、半透明の親父なんか見たくないし気持ち悪いし、もうちょっと寝てたほうがよさそうだからそのままじっと耐えてたんだけど、今度は殴られてる顔の痛みが結構やばいことになってきて、口の中に血の味まで広がってきて、『起きろよこの野郎！』みたいなことを親父じゃない声が言ってて、そこでようやく寝込みを襲われていることに気付いた。俺は両手で顔を覆うみたいにしてガードして、指の隙間から俺を殴ってるヤツを見た。未来だった。めちゃめちゃ怖い顔してた。

「とっとと起きろやオラ！」

さらに右の拳が振り下ろされる。ガッチガチのグーだ。

「ちょ…、やめろって」

「うっせんだよゴミカスが！」

未来は俺の指の間に自分の指突っ込んでガードをこじ開けようとしてくる。すなわち長い爪で俺の顔ガリガリ引っかいてくるからマジ泣きそうに痛いんですけど。

「ちょ、お前落ち着けって」

「うっせんだよ！死ね！」

俺は大きく息を吸い込んで、腹筋に力を込めて思い切り体を跳ね上げた。俺に馬乗りになっていた未来がバランスを崩し、俺はその隙に体を横に転がして退避に成功した。布団とか俺のシャツに血が付いてる。あ、ちゃんと赤いよ。

「お前ふざけんなよ！なんか奥歯グラグラいってんだけど」

「知るか」

未来は畳に膝を立てて肩で息をしている。手の甲に付いてる俺の血が怖い。

「脩平は？」

「いつも一緒にいるわけじゃねえよ」

未来は路上に唾を吐くように言った。未来のマジギレなんて見るの高校以来だな。まあ仕方ないけどさ。俺はティッシュを二枚抜き取って、鼻と口に突っ込んだ。うわ、ティッシュ赤。すげーでかい口内炎できそう。

「晴香ちゃんのことだろ？」

「お前なんつーこと言うんだよ？」

「昨日はちょっと感情的になりすぎた、と思ってる」

「アタシら売春婦じゃないんだけど」

「ごめん」

未来は立ち上がって俺の肩を思いっきり蹴った。俺は防御しなかった。それから未来は深呼吸をした。

「晴香はね、ちゃんと素の宇野晴香として虎太郎と会ってたんだよ。店で会うときはあんたに対しても『ひなの』だった。でもプライベートは全然別物。それくらいわかんない？アタシだって『くるみ』で脩平と付き合ってるわけじゃない。てかアフターなんかしたことない」

「未来のことはわかってるよ。でも晴香ちゃんは高校の頃とあまりにも印象が違うから、なんか根本的に変わっちゃったんじゃないかって勝手に決め付けて、誤解してた」

「晴香、本気で虎太郎のこと好きだったんだよ」

俺はてのひらで口の血を拭う。
「そうみたいだけど」
そう。全然信じられないんだが。
「高一のときから」
「え？」
俺は顔を上げて未来を見た。未来は険しい顔して俺の腹の辺りを見ていた。
「高一のときから。虎太郎が『晴香ちゃんかわいいかわいい』ってうるさかった頃から」
「マジ？」
俺がにやけたら未来が嫌そうな顔をした。
「残念ながら、超マジ」
「んだよ、だったらあの頃とっとと告っときゃよかった」
馬鹿みたいな仮定を持ち出して悔しがる俺を未来が睨む。そりゃそうだ。あの頃俺の彼女だったのは未来なんだから。
「虎太郎、いまならまだ間に合う」
俺は枕元に落ちてたタバコの箱から一本抜いて口にくわえた。まあ、反射的ににやけてはみたものの、未来の言ってることわかんねえ。間に合うって何がどう間に合うっていうんだ？俺はもうあほで無鉄砲でトイレで隠れてタバコ吸ってる男子高校生じゃないんだし、晴香ちゃんだっておっとりかつしっかり者で学級委員な女子高生はとっくに卒業してるんだ。あの頃の俺は晴香ちゃんが好きで、でもそれってたとえば、今週のヤンマガの表紙のこの子が好きだとかいうようなもんで、部屋にピンナップ貼るような好きで、彼女にも隠さずに言えるような好きで、俺晴香ちゃんのＤＶＤ出たら絶対買うわみたいなもんで。いやそりゃアイドルに告られたりしたら大喜びで付き合いますけどさ。でも実際の当時の俺はいつも仲間とくだらないことわいわいやってて、その中で何人かの女の子との関係は短いスパンで変化したりして、俺は未来と付き合ったり、他校の子と付き合ったり、後輩と付き合ったり、そんでまた未来と付き合った

りとか、してた。だからそういう俺をあの頃から変わらず好きでいてくれたっていう晴香ちゃんはまぎれもなく俺が憧れてた晴香ちゃんそのままで、こんなに距離が近づいたのにそれに気付かない俺もあきれるくらいに俺なのだ。

「遅えよ」

俺はタバコに火をつけて、部屋を横切って窓を開け、煙を外に吐き出した。今日もよく晴れている。親父が俺を起こしに来る日曜の朝だ。

「もう五年前と同じ気持ちじゃねえし」

未来は窓の外に顔を出して、俺の目の前にピースの指を突き出した。俺は未来の指に吸いかけのタバコを挟ませる。未来はそれを一回だけ吸って、また俺に返した。こんなことをするのも未来が俺の彼女だったとき以来だな。お前らそんなに俺をノスタルジにさせるなよ。

「なあ虎太郎」

「あん？」

「お前いつからそんなになっちまったんだっけな」

「そんなにってずいぶんだな」

「だらだらどろどろふにゃふにゃぷにょぷにょ、骨なしゼリーのスライムみたい」

「俺はガキの頃からこうですよ」

未来は自嘲するように笑う。

「アタシが唯一、二回付き合った男がそんなゴミくずなわけないだろ」

「あの頃はどうかしてたんだよ、みんな。誰かがぴったりくっついてくれないと、不安で仕方がなかったんだ」

ふいに口をついたそれは、まるで俺の言葉じゃないみたいだった。どうしてそんなことを言ってしまったんだろう。そんなこと、思ったこともないはずなのに。どうして俺が俺たちの過去を否定するようなことを言わなくちゃいけないんだろう。俺の後悔とクールな沈

黙が親父の部屋をじわじわと侵食していく。未来は黙ってうつむいて、自分の足の指とか見てた。
「かっこよかったよ、虎太郎は。でも完全に過去形だね」
「そうかい」
「でもね、晴香にとっては現在だった。二十歳のぐだぐだの虎太郎を高校生の虎太郎を見る目で見てた。だからこんなことになった。でも全部があんたのせいだとは言わないよ。虎太郎の気持ちと晴香の気持ちがずれてるのは仕方が無いことだし。晴香は五年前の虎太郎を見てて、虎太郎はキャバ嬢のひなのを見てた。どう考えても無理ね」
俺は体をそらして目を見開いて、涙がにじむまでまばたきなしで太陽を見た。それから窓の手すりに置いてあったビールの空き缶にタバコを捨てた。部屋の中が真っ暗に見える。未来は自分のバッグから細いタバコを取り出してくわえて、金色のライターで火をつけた。窓枠に長い脚を組んで腰掛けて、しゅーっと煙を外に吹く。その仕草とか、膝に当たる陽の光とかがかっこよくて、ちょっと見惚れた。未来は昔からタバコを吸うときが一番魅力的なのだ。脩平はそのこと、ちゃんと気付いてるのかな。
「女子高生に手ぇ出したの？」
くすぶる灰を空き缶に落としながら、未来が言った。
「いとこだって言っただろ？」
「それはもういいから」
未来が真面目な顔して言った。俺は目を閉じて、いまだ眩んでいる眼球をまぶたの上から時間をかけて揉みほぐした。また涙がにじみ出た。こんなの目を傷めるだけだ。
「たしかにいとこじゃないよ。でも付き合ってるとかじゃない。ていうかまったく関係ない」
「まったく関係ない子がなんで二日前から家にいるのよ？援助？」
「違うわ。ちょっと込み入った事情があるんだよ」
未来はタバコをもみ消して、脚を組んだまま前かがみになってし

ばらく部屋の真ん中の何もない空間を見ていた。それから俺を見上げる。
「でも好きになりかけてる」
「なってない」
「そうかな。虎太郎かなり気が多いし、しかも年下好きじゃん」
「でも茉莉子はなんていうか、そういう感じじゃないんだ」
「妹みたいな、とかそんなふう？」
「それもあるけど、どっちかっていうと、マザー」
「はぁ？」
「母さんみたいな感じ」
未来の背中から冷たい何かが放出されているのを感じる。
「……気持ちわる」
未来はゆっくり腰を上げて、さっき見てた部屋の真ん中まで歩いていって振り返った。
「まあいいわ。これからどうしようが虎太郎の勝手だし。でもとにかく晴香には絶対に謝って。あの子相当ショック受けてるし、アタシだって、今回の虎太郎には正直幻滅したよ」
「俺も罪悪感でいっぱいだよ」
未来は小さく微笑んだ。
「そう思えるんなら、まだまだアタシの虎太郎だよ」
「お前のは脩平のあほだろ」
未来は笑いながら中指を立てた。
「虎太郎」
「おう」
「ちゃんと謝れな」
「わかってる」
「また脩平と来るから」
未来は部屋を出て行った。俺は立ち上がって襖を閉めて、ティッシュを抜き取って鼻をかんだ。鼻水は出なかったが、血が出た。最後まで未来から俺への謝罪はなかった。『なぐってごめんね』って、

それだけ言ってくれたら痛みも結構和らぐんだが。
俺は携帯電話の着信履歴から晴香ちゃんの番号を表示させてみた。あんまり気にしてなかったけれど、晴香ちゃんからの着信って結構多い。ここ二週間くらいじゃ脩平より多いな。でも話した内容って特に思い出せないんだ。俺は壁にもたれてため息をついて、そんなに俺は変わってしまったのかなって思った。たしかにいまはぐーたらしてるけどさ、それよりも昔の俺ってそんなに立派だったか？ちょっと美化しすぎじゃね？どっちかっていうと恥ずかしいことばっかして、言ってたと思うのだが。でも消したい過去なんかじゃねえけどさ。まったく、晴香ちゃんもどうかしてる。そんなアホ絶頂の俺を五年も好きなんてさ。
「昔の俺、ね」
俺は親父が何にも書かないくせに書き物机って呼んでたマホガニーの机の上でほこり被ってる写真立てを手にとった。親父と、母さんと、俺が正装して写ってる、俺の五歳の七五三のときの写真だ。親父は緊張して固まってて、母さんはリラックスして微笑んでて、俺は気をつけの姿勢でガチガチに固まってた。
「親父似かよ」
俺は失笑と共に写真立てを机に戻した。

9　おとう…さん、じゃ、ない…、ですよね……？

で、俺はすぐにでも晴香ちゃんとアポとって、謝りに行こうと思った。電話やメールじゃなくてやっぱり直接会って、土下座でもなんでもする構えだ。それだけ俺はひどいことを言ってしまったし、晴香ちゃんとこのままバイバイっていうのはやっぱり絶対に嫌だった。だってさ、晴香ちゃんが俺のこと好きだったってのがわかった今となってはよ、俺の謝り方しだいじゃどうにかリカバリーが効くんじゃないかって期待したりもするわけで。いまの俺が昔みたいに晴香ちゃんのこと好きじゃないって言ったってそれはいわゆる誤解なわけで、わだかまりが解消されればよりよい関係に発展する可能性もあるわけでさ。未来の手前『遅えよ』とか言ってかっこつけてみたけれど、なんだかんだやっぱり俺の高校時代のアイドル晴香ちゃんですから、いざコンタクト取るとなったら、そりゃ不純な矛盾もしますわさ。でもまだ朝の十時だし、晴香ちゃんは夜のお仕事なんだからきっと寝てる。ひとまず飯でも食って昼過ぎたら電話してみようとか思いながら階段を下りて行って、相変わらずメガネかけてひたすらページめくってる茉莉子の横顔見たらそんなの全部吹っ飛んだ。やっぱ晴香ちゃんのことは明日以降。今日は茉莉子が時間ないから。階段が古いからきしむ。茉莉子が本から顔を上げて、ぱぁっと笑顔に変わる。

「おはよー、店長」

茉莉子は本を置いて、サンダルぱたぱたいわせながら俺のほうに走ってくる。

「おはよ、ってお前勝手に客上げんじゃねえよ」

「友達なんだからいいじゃない。わー、殴られたねぇ」

茉莉子は人差し指を突き出して、おそるおそる俺の腫れた左の頬をつんと突いた。

「聞こえたよー、めちゃめちゃ怒ってたね、未来さん」

「怒ってたね、じゃねえよ。奥歯ぐらぐらいってんだぞ。気付いてたんなら止めに来いよ」
「だって私関係ないもん」
俺は茉莉子が尖らせたくちびるを数秒睨んで、特に反論することもないので頭をかきながら台所に向かった。もそもそ歩く俺を横から茉莉子が抜かしていく。
「ご飯炊いてあるよ。お味噌汁も作ったから、温めなおすね」
「いいよ、それくらい自分でやれる」
「ご飯の世話は私がやるよ。それくらいしてあげないと悪いし」
世話、って言い方が介護されてる老人みたいで少し気になるがまあいいか。昨夜の気まずさも見事に解消されている。寝たら戻るとは思ってたけど、案外未来のおかげかもな。俺はおとなしくテーブルについて、口の中に指を突っ込みながら鍋に火をかける茉莉子の後ろ姿を見ていた。そしたら茉莉子も明日にはいなくなっちゃうんだなとか思ってしまって、また涙が出そうになった。みんなこの家からいなくなる。母さんも、じいさんも、親父もいなくなった。そしていま、茉莉子もいなくなろうとしている。最後に残るのはいつも俺だ。そりゃ俺だってどこへでも行ける。どこへだって行けるのに、結局、どこにも行こうとしない。
「お待たせ」
茉莉子がトレイに載せた朝食をテーブルに並べた。白いご飯と卵焼きと味噌汁と麦茶。
「すげーシンプルだな」
「文句あるの？」
茉莉子は俺の前の席に腰を下ろしながらきっと睨む。
「いや、ないです。いただきます」
まずは麦茶を一口。やっぱり傷に染みて痛い。てか、
「なんで見てんの？」
「痛そうでおもしろいから」
「食いにくいわ。時間ないんだからさっさと本探しやれよ」

茉莉子はくちびる尖らせて、「ぶー」連発。それからもったいぶって立ち上がる。
「口痛いからって残さないでよ。残したら私、泣くからね」
残すわけねーだろが。

それから俺と茉莉子はひたすら本を探し続けた。書き込みのある本はちらほら見つかるものの、茉莉子の母親の筆跡のものはやはりなかった。個人名や住所が書かれているものはメモを取り、電話番号があったらすぐにかけてみた。茉莉子はやっぱりひどく緊張した様子で電話をかけて、相手が出るとさらにテンパりだす。
「あ…、あの、えっと、えっとですね……、おとう…さん、じゃ、ない…、ですよね……？」
不審すぎ。
だから俺が代わりにかけてあげたりもしたのだが、確かにこれなんて言えばいいかわからないな。でも一応俺成人男性なので、丁寧にフルネームを名乗った上で『実はある少女の父親を捜しているのですが、大宮美奈子という名前に聞き覚えはないでしょうか？』みたいなことを尋ねるわけなのだが、どう考えてもまともじゃない。当然、ガチャンと切られるか、知らないって言われるか、いたずら電話扱いされるかのどれかだ。知ってても知らないって言うかもな。いまさら母親のいない十七歳の娘が現れたら厄介に思う奴もいるだろうし。うぜ。
「———はあ、そうですか。そうですよね。ええ、ありがとうございます。はい。すいませんでした———」
ピッと。俺は間近で聞き耳を立てていたテンパり茉莉子に顔を向けて首を振った。茉莉子はくたっと脱力して、カウンターにへばりついた。
「八十七歳の爺さんだった。でもいい人だったよ。お父さんみつかるといいねって言ってくれた」

茉莉子はわずかに顔を上げて、力なく微笑んだ。ふと壁時計を見ると、もう五時を回っている。
「ちょっと休むか？」
茉莉子はぶるぶると首を振った。
「ま、そんな暇ねーよな」
「わかってきたじゃない」
俺と茉莉子はニッと笑い合う。
「やるか」

すでに店の本棚のうち半分は調べ終えた。正直、俺が計算したペースをはるかに上回っている。それが俺の計算ミスによるものなのか、茉莉子の執念が机上の空論を超越したということなのか、理由は定かではなかったけれど、そんなのさして重要ではない。とはいえ、まだ半分だ。なかなか茉莉子には言い出せないのだが、本棚の下にも在庫がどっさり眠ってたりする。まあまあ、考えてる時間も著しく惜しい。悲壮感なんてまったくないし。捜索捜索。カウンターの上で着メロ鳴ってるけど無視だ。鳴り止まないけど無視だ。メロディ二周目だけど完全無視だ。
「店長、うるさい」
「俺じゃねえよ」
「店長の携帯じゃん。出るか切るかしてよ」
茉莉子が怒るので仕方なく俺はカウンターに戻って携帯持って通話ボタンを押した。こんな時間に電話してくるのは決まって、
「こーたろー、駅行こー」
あほの脩平くん。
「わり。今日は行けねーわ」
「なーんでだ？」
「なんでもだ」
「茉莉子たんいるー？」

俺は茉莉子にチラッと目をやる。こっち見てない。
「もう帰ったよ。あした学校だし。つか、たん言うな」
「なーんだー。茉莉子たんも一緒に行こーとおもってたのにー」
「あほか」
「なーんでだ？」
さてはこいつあほさに磨きがかかってきてるぞ。小学生のころが一番まともだった気がする。
「考えてみろ。あそこで女子高生見たことあるか？いねーだろ、普通」
「あー、そっかー」
電話の向こうで脩平が女の子みたいにきゃはきゃは笑う。
「とにかく今日は行けねーからさ、また今度な」
「わかったよー」
「んじゃな」
「あ、こーたろー」
「ん？」
「こーたろーいないとさみしいよー」
切った。まったく俺もよくこんなあほと十何年も親友やってるよ。まあ、いい奴なんだけどさ。俺は携帯をまたカウンターに置いて、さっきの本棚の前に戻った。
「だれ？」
俺に背中向けて手馴れたスピードでページめくってた茉莉子が俺に尋ねた。
「脩平」
「いま、私の話してたよね？」
耳ざといな。
「うん。まだいんのー？って。めんどいから嘘ついといた」
「女子高生が普通いないところって、どこのこと？」
声のトーンが若干下がった気がして振り返ると、本を畳んだ茉莉子が俺に冷ややかな視線を送っている。

「どこ？」
「なんでお前に言わなきゃいけねんだよ」
「そうだねー。関係ないもんねー」
そうそう。茉莉子には関係ない。
「エッチいことするお店？」
「違うわ」
「でも、言えないような場所なんでしょ？言ってくれないと想像力豊かな私がいろんな想像膨らましちゃうけど」
「……キャバクラです」
なんで俺が折れなきゃいけないんだよ。
「なーんだ」
茉莉子はつまらなそうな顔をして本を開いた。どうやら茉莉子的にキャバクラはセーフらしい。逆に悔しくなった。
「なんだとはなんだ」
「キャバクラって何が楽しいの？」
「楽しいっつか、俺が行ってる所は高校の同級生とかいっぱいいて、なんか同窓会みたいでいいんだよ」
「ああ、そういう楽しみ方か。聞いてるだけだと健全だね」
ん、妙に言葉にとげがあるぞ。まだなんか疑ってんのかこいつ。横顔覗いてみたらやっぱくちびるとがってるし。まあいっか。意外に気分いい。
「ちなみに今朝俺をボコボコにしてった未来もいる」
「へえ」
「他にも高校時代に毎日遊んでた奴らばっか。憧れの先輩とか、かわいい後輩とか、そういう子たちと思い出話で盛り上がるわけよ」
「ふーん。なんか面白そうだね」
ようやく茉莉子の表情が柔らかくなってきた。俺ひそかに胸撫で下ろしたり。
「私も夏休みそこでバイトしようかな？店長にお酒出すの」
「お前じゃ無理です」

「なんで？胸？」
そう言って自分の体を眺める茉莉子。いや、そういうんじゃなくてさ。
「女子高生はいないって言っただろ」
「あーそっか」
俺たちは作業に戻った。でもすぐにまた茉莉子が声をかけてくる。
「店長」
「なんだよ」
「晴香さんもそこにいるの？」
「あー」
「いるんだ」
「いるよ」
「だから行きたくないの？」
そういうわけじゃないと思う。俺はしばらく考えてみた。うん、そういうわけじゃない。
「違うよ」
「ありがと」
俺は本棚の上のカドをちょっと見上げて、それからやっぱり振り向いてみた。茉莉子はさっきよりもひときわ素早くページに目を走らせている。なんの『ありがと』なのかはわかったから、返事は声にしなかった。俺は小柄な背中に微笑みかけた。
そのとき、空気の読めない俺の携帯がまたしてもカウンターの上で耳障りな着メロを流し始めた。茉莉子は首を回して俺を睨み、あごの先で携帯を差す。俺はため息をついて、なんかいいムードをぶち壊した忌むべき携帯を掴んで液晶に目をやった。おお、久しぶりに見た、『公衆電話』って文字。怪しい怪しいすげー怪しい出たくない。でも茉莉子がずっと睨んでるし、このまま切るのも忍びないので、しぶしぶ俺は通話ボタンを押す。
「もしもし」
「……」

「……もしもし？」
「……」
「もしもーし、誰ッスかぁ？」
「……」
「無言電話ッスかぁ？」
「……」
「無言電話なら切りますぉ？」
「……」
無言電話に確定。
俺は力強く通話を断ち切り、携帯をカウンターに戻した。ったく、自分からアクセスしておきながら何も言わないなんてどういう了見だ。それじゃ一方通行なコミュニケーションすら成立しねえ。無言電話ぼくめーつ。
「だれ？」
だからなんでお前はいちいち俺の電話相手を知りたがる。
「公衆から無言電話」
「それってなんかホラーっぽいね」
「うるへー」
俺は茉莉子の頭にかるーく拳をぽすんと落としてみた。てへへという感じに笑う茉莉子。こっちのコミュニケーションはずいぶんスムーズになってきてるんだけどな。って結構最初からスムーズだったか。あーあ、そんなこんなで今日ももう七時です。
「飯にすっかぁ？」
「すっかー」
ああ、グッドコミュニケーション。

10　お前いまどこだ？

今晩のおかずは昼間に俺が一人でスーパー行って買ってきたカニクリームコロッケとかぼちゃコロッケとシーチキンとマカロニのサラダという適当さだ。ちなみに昼はカップ麺だった。茉莉子は今日も自分が作るって言って聞かなかったんだけど、もうそんなことしてる余裕ねえだろって言い聞かせた。そりゃ俺だって食いたいよ、茉莉子の手料理。だってこの間までうめーうめー言いながら食ってたスーパーのお惣菜がめちゃくちゃ味気ないんだよ。ったく、明日からどうすんだよ俺。

そういうわけで最後の晩餐は言葉を交わす隙もなく、ひたすら食べ物を口に詰め込んで速攻麦茶で胃に流し込むというシュールで切ないものとなった。食事を終えると茉莉子はゴミをひとまとめにしてビニール袋に突っ込んで、メガネかけて膝を叩いて、「よし」って言って立ち上がり、胸を張って店舗に向かった。俺は紫煙をくゆらせながら、最後の決戦に挑む娘を見送る父親的な気分で茉莉子の背中を見送った。いや、父親捜してるんだけどさ。

黙々と本を手に取り、ページの隅々まで目を走らせて、本棚に戻す。エンドレス。慣れと、それから焦りから、俺も茉莉子も相当ペースアップしてきている。だいぶ前から両手の指が痙攣してるし、爪の端とかも痛いけど、そんなことはどうでもいい。高松さんが明日の何時に来るのかまだわからない。たぶん昼は過ぎるだろうけど、それでも時間が全然足りない。集中力切らさずにできる限り急ぐしかない。風呂、とはとても言い出せる雰囲気じゃなかった。きっと茉莉子は入らないと言う。だから俺も入らない。今日はほぼ終日家にいたし。

十時過ぎにまた携帯が鳴った。と、ほとんど同時にカウンターの

ファックス付き電話も鳴った。
茉莉子は腹立たしげなため息をついて、またしても俺を睨んでくる。
「店長、人気者だね」
皮肉たっぷり。
「まあな」
俺は小走りでカウンターに向かって、ファックスの方は無視して携帯のディスプレイを注視した。おいおい、公衆の次は非通知かよ。誰かに恨まれるようなことしたっけなって思ってようやく嫌な予感がしてきた。した。昨日すげーした。
「もしもし」
「あ、永友虎太郎さんですか？」
耳に覚えのない、若い男の声だった。
「そうだけど、誰？」
「俺、宇野晴香の弟です」
「ああ」
やっぱりか。本人じゃなかったのはちょっと意外だけど。ちなみにカウンターの電話も鳴り止まないから、茉莉子がふてくされた顔でやってきて受話器取った。
「いきなりすいません。姉さんから電話とかメールとかなかったですか？」
「今日？」
「はい」
「ないよ。なんかあったの？」
「いないんですよ。昼に出てったきり帰って来ないんです。仕事にも行ってないみたいだし、携帯も通じなくて……」
「マジ？」
「そのくせさっき、姉さんからメールが来たんです。『いままでありがとう』みたいな」
わきの下からいやな汗がじわっと溢れ出た。ちょっと声が出せな

い。
「あの、永友さん？」
「……ちょいやべえな、それは」
「かなりやばいですよ！さっき警察にも電話しました」
晴香ちゃんの弟はイラついた声を出した。携帯を耳に当てながら部屋の中を無意味にぐるぐる歩き回っているような、迫力、というか切迫した気配がビシビシ伝わってくる。
「あのさ、関係あるかわかんないけど、七時くらいに公衆から無言電話があったんだわ」
「本当ですか？きっと姉さんですよ！なんか言ってなかったですか？」
晴香ちゃんの弟の声が興奮で裏返った。それが逆に辛い。
「いや、完璧に無言だった」
「なんか後ろの音とか聞こえなかったです？車の音とか電車のアナウンスとか？」
「いや全然。つか注意して聞いてなかった」
「そうですか……」
期待持たせて、落胆させただけ。無言電話の話なんかするんじゃなかったって思った。晴香ちゃんの弟が苦しそうに息を吸い込む音が、耳にダイレクトに流れ込む。
「今日、晴香ちゃん、いつもと違う様子とかあったか？」
「……ありました。昨日の夜帰ってきてからすごく元気なくて、部屋にこもっちゃって。姉さん、時々そういうことあるから、あんま気にしてなかったんですけど、今日になってようやく出てきたと思ったら、そのまま車でどっか行っちゃいました……」
「……そうか」
「俺、姉さんがおかしいの気付いてたのに、何も、何もできなかったです……」
晴香ちゃんの弟は消せない罪を悔いるように呻き、深く押し黙った。俺は何も言えなかった。

「やっぱり、自殺、」
「まだ決めつけるのは早いだろ。そんなこと考えるなって。な？」
俺は最後まで言わせなかった。あるいは自分自身にそう言い聞かせたかっただけかもしれない。
晴香ちゃんの弟は鼻をすすって、
「……はい」
「心当たり当たってみるからさ、何かあったら連絡してくれ。俺も何かわかったらすぐにかけるから」
「わかりました……。なんか、すいません。面識のない永友さんにこんなこと……」
「気にすんなって。絶対大丈夫だ。こういうことは大抵拍子抜けするような結果に終わるんだよ。そういうもんだ。それが世界のルールだ。あとで『なんだよ、心配して損したな』って愚痴り合おうぜ」
晴香ちゃんの弟は長い間しゃくり上げていて、鼻もすすり続けていた。たぶん電話の向こうで彼の顔はぐじゃぐじゃに汚れているのだろう。俺は携帯を耳から少し遠ざけた。こんなときになんだが、極めて耳障りだ。
「な、もう切るぞ。しっかりしろよ。絶対に大丈夫だからさ」
「……ふぁい」
情けない返答と共に通話が断たれた。通話時間三分二十八秒。って非通知じゃん。連絡できねえし。ったく、なんで非通知なんだよ。悲痛な叫びだからか。それとも個人情報保護の観点からか？わけわかんねえ。とにかく俺は晴香ちゃんの番号を呼び出してコールしてみた。一応、確認の為だ。だめだ。電源切ってる。俺は親父の椅子に腰を下ろして、カウンターに両肘をついて手を組み合わせて、そのまま額をゴツンと叩いた。
「店長」
俺の様子に不穏な何かを感じたのか、茉莉子が真顔で首を傾げて俺を見てる。俺は顔を上げて、どうにか茉莉子に笑いかけた。
「ああ悪い。電話、誰だった？」

「無言電話だったよ」
俺は携帯のカドでこめかみを強く押した。
「ねえ、何かあったの？」
茉莉子はカウンターに手をついて心配そうに俺に尋ねる。なんでもない、って言ってやりたいんだけど、きっとそれじゃあすぐに問いただされて、俺はあっさりと口を割るんだろうな。
「晴香ちゃんの弟。晴香ちゃんがいなくなったらしい」
俺はさっきの電話の内容をざっと説明した。茉莉子の顔はみるみる青ざめていった。
「なあ、その無言電話の後ろで物音とか聞こえなかったか？」
「わかんないよ……」
茉莉子は肩を触りながら、詫びるように下を向いた。
俺は茉莉子を見ていられなくて、目をそらした。また時計の音が気になってきた。俺は折りたたみ式の携帯を開いて、着信履歴の上から三番目の奴にかけた。
「もーしもーしー？」
脩平。
「お前いまどこだ？」
「『駅』だよー。こーたろーやっぱくんのー？」
「行かねえよ。晴香ちゃんいるか？」
「いなーいよー」
「休みなのか？」
「ちがーうよー。連絡ないけど休んでるって未来が言ってたー。こーたろーのせいだっておこってたよー」
何の悪意もないはずの『俺のせい』って言葉がメガトンハンマーみたいになって俺の後頭部を打ちつける。
「未来にかわれるか？」
「むりー。さっきからずーっとあっちのテーブルでおっさんたちの相手しててかまってくんないのー。こーたろーさみしーよー」
あっちってどっちだよ。

「……なあ、脩平」
「なーにー？」
「いまの俺って昔の俺と何か違うのか？」
「こーたろーは昔よりだいぶでっかくなったよー」
「あのな、小学の頃とかの話してんじゃねーぞ。たとえば、高校のときと比べてどうよ？」
「高校のときかー。あのころのこーたろーは一番かっこよかったねー。いまもかっこいーけどねー」
「なあ、俺よくわかんねえんだよ。そんなにいまと違うのか？」
「こーたろーはあのころのほうがバカっぽかったよー」
あほにバカっぽい言われた。
「そういうことじゃなくてさ」
「そーいうことじゃなーい？」
「……そういうことなのか？」
「あのころのこーたろーはー、シンプルでー、わかりやすくてー、いっつもフルパワーだったじゃーん」
俺は脩平のきゃはきゃは笑いを聞きながら、頭の中に高校時代の名シーンをフラッシュバックさせた。あー、なるほど。
「そう、かも、な」
「でも別に違わないっしょー？いまはこーたろー休んでるんだってー」
「お前、言ってる意味わかんない」
「こーたろーは高校のときにがんばれりすぎたからさー、いまはこーたろーがこーたろーをお休みしてんだよー。おれはそー思ってたけどー」
「……」
「こーたろー、休むのやめんのー？」
「たぶんな」
「やーったー！そのほーがおもしろいしー。おもしろれりー！おもしろれりー！」

切った。ったくこのあほは。無邪気すぎてうるうるくるわ。でもそれより、晴香ちゃんだ。昨日俺が傷つけた。無断で仕事を休んでいる。弟に意味深なメールを送った。携帯の電源を切っている。そして二つの無言電話。俺はカウンターの上で頭を抱えた。

「俺のせいだな……」

完璧に俺のせいだ。せめて俺が謝るのは明日でいいや、なんて思わなければ、こんなことにはならなかったはずだ。明日会うアポを今日取るだけでもよかったんだ。このミスは取り返しがつかない。

「店長」

ずっとそばにいてくれた茉莉子が、頭上で硬直した俺の手に自分の手をそっと重ねて握ってくる。茉莉子の小さな手はページめくりすぎで震えてて、ひんやりしてて、気持ちよかった。

「そんなこと思っちゃだめだよ」

茉莉子は力を強めたり弱めたりしながら俺の手をきゅっきゅと握る。

「まだ、わかんないんだし。ね」

腰をかがめて俺の顔を覗き込む茉莉子。そうだ。まだわからないって、後悔するのはまだ早いって、ついさっき俺が晴香ちゃんの弟に言ったんだった。後悔する前に、今やれることをやる。

「茉莉子、わるい」

俺は立ち上がって、カウンターの上に散らばってる携帯とタバコとライターと財布と車のキーをかき集めた。

「ちょっと心当たりあるから、見てくる」

「うん。気をつけて」

「こんなときにごめんな」

茉莉子はうつむいて首を振った。

「そんなのいいよ。晴香さんのところに行ってあげて」

俺は走って裏口に向かった。スニーカーを履いて、ドアノブに手をかける。でも手がノブにぴったり張り付いたみたいになって動かせなかった。さっきから何かが引っかかっていた。何か、巨大なし

こりのようなものが突然頭の中に出現して、俺に警鐘を打ち鳴らしているような、そんな気がした。それが何を意味するのかはわからない。でもこのまま行くのはよくないという気が、ただ、漠然とするのだ。

振り返ると茉莉子がいた。不安そうな顔をして、俺と目が合うとばつが悪そうにうつむいた。手を前で組み合わせて、指をせわしなく動かしている。何か言いたそう。でも言い出せない。そんな感じありあり。そしたらドアノブから手が離せた。

俺は茉莉子の頭にぽすんと手を置いた。で、ちょっとだけ撫でた。

「心配すんな。すぐ帰ってくるから寝るんじゃねえぞ？」

「うん。待ってる」

茉莉子は無理矢理作ったような笑顔を俺に見せた。俺も無理して笑って、ドアを開けて走り出した。

なんか、胸痛ぇ。

11　お前じゃねえんだよ

ライトバンを飛ばしながら、俺は高校時代のことをひたすら思い返していた。

球技大会があれば不必要なくらいに燃え、マラソン大会があれば最前列からスタミナ無視して疾走、昼休みの屋上で花火大会、深夜の公道で暴走族ごっこ、誰かがバカやりすぎて退学になりかけたら朝の通学路で署名活動をし、隣の高校と戦争起こしてみんなで仲良く二週間の謹慎をくらう。来る日も来る日もバカ騒ぎの連続で、考えなしに規則やシステムに反発して、青臭くて、あほ臭くて、でも楽しくて仕方がなかった毎日。毎日全力出してた俺。でもいつからだ？いつからか俺は本気で何かをすることをやめた。それはたぶん、本気でやろうが手を抜こうが結果が大して違わないことを悟ったからだろう。遅い車一台ぶち抜いたって、次の信号で追いつかれるんだ。馬鹿馬鹿しくてやってらんねえ。いつかそう思ったんだ。それにはっきり言ってしまえば、俺は高校生になりたかった。というかずっと高校にいたかった。このままじわじわみじめに年を取りながら五十年も生きるくらいなら、同じ三年間を十回ループして死んじまいたいって心から思ってた。だってあれ以上がこれからあるなんて到底思えやしないんだ。でもそれは無理だってことくらい知ってる。それが俺の『成長』だった。それを認めてしまうことが、大人になるってことだと思ってた。どうやら間違えてたらしい。わかった顔してすましてるだけのただの無力なガキ。それがいまの俺だ。未来に殴られて切れた口の中が痛む。

「あーあーあーうぜーなーおい！！」

俺は右車線にバンを出して、『今の俺』っていうメタファーみたいな法定速度遵守のトラックを一瞬で抜き去った。うぜーよ、うぜーんだよマジで。それやってどうすんだとか、それ意味あんのかとか、そんなにがんばんなとか、十分だろとか、もういいだろとか、

仕方ねえとか、そんな誰かが誰かのために言った弱っちい言葉を勝手に飲み込んで消化して、自分のものにしてた。あほだろ。あほすぎる。俺そんなの大嫌いだったじゃねーか。昔の俺だってそんな立派なもんじゃねえよ。でもいまよりはいくらかマシだ。どんなことでも全身全霊ぶち込まなきゃ気がすまなかったのが俺だろ。でもこの三日間に限れば、俺は久しぶりに全力だった。茉莉子が来て、全力で無謀なことをやってる茉莉子を見て、俺も力になりたいって思った。倒れるまで茉莉子の父親を捜そうと思ったし、いまも思ってるし、二人で茉莉子の父親に会いに行くんだ。茉莉子が俺を取り戻させてくれた。あと未来と脩平も。あーそうだよ。俺は俺を取り戻したことを宣言する。だから俺は全力で晴香ちゃんを見つけ出す。会って何を話すかなんて決めちゃいない。出たとこ勝負だそんなもん。もし何も思いつかなかったら、砂浜に頭埋めるくらいの土下座でもしてやるよ。

もうすぐ海だ。

明かりの消えたレストランの駐車場に黄色いミニクーパーがポツンと一台。俺はその隣のスペースにバンを頭から突っ込ませた。クーパーの車中に人影はない。俺は小走りで浜辺に降りた。空気はむせかえるくらいに生暖かく、風は潮風。昼間はあんなに晴れていたのに、欠けた月の上をベールのような薄い雲が覆ってる。外灯はなく、明かりはその遮られた月光だけだ。俺は目を凝らしながら砂の上を歩いた。というか走った。微細な砂が靴の中に容赦なく入り込んでくる。

「晴香ちゃん！」

俺の叫びはむなしく響き、波音に吸引された。

入水済み、という可能性のフレーズが否応なしに脳裏をかすめる。

「晴香ちゃん！」

声の限りに俺は叫んだ。どこかの犬が遠吠えで答えた。

「……お前じゃねえんだよ」
つぶやいた俺の前方から閃光が上がった。パァン！と乾いた破裂音が響く。ロケット花火。そんなに遠くじゃない。俺は全力で足を前に動かした。ほとんど何も見えないが、どうせビーチだ。転んだってたかが知れてる。そこから走った距離はたぶん二百メートルかそれくらい。やがて海を眺める華奢なシルエットに出会った。俺は少し手前でスピードを落とし、足を止めた。
「晴香ちゃん……」
晴香ちゃんに俺の声が届いているのかわからない。晴香ちゃんは携帯電話を持って、青白く光るディスプレイに無機質な視線を落としていた。
「永友くん、なに座？」
なんでいまそんなことを、と思いながらも俺は息を整えて、「いて座」と言った。
「知ってるよ。十一月二十七日生まれ。ブルース・リーと一緒なんだよね。いて座、九位か。コメントしづらいなぁ。『優先順位を誤らないように』だって」
「誤ってないだろ？」
「どうかな？」
晴香ちゃんは携帯をバッグにしまった。おっとりとしたいつもの口調。でも、いま晴香ちゃんはどんな顔をしてるんだろう。よく見えないのだが。
「その方たちは、俺の腕をへし折るくらいで勘弁してくれるのかな」
「うーん、かなり怒ってるからね」
俺は晴香ちゃんをしばらく見つめて、それから両脇に立つ二人の男へと順番に目を向けた。右側の男はバットを肩に乗せていて、左側もやはりバットを杖にしている。たぶん金属で、たぶんおっさん。スイカ割りがしたいわけではなさそうだから、割るとしたら、俺の頭か。でも暗視ゴーグルまで装着してるのはどう考えてもやりすぎだろ。高かっただろうな。俺は砂の上に唾を吐いた。

「誰だよ、そいつら」
「私のＳＰ」
「晴香ちゃん、そんなにお嬢だったっけ？」
「『ひなの』のお客さんだよ」
悪ぶる様子も無く、晴香ちゃんは平然と言い放った。俺は耳の裏側をかきながら、鼻でため息をついて、真っ黒な海に顔を向けた。
「ま、そういうこともあるわな」
「あるわな」
晴香ちゃんが楽しそうに言う。
「無言電話、した？」
「二回したよ」
「あの弟って、本物の弟？」
「あれは友達だよ。私一人っ子だもん」
だよな。よくよく考えてみたら俺と面識のない晴香ちゃんの弟って奴が俺の携帯番号知ってる意味がわかんねえし。とはいえ、普通に信じてたけど。
「あいつ、演技うまいな」
「ね。びっくりしちゃった」
ちょっとだけでも、こういうまともな会話ができてよかった。
「いいよ」
俺は軽くそう言って、晴香ちゃんに微笑みかけた。たぶんおっさんにしか見えてないだろうけど、でも別にいい。
「やれよ。俺はひどいことを言ったんだ。何をされても文句は言わない」
晴香ちゃんはぺしぺしぺしと拍手をした。
「かっこいいね、今日の永友くん。昨日とは別人みたい」
「さっき心を入れ替えてきた」
「でも、手遅れだよ」
「わかってるよ。ボコられる前に土下座だけでもしとこうか？」
晴香ちゃんは上品に長く笑った。月を隠していた雲が取れ、砂浜

が白く輝き、うっすらと影が確認できるくらいの明るさになった。笑う晴香ちゃんと二人の異様なスーツ姿のおっさんエージェントが浮かび上がる。やばい職業の人には見えないな。ごく普通のおっさんだ。

「そんなのいいよ。それに、永友くんには手を出さないから」

「……なんで？」

俺は間の抜けた声を出した。

「永友くん、本当のこと知ったらきっと怒ると思ったからさ、この人たちにはボディーガードで来てもらったの」

「……ちょっと待てよ」

なんかわかんねえけどこの展開やばくねえですか？

「ヒント1。これは罠でした」

晴香ちゃんはいきなりクイズを始めた。指を一本立てている。抑揚のない声と冷静な言い方がマジで怖い。

「ヒント2。私はただのおとりでした。永友くんはまんまとひっかかっちゃいました」

「ちょっと待てって！」

ただならぬ予感に俺が声を荒げると、SP気取りのおっさんたちがすっと晴香ちゃんの前に出た。晴香ちゃんは手を水平に広げておっさんを制した。

「さて、ここで問題です。ほんとのターゲットは、誰でしょう？」

晴香ちゃんはてのひらを上向けて、どうぞというように俺に差し出す。俺は晴香ちゃんの手を見ながら、何の言葉も発することができなかった。

「ぶぶー。時間切れでーす。会場の皆さんもがっかりでーす」

おどけた調子で砂浜を跳ね回る晴香ちゃん。俺は呆然と突っ立って、せわしなく乱れる茶色い髪をただ見ていた。

「正解は……、」

彼女のこんな姿を見るのは、初めてだった。俺は、晴香ちゃんは気が触れているのかもしれないと思った。俺があまりにもひどいこ

とを言ったから、ちょっと、心が壊れちゃったんだ。そうとでも思わないと、ちょっと耐えられそうにない気がして。

「茉莉子ちゃん」

ほら、耐えられそうにない。

12　だって茉莉子関係ねーじゃん！

繰り返す波音がなければ、時間が止まっているんだと言われても信じたかもしれない。俺は悲しく混乱し、世界は現実感を失っていた。

「茉莉子は、もう家に帰ったよ」

長い静寂を打ち破ってどうにか俺が絞り出せたのは、まるで意味のないただのでまかせだった。

「嘘。さっき電話で茉莉子ちゃんの声聞いたよ」

「その後、すぐ帰った」

晴香ちゃんはあきれた顔をして、左腕に巻いた腕時計を月にかざした。

「ねえ、つまんない嘘はもういいよ。いとこじゃないのもばればれだし。もうとっくにロマンスグレーなおじさまたちが、茉莉子ちゃんを連れ去ってるから」

「……家の中にいるの連れてけるかよ」

「そうかな？あの子、簡単に開けてくれるんだよね」

そうだよ、あの天然。今朝も勝手に未来入れたし。このご時勢に無用心なんだよ。

「茉莉子拉致って、どうするつもりだよ」

晴香ちゃんはやれやれと首を振った。

「おじさんがかわいい女の子さらってきたら、次にすることなんてひとつしかないじゃない。そんなこともわからないの？」

俺は奥歯を噛みしめて、じりっと足を動かした。たったそれだけの動きにもＳＰが反応して、晴香ちゃんを守るように身をせり出す。

「でも心配だなぁ。昨日話してて思ったんだけど、茉莉子ちゃんって、ああ見えて結構気が強いよね？」

「……知らねえよ」

「おとなしくしてくれてたらいいんだけどね。言うこと聞いてくれ

ないと、殴られちゃうんじゃないかな。そういうのが好きなおじさんもいるからね」
　そんなことを言いながら、晴香ちゃんはもう楽しくて仕方がないというように笑った。背筋がぞくりとした。こんなふうに晴香ちゃんにぞくぞくするときがくるなんて、それこそ思ってもみなかった。
「でも、大丈夫だよ。明日の朝にはちゃんと服着せて返してあげるからね。あの子、永友くんの顔見たら、きっと泣いちゃうんだろうな。ちゃんとなぐさめてあげてね」
　茉莉子の泣き顔が自動的に、いやに鮮明に浮かんできて、どうやっても振り払えない。
「先に言っておくけど、どこに連れて行ったのかは教えないよ。それから、警察にも言わないほうがいいと思う。もしそんなことをしたら、茉莉子ちゃんのかわいい写真とか動画を無料で閲覧できるようにしちゃうから。そんなのあの子が傷つくだけだよね。黙ってたら、今日だけで終わりにしてあげる」
「……なんで茉莉子なんだよ」
　晴香ちゃんは、んー、って言いながら人差し指をあごに当てた。
「私ね、昨日会っただけだけど、茉莉子ちゃんのことが大嫌いみたいなの。あの子の若さとか、無邪気さとか、永友くんとの距離とか、そういうの全部に腹が立つの。だからめちゃめちゃにしてやることにしたの。そのほうが永友くんもダメージ受けてくれそうだしね」
　強い風で砂が舞い、俺の脛をぴしぴしと打った。
「……晴香ちゃん、どうかしてるよ」
「どうもしてないよ。私はずっとこんな感じ。永友くんは私のことなんか何にも知らないじゃない。私に弟がいるのかどうか、それさえも知らないくせに」
「なんで茉莉子なんだよ？茉莉子は関係ないだろ？」
「関係おおありだよ。なんなのあの子？」
「だから関係ねーよ！俺をボコればいいだろが！」
　吠える俺を威嚇するように、右のおっさんが金属バットを構えた。

晴香ちゃんは声を上げて、うれしそうに笑った。
「きたきた。それが見たかったんだ。そういうすぐに熱くなるところ、好きだったな。ねえ、一年生の夏休みに入るちょっと前、ちょうど今頃だね。三年生が私に水鉄砲撃ってきたときのこと覚えてる？」
それって晴香ちゃんだけじゃなくて、未来とか結構みんなやられてたはずだけど、俺は何も言わずにうなずいた。
「あのとき、怖くて誰も文句言えなかったのに、永友くんは一人で三年生に殴りかかって行ったよね。結局、集団リンチにあって病院送りにされてたけど」
「そんなこともあったね」
「あのときかな？永友くんのこと好きになっちゃったのは。漫画の主人公みたいだったもん」
「漫画の読みすぎだったんだよ」
晴香ちゃんはクスクスと笑う。
「いいよ、永友くん。あのときみたいに、今度は私に殴りかかってきてよ。そしたら、毎日お見舞いに行ってあげる」
もう一人のおっさんがバットを頭上に掲げた。俺は拳を固めてあごを引いた。
「後先考えずにその場の感情で突っ走るのが永友くんでしょ？ほらほら、茉莉子ちゃん、いまごろ顔腫らして泣いてるよ？痛いよーって。こーたろーくーんって。あはは」
俺は鼻をすすり上げた。
晴香ちゃんは少しの間何も言わなかった。でも晴香ちゃんの驚愕とか落胆とかそういうのは生ぬるい海風に乗って俺のもとに届けられた。きっと二〇一〇年になんか全部ぶっ壊れたマシーンを見るような目で、俺のこと見てるんだろうな。
「ちょっと、泣いてるの？」
うるせーよ。昨日からこっち涙腺ゆるみっぱなしでどうしようもねえんだよ。

大粒の涙がポタポタと砂浜に落ちる。落ちた涙の跡を見たらもっと泣けてきた。
「……あきれた。永友くん、本当にだめだめになっちゃったんだね」
俺は正座するみたいに膝をついて、砂の上に腕を下ろして這いつくばった。どっちかのおっさんが下卑た声で俺を笑った。
「ほんとに牙抜かれちゃったんだ。てゆうか自分で抜いちゃったのか」
「……いやだ」
「はぁ？」
「嫌なんだよこんなの。なんでこんなんなんだよ」
顔を伏せていても、晴香ちゃんがひき始めてるのがわかる。
「……ちょっと、わけわかんないんだけど」
「おかしいだろ。なんで晴香ちゃんそんなになっちゃったんだよ？私の何を知ってるのじゃねえよ。そりゃ知らねえけどさ、でも絶対こんなんじゃなかっただろ？いかれてるよ！なあ。なんで茉莉子なんだよ？関係ねーじゃん。だって茉莉子関係ねーじゃん！全然関係ねーじゃんよ茉莉子は！とっとと俺をやればいいだろ？それで気が済めよ！俺の指とか詰めりゃいいだろが！なんだったら鼻にロケット花火突っ込まれてもいいよ！なんで茉莉子嫌えるんだよ！あいつすげーいい奴なんだよ！なあ、なんでだよ、晴香ちゃん……」
俺は砂に頭を押し付けて、大地に叫ぶみたいに無心で声を張り上げた。
「永友くん」
砂まみれの顔を上げると、晴香ちゃんは野良犬を追い払うように手を振ってた。
「マジうざ」
俺は右手の甲で鼻水を拭いた。
「……土下座する」
晴香ちゃんは冷たく鼻で笑う。
「もうしてるじゃない。これ以上私の青春を汚さないで」

晴香ちゃんは海の上の三日月を見上げた。
「心の底から失望したわ。昨日よりずっと嫌いになった。あなた、本当にあの永友虎太郎くんなの？もう顔も見たくない。早く帰って、朝まで泣きながら茉莉子ちゃん待ってなさい」
あんたももう俺の晴香ちゃんじゃねえよ、って言いかえそうかと思った。でもそんな憎まれ口はどうあがいても出せそうになかった。俺はふらつく足を砂上に突き立て、砂と涙を拭いながら立ち上がった。体は五十メートルプールを四往復した後みたいに重たかった。最後に俺はぼやけた視界に、本当に俺を見ようとしない晴香ちゃんをとらえて、振り返って泣きながら走った。足がもつれて二回こけた。

13　ごめんな

身投げするかもしれない女を勢い込んで助けに行って、ここまで泣かされて帰ってくる男も俺が初めてじゃないかと思う。さっき再構築したばかりの俺のアイデンティティは見るも無残に踏みにじられて、八方散り散りに霧散してしまった。

走っているうちに涙は乾いた。俺は全身にべったり張り付いた砂を素早く払ってバンに乗り込み、バックで駐車場から出した。晴香ちゃんのミニクーパーの丸い目が、寂しげに俺を見ていたような気がした。

「茉莉子……」

二車線の国道を百キロオーバーで引き返しながら、俺は呪文を唱えるようにつぶやいた。

一体、どこでどうやっておけば、こんなことにはならなかったのだろう。たぶんこれは最悪のシナリオ。俺と晴香ちゃんは高校の頃にまともなカタチで出会っていて、おおまかに言ってしまえばごく普通のクラスメイトで、お互いにお互いのことがなんか気になっていた、っていうことだ。それがどうしてこんなにこじれた？俺が保険金ニートに成り下がったからか？晴香ちゃんが『ひなの』になったからか？そんな状態で再会したからか？でもこれよりよくする方法なんていくらでもあったはずだ。狙ってもこんな泥沼にはなかなかたどりつけねえよ。感情、時間、タイミング。いろんなものが悪いときにいろんなことが起こってた。だからだ。そして、俺がとどめを刺した。

「茉莉子……」

俺はバックミラーを覗きながら、もう一度つぶやいた。

「なんで黙ってんだよ」

「だって声かけづらいんだもん」

茉莉子がふてくされた声で言った。そりゃそうか。どうせすげー

顔してるんだろうな、俺。
「晴香さんに会えたの？」
「会ったよ」
少し間が開く。
「その……、生きてたよね？」
「ああ」
「よかったー。店長一人で帰ってきたから、何かあったのかなって心配してたんだよ」
茉莉子はほーっと安堵の息をついた。
「えーと、じゃあ、何があったの？」
「あー……」
「許してもらえなかったの？」
「許してもらおうなんて最初っから思ってねーよ」
「だったら何？」
「男といた」
「うわ」
「バット持ったおっさんが二人」
「なにそれ？」
茉莉子がシートの隙間から身を乗り出してくる。俺は茉莉子の顔をチラリと見て、またヘッドライトの向こうを見た。
「茉莉子」
「ん？」
「ちょっと、隣に来てくんない？」
「いいよ」
茉莉子はもぞもぞと身を捩じらせながらシートの間をすり抜けて、すぽんと助手席におさまった。それから重ねて持ってた文庫本を一冊除いて足元に置いた。俺は室内灯をつけた――――――。
さっき家を出た後、駐車場でライトバンに乗り込んでキー差し込

んで、でもどうしても茉莉子のことが気になって、結局、店のシャッターの前に車停めてた。裏口に走ってドア開けたら、段ボール箱に本いっぱい詰め込んだ茉莉子がなんか走り回ってた。それ持って追いかけてくるつもりだったらしい。俺は玄関の脇にぶら下げてあったラジオ付きの懐中電灯を段ボールに入れて奪い取って、バンの貨物スペースに茉莉子もろとも放り込んだ。やっぱり茉莉子を一人で残していくのは心配だった。二本目の無言電話のタイミングが良すぎたことも気になってたし、それに、そんなことよりもただ単純に、俺が茉莉子にそばにいてほしかった。

――――――さて、ここから先はできることなら黙っておきたいし、そもそもそれを認めたくない。茉莉子には聞かせたくない話だし、晴香ちゃんのことをちょっとでも悪く言いたくない。でもターゲットは茉莉子であり、さしあたっての危機は回避できても、まだ狙われている可能性は十分にある。家の周りを武装したおっさん連中がたむろしているかもしれない。そうなったときに事情を説明している時間的余裕は、きっとない。

「てゆうか店長」

逡巡中の俺に茉莉子が声かけた。

「なんだよ」

やけにちりちりする視線を顔の左半分に感じるのだが。

「また泣いたの？」

お前にだけは言われたくねえ。

「泣いてねえよ」

茉莉子がすーっと顔を近づけてきて、俺の目に息吹きかけた。俺は首を思いっきり右に倒した。

「目、真っ赤だよ」

「シートベルトをしろ」

「店長も泣き虫だよね」

俺は左手を伸ばして室内灯を消した。茉莉子がまたつけた。チラッと見たら、にやにやしてやがる。
「お前うぜえよ」
「でも、泣くのはいいことなんだよ。涙が出ないと、悲しいってことがわかりにくいからね」
俺が無視してたら茉莉子は体を戻して、ぶーぶー言いながらシートベルトを付け始めた。そのまましばらく走る。なかなか言い出すきっかけがないんだ。俺は片手でハンドルを固定しながら、何度も横目で茉莉子の様子をうかがう。茉莉子は膝の上に本を開いて置いて、行儀よく座っている。追い越す車もまばらな日曜の深夜の国道の長い直線。等間隔で設置された外灯の明かりで、茉莉子の姿も見え隠れ。
「茉莉子」
「店長はいっぱい名前呼んでくれるね」
茉莉子がうれしそうに言った。
決死の思いで固めた決意が簡単に揺らいだ。マジで聞かせたくない。でも、俺は覚悟して、切り出すことにする。その前に空咳を一発。そして、息を吸う。
「茉莉子」
「はーい」
だから、お前を喜ばせるために言ってんじゃねえって。
「お前、ついて来て正解だったぞ———」

俺は浜辺での一連のやりとりを洗いざらい茉莉子に話した。要約しだすと俺は大事なとこまで省いてしまいそうだったから、犬が吠えていたこととか、占いが九位だったことまで話した。もちろん、茉莉子拉致計画のことも。初めのうちは相槌を返していた茉莉子だったが、次第に黙りこくり、話が終わったあともずっと何も言わなかった。さすがにショックを受けているのだろう。俺はひどく後ろ

めたい気分になって、ハイビームの向こう側を睨み続けた。久しぶりの赤信号でタバコをくわえて隣を見ると、茉莉子はシートに頭をもたせて、目を閉じて口元に手を当てていた。
「気持ち悪い？」
茉莉子はかすかに首を動かした。肯定か否定かもわからない小さな動作だ。俺は茉莉子に覆いかぶさるようにして、助手席の窓を全開にした。信号が青に変わり、俺は火のついてないタバコをくわえたままゆっくりとバンを走らせて、最初にみつけた自販機の前で車を停めて、最初に目に付いた缶コーヒーを一本買って、茉莉子に渡した。茉莉子はそれを一口だけ飲んでから車を降り、自販機の裏のどぶに吐いた。俺は茉莉子の背中をさすりながら、茉莉子の腕とか脚にまとわりついてくるやぶ蚊をことごとく叩き潰した。感受性の高い子だから、勝手にいろいろと想像して、気持ち悪くなっちゃったんだろうな。だから言いたくなかったんだよ。想像力豊かとか自分で言ってたし。
どうにか茉莉子が落ち着いてくると、俺はさっきの自販機でミネラルウォーターのボトルを買って、キャップを開けて茉莉子に渡した。
「うー…、なんでコーヒー……」
「わるい。嫌いだったよな」
茉莉子はうつむいたまま首を縦に振り、丹念に口をゆすいでいた。やがて口を開く。
「もう、大丈夫」
「嫌な話して、ごめんな」
「車に酔っただけだよ」
二時間くらい前に、「私、車で本読んでても全然酔わないんだよー」とか自慢げに言ってたのは誰だよ。
「行こう。蚊が多い」
俺は涙目の茉莉子の肩を抱いて、車に戻った。

駐車場に車を置かずに、直接店の前に乗りつけた。先に俺が降りて、車にロックをかけて周囲に目を凝らす。半径三十メートルくらい、うちと金物屋の間の細い通路も見たけれど、武装したおっさんは一人もいなかった。というか誰もいない。それから俺は一人で裏口に向かった。裏口の鍵はちゃんとかかっていて、電気も消えている。中に入って電気をつけて、家中をくまなく調べた。風呂もトイレも二階の押入れもどこにも誰も隠れていない。

俺はバンに戻って助手席をノックした。シートの下に身をかがめていた茉莉子がひょこっと顔を出す。

「大丈夫っぽい」

「うん」

俺は段ボール箱を抱えて、茉莉子を体で隠しながら歩いて、家に入った。茉莉子は大きく伸びをした。

「やっぱり家は落ち着くねー」

「そうだな」

もう、「お前んちじゃねーだろ」とか突っ込む気にもならない。むしろそう言ってくれることがうれしかった。

「店長、私思うんだけど」

「ん？」

「晴香さん、本当は私を誘拐するつもりなんてなかったんじゃないかな」

「なんで？」

「だってあの人、そんなに悪い人じゃないでしょ？」

「そうだよ」

「晴香さんは店長に嫌われたかっただけなんじゃないかな。わかんないけど」

嫌われたかった？

「よくわかんねーな」

「きっと晴香さんは、店長に謝ってなんかほしくなかったんだと思

うよ。晴香さんは店長のことが好きだったんでしょ？私、さっきから車の中で晴香さんの気持ちのことを考えてたの。もし私が店長にひどいこと言われたらどうするかなーって、考えてた。ひどいこと言われて傷ついて、それでもまだ店長のことを好きでいられたら、謝ってほしいと思う。それに、店長のことだから、絶対に謝ってくれるとも思うし、そしたらたぶん、許しちゃうと思う。でも、それで自分の気持ちが微妙になっちゃったとしたら、中間じゃなくて、大好きか大嫌いかどっちかの間で大きく揺れてるんだとしたら、徹底的に嫌われて、全部おしまいにしようとするかもしれない。そのために晴香さんは、自分はこんなにひどい女なんだよー、ってアピールしたんじゃないかな。そんな気がするの」

俺いま二回告られたよな。

「なんだよそれ」

「だから、晴香さんは店長に嫌われることで、店長を嫌いになろうとしたんだよ」

「よくわかんねーけどさ」

「わかってよ」

茉莉子は俺を叱責するように、強く言った。さっき『私のことなんか何にも知らないじゃない』って言った、晴香ちゃんの姿がだぶる。

「…まあ、そうだったら、まだましだな」

「そう思っていようよ」

「ああ。つってもお前気をつけろよ。まだ狙われてるかもしれねんだし」

「でも、店長が一生懸命守ってくれるんでしょ？」

「まあ、がんばりますけどさ」

「じゃあ、平気だよ」

茉莉子が見たことない顔して俺を見てくる。いや、そんな目で見られたってさ、俺はあいまいに目をそらしてぽりぽりと頭をかくとかしかできないぞ。

「風呂、先入るか？」
「今日はいい」
茉莉子はぱんぱんと太ももを叩いて、段ボールを引きずって店舗に向かった。
「時間ないんだから」
俺は早歩きで茉莉子に追いつく。よく見ると茉莉子の目の下にうっすらくまができていて、痛々しかった。さっきも泣いたからまた目赤いし。休めなんて言っても絶対に聞かない。でも俺は承知の上で、「ちょっと休めよ」と言った。「店長こそ休めば？」と茉莉子は言い返した。
「休めるかっつーの」
俺はポケットの中身を出して、カウンターに置いた。
茉莉子は本棚の前にスタンバイして、首だけで振り向いた。
「店長、ありがとね。店長が永友古書店の店長でほんとによかったよ」
「そういうのは全部が終わってから言えよ」
「…そだね」
「明日、一緒に会いに行くぞ」
「はい」
茉莉子はくしゃっと笑って、そっぽ向いて、しばらく顔を上に向けてた。だからいちいち泣くんじゃねえよ、ガキが。俺も泣きそうになるだろが。

14　店長のばか！

言っても海で潮風に当たったし砂まみれになったし、体がべたついて気持ち悪いから風呂沸かした。なんだかんだで茉莉子も入った。最初に俺、次に茉莉子。茉莉子は最初の日よりは長風呂だったけど、それでも十分くらいで髪の毛から水たらしながら出てきて、そのまま本棚の前に戻った。

「茉莉子ー」

「なにー？」

「ちゃんとお湯抜いてきたかー？」

「抜いたよー」

こういう会話も本当にスムーズだ。なんだろう。会ってからまだ三日しか、たった三日しか経っていないのに、茉莉子はすでに俺の生活の巨大なワンピースとしてバッチリはまり込んでいるみたいだ。本が見つかろうが見つかるまいが、明日の今頃にはきっと俺は一人で、一人でスーパーの弁当食って、一人で一番風呂に入って、一人でお湯抜いて、本を探すこともなく、部屋でタバコ吸いながらクローズの続きでも読んで眠るんだろうなって思ったら絶望的な悲しみが込み上げてきた。俺は気づかれないように後ろを向いて、タオル被ってる茉莉子を見て、いなくならないでほしいなって、そう思った。こういう感情は抱いたことがなかった。恋とか愛とかそういう次元じゃない気がする。茉莉子は母さんみたいに優しくて、妹みたいにかわいくもある。家族だ。茉莉子に家族になってほしいんだ、俺は。母さんが死んで、じいさんが死んで、親父が死んだ。そして茉莉子もいなくなって、俺はまた一人に戻る。茉莉子が帰った後、俺は孤独に耐えられるのか。孤独死すんじゃねえか。考えないようにしてたけど、どうやら俺はこの家の中に俺しかいないということがたまらなく淋しかったらしい。いっそ本を処分するのをやめにしようか。そうすればたとえ明日までに見つからなくても、来週末に

はまた茉莉子がうちに来てくれるかもしれない。その次の週にはたぶん夏休みに入るだろうから、そしたらもっとまともな時間に海に行ったりもできるかもしれない。でも父親が見つかったら、茉莉子はもう俺に会いになんか来てくれないかもしれない。来ないだろうなって、思う。そしたら茉莉子は父親と暮らすのかな。茉莉子の父親にも家庭があるかもしれないし、どういう状況かはまだわからない。でも、まともな、立派な父親だったら、娘と暮らそうとするんじゃないか。ましてや茉莉子だ。こんなにできた娘はなかなかいない。茉莉子と新しい生活を始める茉莉子の父親のことを考えてたら、なんかすげー悔しくなった。嫉妬だ、嫉妬。俺はまだ見ぬ茉莉子の父親に嫉妬すら覚え始めている。ったく、マジでどうかしてるよ。茉莉子のためを思えばきっとそれが一番いいのに、茉莉子が別の家族を持つことを認めたくない俺がいる。いや、別の家族って茉莉子は俺の家族でもなんでもないんだけどさ、でもそばにいてほしいんだよ。いっそのこと、「好きだから一緒にいてくれ」とか言ってみるか。いまなら、「いいよ」な気がするし。でもそういう感じじゃないんだよな。そんなこと死んでも言えないけどさ。だから、俺は心のどっかでこのまま茉莉子の父親がみつからなければいいなって思ったりしてる。どうせならこのまま、もう朝が来なくてもいいんだ。このままずっと、背中越しに、「茉莉子」って名前を呼んでいたい。俺はもうそれだけでいいんだよ。とか考えながらも時計は回り、最後に見たときは五時半。いつの間にか俺はへたり込んでて、寝てた。

バタン！バタン！バタン！

開かないまぶたを擦りながら壁時計に目をやると、十時半。意外と冷たくて気持ちがいいタイルの床から頬を引き剥がす。この状況で五時間はどう考えても寝すぎだな。茉莉子に怒られそうで、なかなか顔が上げられない。てか、この『バタン！バタン！バタン！』

てなに？視界の上隅に開かれたまま乱雑に折り重なってるハードカバーが入ってるんすけど。何かが飛んできて俺の真横の本棚にぶち当たった。何かっていうか本だけどさ。何やってんだあいつ。
「茉莉子！」
俺は跳ね起きて本棚の裏側にいる茉莉子に駆け寄った。茉莉子は本の山の中にいた。ページをパラパラマンガでも見るみたいにざーっとめくって肩越しに放り投げている。泣きながら。てか号泣しながら。俺は茉莉子の細い手首を掴んだ。
「お前何してんだよ？」
「放してよ！」
茉莉子は腕を上下に激しく振って、俺の手を振り解こうとする。俺は握る力を強めて押さえつけ、もう片方の手で茉莉子の肩を掴んだ。茉莉子は赤い目で俺を睨み上げ、はぁはぁと息を切らしている。
「……痛いから」
小さな声でささやくように言われて、速やかに手を放す俺。自由を取り戻した茉莉子はまた本棚に手を掛けて、今度はろくに中も見ずに投げ始めた。
「やめろよ！全然見落としてんぞ？」
「だってみつからないんだもん！」
茉莉子は叫びながら本を撒き散らす。
「もう時間ないのに、店長寝ちゃうし！」
「だったら起こせよ！」
「起こせるわけないじゃない！」
「いまさら気ぃ使うなっつの！つかそんな気使えるなら散らかしてんじゃねえよ」
「もうすぐ業者さん来るんでしょ？」
「来るよ。たぶん昼からだよ」
「でも時間ない！みつからない！」
「だからってこんなことしてても見つかるわけないだろ？」
「でもどうしたらいいの？本売られちゃったらもうお父さんにたど

りつけないよ！」
「じゃあ売らねえよ！本売るのやめるから落ち着けよ！」
「でも店長にこれ以上迷惑かけられないよ！」
「だからいまさら気ぃ使うなって言ってんだろが！」
「使うよ！店長関係ないのに一生懸命手伝ってくれて、私もう罪悪感でいっぱいなんだよ！」
「っだから関係ねーとか言ってんじゃねえよこら！」
パシーン！って。あれ？うわやっべ。殴っちまった。やーべーやーべー、茉莉子ちゃん、ほっぺた押さえてうつむいて。すげー泣かれそうだし。てか殴んなよ俺。寝起きでテンション上がりすぎだって。ほら、そんな涙ぽろぽろの目で睨まれたらさ、心臓チクチクするんだわ。
「茉莉子ごめん茉莉子」
茉莉子は一番下の棚からでっかい画集をひきずり出して両手で振り上げ、俺の頭に叩きつけた。
「店長のばか！」
いや、ばかってさ。でも頭押さえてる俺と、ほっぺた押さえてる茉莉子の真ん中を何かがひらひら舞って、花びらみたいに本の上に落ちた。俺の頭から出てきたのかと思ったけど、そんなはずはなく、茉莉子が振り下ろしたルノワールの画集から飛び出したそれは、サービス判の写真だった。若くてきれいな女性と、一言では言い表せない風貌の男が、ぴったり寄り添って写ってる。茉莉子はゆっくりと膝を落とし、金魚すくうみたいに慎重な手つきで、そっと写真を拾い上げた。
「……店長」
茉莉子は写真を見つめながら、かすれた声で言う。
「……これ、お母さん」

15　永友古書店です

茉莉子は本棚にもたれて座り込んで、ずっと写真を眺めている。最初は俺にも見せてくれたけど、いまは、「恥ずかしい」とかなんとか言って見せてくんない。でもあの異様な光景は俺の網膜にくっきりと焼きついていた。

写っている女性は確かに茉莉子によく似たきれいな人だった。カメラをまっすぐに見据えて、男の肩に頭をもたせて幸せそうに笑ってる。で、肝心の男の方はというと、これがまたとんでもないことになっているのだ。昔のスキーウェアみたいな柄のピチピチのライダースーツに身を包んで、黄色いキャップを後ろ向きに被っていて、フレームなしのあほみたいにバカでかいサングラスをかけてて、挙句の果てに口に迷彩のバンダナを巻いていた。そのうえ左手の親指を誇らしげに突き上げている。どっから見ても危ない奴だ。だせえ。てか怪しすぎ。なんでこんな変態の隣で素敵に笑えるんだろうな、大宮美奈子さんは。騙されてんじゃねえか。茉莉子の母親ってことは、やっぱ天然なんだろうし。写真の右下には日付が入っていて、十八年前の秋だ。てことはやっぱりこれが茉莉子の父親なんだろう。茉莉子も難しい顔して写真を見てる。うれしそうな顔をしているときはお母さんを見てて、隣の男に目を移すと、盛大に表情を曇らせる。で、幾度となくため息をつく。

「店長ー」

「あー？」

「野菜ジュースちょーだい」

「はいよ」

すっかり力の抜けてしまった茉莉子を背に、俺は冷蔵庫に向かって、野菜ジュースを出してコップに注いだ。ちなみにこの野菜ジュース二本目だ。茉莉子がはまって飲みまくってる。さっきから茉莉子は携帯を開いたり閉じたりしている。写真の裏には茉莉子のお母

さんの筆跡で電話番号がばっちり書いてあるみたいで、茉莉子はその番号を携帯に打ちこんで消してを繰り返しているのだ。そりゃためらうわな。俺は茉莉子にコップを手渡して、そのまま隣に腰を下ろした。
「店長、私ショック」
「察するよ」
「私のお父さん、これだよ？」
茉莉子は顔をゆがめて膝の上に置いた写真を指差す。
「これじゃ変態だよー」
「変態の娘」
「やめてよ」
茉莉子はくちびるを尖らせた。俺はその顔が見たかっただけなので、満足して口をつぐんだ。茉莉子はまたしてもため息。
「お母さんもなんでこんな人の隣で幸せそうに笑ってるんだろ」
「まあ、見た目はこんなだけど、実は案外いい奴なんじゃない？」
「店長みたいに？」
「うっせえ」
って褒められたのか？
「んー、じゃあ店長、もし自分のお父さんがこれだったらどうする？」
「生きる気力をなくすかもしれない」
俺は正直に言った。
「だよねー」
茉莉子は野菜ジュースを一口飲んでうなだれた。
「店長―、電話したくないよー」
「いや、しろよ」
「するけどさー。なんか会いたくなくなっちゃった。もうちょっとスマートでかっこいい人想像してたんだけどなー」
「でもこれだって素顔わかんねーじゃん。これも素じゃなくて何かの罰ゲームでこんな格好してるのかもしれないし」

茉莉子は、そうかなー、って言いながらまた携帯をパカッと開いた。
「俺はカウンターでタバコ吸ってるからさ、とっとと電話して居場所聞き出して、会いに行こうぜ」
「うん」
茉莉子はちょっと微笑んでうなずいた。俺はカウンターの親父椅子に座って、タバコをくわえて火をつけた。いやそれにしても笑っちまうわ。笑い事じゃないんだけど、あんだけ真剣に探してて結果あれが出てくるってのが否応なくうける。なんだよあのサングラス。いまでかいの流行ってるけどさ、あのサイズはねえわ。頬肉もろ当たってんじゃん。あんなの刑事コントでしか見たことねえよ。しかも口に迷彩バンダナって。どこと戦争してんだよ。俺はカウンターの上に足を投げ出して、煙をひゅーっと吹き出しながら、デジャヴった。

『あんなの刑事コントでしか見たことねえよ』

……なんか俺、だいぶ前にこれと同じこと誰かに言った気がする。しかもそのときは『あんなの』じゃなくて『こんなの』だった。あれ？あれ？あれあれあれ？ちょっと待てよおい。いくらなんでもそれはねえだろ。でもたしかあれは――――。
俺はタバコをくわえたまま慌ててしゃがんで、カウンターの最下段の引き出しを開けた。それは待ち構えていたかのように、一番上に乗っかってた。思わず吹き出してしまう。で、なんかドキドキしてきた。いや、ちょっと待ってくれよ。頼むから少しだけ考える時間をくれ。でもだめか。さっきから頭の上で電話がピリピリ鳴ってる。俺はあきらめて受話器を取った。
「はい、永友古書店です」
「え？」
耳元と、前方からおんなじ声がする。後ろ向いて背中丸めてしゃ

がみ込んでた茉莉子がばっと振り返って、目をでっかくして、口をパクパクさせながらこっちを見ていた。
「あ……、あ、ごめんなさい。間違えました……？」
「はい」
「失礼しました……」
茉莉子は電話を切って、何度も首を傾げながら、写真の裏と携帯の画面をしつこいくらいに見比べている。俺は最後の一口を吸い込んで、タバコを灰皿に擦りつけた。はー、視界が暗いわ。再度、電話が鳴り始めた。俺は煙をしっかり吐き出してから、受話器を取った。
「永友古書店です」
「……うそ？なんで？」
茉莉子の視線は写真と携帯と俺の間をめまぐるしく動き回る。
「……そういうことかよ」
俺は静かに受話器を置いた。それから親父のサングラスを外して、カウンターにカチャリと置いた。
「うそ、店長が……」
茉莉子が胸の前で携帯を握り締めて、つぶやく。俺は軽く微笑んで、うなずいて見せた。
「お父さん？」
あほか。
「お兄ちゃんだろ」
ってマジか。

16　超優しかったね

俺と茉莉子は変態の子どもらしい。

さっき立花さんから電話があって、うちに来るのは三時くらいって言ってた。俺は三日ぶりに制服に着替えた茉莉子を助手席に乗せて、バンを出した。

「店長ー」

「んー？」

「私まだ信じられないんだけど」

「俺もだよ」

俺はタバコを吸いながら、左車線をゆっくりゆっくり走らせる。茉莉子はちょっと開けた窓におでこをくっつけて、前髪だけ外に出している。何がしたいのかよくわからん。でも今日もいい天気だ。

「だって店長ってゆうかお兄ちゃんだよ？」

「なー」

「ありえなくない？」

「ありえねえよ」

前を走っていたバスが停留所で止まった。なんか抜くのもめんどくさくて、バスが動き出すまでそのまま後ろで待ってた。バスから降りてきたいかにも学校ふけました的な茶髪腰パンが二人、ティーンエイジャー特有の生々しくてねたつく視線を茉莉子に向けた。でも運転席の俺と目が合うと『そんなにらむんじゃねぇーよ』みたいな感じで、不愉快そうに顔を背けた。あるいは『そんなにらむんじゃねぇーよおっさん』みたいな感じだったかもしれない。俺が彼らと同じくらいの頃に抱いていた二十歳の印象を踏まえると、たぶん後者が正解。茉莉子は窓を閉めて座りなおした。俺はタバコを消して、ダッシュボードからブラックガムを二枚抜き取って、一枚を茉莉子に渡した。すげー眠そうだからほんとは寝かしてやりたい

んだけど、もうちょっとだけがんばってもらおう。
　ありえない、とかうそぶきながらも、実のところ俺は完璧に確信しきっていた。あんな写真とメモだけでそこまで飛躍するのは馬鹿げている。三日前の俺ならたぶんそう思っただろう。今の俺はそんなふうには思わない。だってそう考えてみれば、いろんなことに説明がつくんだ。最初から不自然なくらいにフィーリングが合ったこともそうだし、茉莉子の情緒不安定っぷりなんか特にそうだ。しょっちゅう感情暴発するところとか、すぐ泣くところとか、思えば親父にそっくりなんだ。でも、なあ。
「にがーい」
　茉莉子は顔をしかめていた。
　はあ。
　妹って。

　親父の墓、というかうちの墓は遠縁の寺の敷地の中にある。俺は寺の庭に車を停めて、住職に見つからないようにこっそりと墓地に向かった。灼熱ギラギラのバーニング・サンがほとんど火炎放射に近い日差しを容赦なく俺たちに浴びせかけてきて、しかもセミがうっさい。茉莉子は黙って俺の後ろをついてくる。茉莉子は寺が近づくにつれて次第に表情を硬くして、ほとんど口も利かなくなった。まあ、いろいろと思うところがあるのだろう。俺は墓地の入り口で手桶にたっぷり水くんで、ひしゃくを突っ込んで歩き出した。うちの墓は墓地の一番奥にある。平日の昼前、墓参りをしている人は誰もいなくて、途中で太った黒い猫とすれ違っただけだった。茉莉子がなんか反応するかと思ったけど、シカトしてた。『永友家之墓』って書いてある苔のこびりついた墓石の前に立つ。俺は隣に並んだ茉莉子を見た。
「これ」
　茉莉子は墓に目もくれず、下を向いて黙り続けていた。ったく、

ほんとに感情の起伏の激しい子だよ。
「もし親父と二人で話したいこととかあるんなら、離れてるよ」
茉莉子はぷるぷると首を振って、「近くにいて」って言った。
それでとりあえず俺はひしゃくに水をすくって、てっぺんからかけてみた。真夏に墓石に水をかけるのってけっこうな快感だ。じゅわーってもんじゃみたいな音が聞こえるような気がするし、しかも先祖孝行な感じもする。俺は満遍なく墓石を濡らして悦に浸り、墓の前に設置してある親父が生前から愛用していた『親父』って彫ってある湯飲みにもなみなみと水を注いだ。それからひしゃくを手桶に戻して置いて、うつむいて突っ立ったまんまの茉莉子の斜め後ろに下がった。にしても暑い。パンツの後ろポケットに両手突っ込んで墓を眺めて、花とか買ってくるべきだったかなとか思った。そういや線香も持って来てない。なんだかんだで俺もかなり取り乱してるんだ。あーあ、いま墓の中でどうなってんのかな。この親父、ちゃんと茉莉子が娘だってわかってんのかね？
「親父」
俺は後ろから茉莉子の両肩を掴んでぐっと前に突き出した。茉莉子はきょとんとした顔で、首をひねって俺を見上げた。
「茉莉子だ。俺の妹で、親父の娘」
ああ、これで墓の中の永友家大騒動だね。母さん、怒ってるだろうな。じいさんとか、先祖代々が親父を総すかんの図が目に浮かぶ。でも俺のそんなくだらない妄想をよそに、茉莉子はこのクソ暑い中で、シリアスに震えてる。
「……大宮、茉莉子です」
それ以上、言葉が出てこないみたいだ。俺は茉莉子の震える肩に手を置いたまま、茉莉子の丸い頭越しに、さっそく乾き始めた墓石を見ていた。
「店長」
「うん」
「ずるいよ、店長」

「え、俺か？」
「なんでこの人死んでるの？」
茉莉子はくるっと振り向いて、俺の胸を強く叩いた。叩いた手を開いて俺のシャツを握って、そのまま俺に身を預けてくる。俺はどうしようかなって思ったけど、茉莉子のちょっと汗かいてる白い首筋に手を当てて、ぽんぽんぽんと叩いてやった。茉莉子が、呻きだした。
「店長、私ね……」
「大丈夫」
茉莉子はもう片方の手にも俺のシャツを握らせて、大きく息を吸い込んだ。
「私…、本当はお父さんのこと、ずっと、めちゃくちゃ恨んでて……」
「うん」
「…お父さんは私の存在すら知らないんじゃないかって思うと、悲しくって、悔しくって、寂しくって…、仕方なくって……、私のこと知ってますかって、どうしてお母さんを捨てたんですかって、聞きたくって……」
「だよな」
茉莉子は俺の胸に頭をこすりつけるように、何度も深くうなずいた。俺は茉莉子の髪の毛の中に指を入れた。茉莉子の背中がまた膨らむ。
「それでね…、どんなに立派な人だったとしても、会えたら文句言って、殴って、またひどいこと言って、人生めちゃめちゃにしてやろうって……、ほんとはずっと、ずーっと、そう思ってたんだよ……。なのに、もう死んでるなんてさぁ…、しかも店長のお父さんだなんて……、こんなの、卑怯だよ……」
「もう死んでるけど、怒りたいだけ怒れよ」
茉莉子は背伸びして俺の肩に頭をのせた。
「店長のお父さんにひどいこと言えるわけ、ないよ……」

肩が熱い涙で濡れて、まるで麻酔を打たれたようにふやけてくる。
俺は茉莉子の背中に手を回して、遠慮がちに抱き寄せた。
———なあ親父。知らねえだろ？あんたの娘はすぐ泣くんだよ。
茉莉子の頭を撫でながら、心の真ん中で静かにつぶやく。俺はひしゃくを抜いて高々と掲げ、墓石めがけてまっすぐに振り下ろした。ぱかん、と乾いた音が響き、茉莉子が顔を上げて俺を見て、墓を見る。俺は構わずに何度も何度も、俺がいつか入ることになる墓を殴り続けた。金属製のひしゃくはへこみ、墓石のカドが欠けて弾け飛んだ。茉莉子は涙も拭わずに、俺の手を抑えた。
「店長やめて…。そんなことしても意味ないよ」
そんなことはわかってる。
「気が済まねえんだよ」
茉莉子がふるふると首を振る。泣いてる顔で笑ってくれる。
「いいよ。私はその気持ちだけでうれしいから。ね？」
違う。これは俺と親父の問題でもあるんだ。
ひしゃくの柄がボキッと折れた。俺はそのことについて激怒して、墓に思いっきり投げつけた。
「っんだよこのクソ親父！」
俺は靴底で墓石を蹴りつけ、卒塔婆をへし折り、親父の湯飲みを踏み砕き、水の入った手桶を墓に叩きつけた。水は俺と茉莉子を少し濡らし、桶はバラバラに砕け散った。茉莉子が短い悲鳴を上げる。
「クソみてえに勝手に死んでんじゃねえぞおい！ちゃんと茉莉子に謝れや！」
「店長…、もういいから、もう、やだよ……」
俺は、シャツの背中ひっぱってぶらさがるみたいになって泣きすぎでもう何言ってるのかもよくわからない茉莉子をひきずりながら、墓石に組みついた。このまま真上に引っこ抜いて、バックドロップかましてやろうって、真剣に思った。でも墓石なんてそんな簡単に抜けるはずないし、茉莉子はとうとう座り込んで泣くし、住職がタコみたいな顔して走ってくるから、仕方なくやめた。

墓石にマジギレした奴も俺が初めてかもしれない。
めちゃめちゃ怒ってる一応親戚な住職には、「家庭の問題と心の葛藤です」とか適当なこと言って謝った。茉莉子はずっと泣き止まなくて、住職も茉莉子のことが相当気になってたみたいだけど、例によって母方の親戚ってことにしといた。で、いま車の中。エアコンかけてアイドリングさせながら窓に肘ついてぼーっとしてる。なんかまだ気持ちが落ち着かない。墓石殴ったってことは母さんとかも殴ったってことだよなーっとか思ったら急に気が重くなってきて、俺は周り気にして車ロックして一人で降りて、もう一回うちの墓の前に立って、さっきはごめんなさいって素直に謝った。もちろん親父は対象外だ。あんな親父はあの世で村八分くらえばいい。俺は親父に失望してるし、これからは軽蔑することにした。母さんと三歳かそこらの俺をほっぽり出して、気持ち悪い変装して大宮美奈子さんと会って、子どもまで作って。それって家庭のある男のすることかよ。そのくせ作った子どものことはほったらかしで。しかも大宮美奈子さんがうちに本売ってるくらいなんだから、親父は絶対茉莉子のことも知ってたんだろ。なのになんで茉莉子も俺も何にも知らなかったんだよ。どんな事情があったのかなんて知らないが、家庭のある男としてっていうか、もう人として完璧におかしい。あんな奴が父親だなんてマジで恥ずかしい。でも、それでもだ。悔しいけどやっぱり俺はそれ以上に親父に感謝もしていて、それはもちろん茉莉子のことだ。そして茉莉子を永友古書店に導いてくれた大宮美奈子さんにも同様に感謝してる。二人揃って家族をなくした俺たちを出会わせてくれたのは大宮美奈子さんで、そのきっかけというか、諸悪の根源というか、すべての大元はやはりあのクソ親父なんだ。いまはまだ混乱しててまともに考えらんないけどさ、俺に茉莉子を残してくれたってことだけは、圧倒的に感謝してる。今日のところは、それでいいか。

俺は踏み潰した湯のみのカケラを拾い集めた。これはさすがにやりすぎだったな。親父が毎日洗ってお茶飲んでた湯のみだし。いまさらながら自分でもひくわ。まあ、これも元は俺が小学校の修学旅行の土産であげたやつなんだけどさ。今度違うの持ってこよう。俺愛用の『息子』って書いてあるやつを親父に捧げることにしよう。

「そのうち美奈子さんの墓にも行ってくるわ」

俺は欠けた墓をぺたんと叩いた。

車に戻ると茉莉子は助手席におとなしく座っていた。もう泣き止んではいるが、もはやトレードマークみたいになった赤い目をして遠くを見てる。

「暑くないか？」

茉莉子はほんのわずかに微笑む。

「寒いくらい」

俺は窓を開けてタバコをくわえて火をつけた。茉莉子も助手席の窓を全開にする。それからダッシュボードに手を伸ばし、俺がしまったばかりのタバコを出して、くちびるの端にくわえて、何の断りもないまま火をつけた。

「無理すんなよ」

「――――ん、意外と平気」

「そっか」

俺は苦笑する。ヘビースモーカーの血統なんだ。

車内に二人の吐き出す煙が充満する。いつの間にかセミがぴたりと鳴き止んでいた。静かだった。どことなく居心地が悪くて、何か音楽をかけようと思った。でもｉＰｏｄを持ってくるの忘れてた。今日はそこまで気が回らなかったんだ。ラジオはだめだ。この車はＡＭしか入らない。俺は親父の遺品であるカセットテープを適当に選んでデッキに差し込んだ。ノイズ混じりに流れるのは、親父のメインＢＧＭだったボサノヴァのスタンダード。俺はボサノヴァは興

味ないんだけど、でもこの演奏はわりと気に入ってる。一番有名なスタン・ゲッツがやったやつ。てゆうかゲッツが好きなんだ。
「イパネマの娘」
変態の娘が煙と共につぶやいた。
「知ってんだ」
茉莉子はサイドミラーを見ながら目を細くした。
「お母さんがいつも聴いてた。お葬式のときもね、出棺のときにかけたんだ」
「合わねえだろ？」
茉莉子は失笑して、小さくうなずく。
「微妙な感じになったよ。私もそのときだけ泣き止んだ」
茉莉子がずっと泣いてる葬式なんてたまんねえな。
「親父も、毎日聴いてたよ」
俺と茉莉子は同じタイミングでため息をついた。
「なんか、やだね」
「あいつら気持ち悪いな」
俺と茉莉子はカーステレオに耳をそばだてる。寺の庭で、親父の車で、親父の、たぶん、親父たちにとっての大切な曲を、十七歳の妹にタバコを吸わせながら、聴く。何千回も聴いてとっくに聴き飽きているはずの古い曲が細長いワイヤーみたいになって、俺の愚かな心臓に絡み付いて、ほどけなくて、息が詰まって、また涙が出そうになった。
「お兄ちゃん」
茉莉子がいやに熱っぽい声で言った。
「お兄ちゃん言うな」
「なんでー？勇気出して言ってみたのに」
「きめえ。鳥肌たったわ」
「ひどーい」
茉莉子はくちびるを尖らせたままタバコを灰皿に押し込んで、靴を脱いで、シートの上で膝を抱えた。

「てかお前スカート」
「見えてもいいやつだもん」
女子高生文化はよくわからん。ちょうど茉莉子の携帯が鳴った。メールっぽい。
「だれだ？」
別に興味なかったけど、茉莉子の真似して聞いてみた。
「ん、学校の友達。私が学校サボったの初めてだから、びっくりしてるみたい」
「えらいじゃん」
「忌引き以外で休んだのも初めてだよ。皆勤賞なくなっちゃったー」
茉莉子はメールを打ちながら残念そうに言った。こいつ優等生なのな。
「そういえばお前、一人暮らし？」
茉莉子は携帯をパタンと閉じた。
「うん、賃貸マンション。でもおばさん、お母さんのお姉さんがおいでって言ってくれてるんだけど、そこって県外なんだよね。そしたら学校も変わらなくちゃいけなくなるから、ちょっと迷ってて。しかも大学生のいとこが二人いるんだけど、二人とも男だし、なんか苦手でさ。それに私っていままでお母さんと二人で暮らしてたじゃない？だからいきなり五人とかでひとつの家に住むのは抵抗があるっていうか、なんか嫌かなーって。たぶん肩身狭いし」
茉莉子は肩にあごをくっつけて、俺を見ながら話してたけど、俺は茉莉子を見なかった。
「そっか」
「あと、おじさんも怖いし」
「それは、嫌だな」
「…うん」
茉莉子は顔を戻して携帯を開いた。でも何もせずにすぐ閉じた。
ゲッツのテナーとジョアンのボーカルと俺たちの沈黙がぼろぼろのバンを包み込む。このじれったい沈黙を作り出しているのは俺だ。

茉莉子はもう、言うこと言ったみたいな顔してる。でもさ、相手が期待してることが丸わかりなこの状況で、それをそのまま言うのって、芸がないっていうか、恥ずかしいっていうか、なんかすごく嫌じゃないか？

茉莉子は半袖ブラウスの胸ひっぱって、ぱたぱたさせて風を送ってる。両側のウインドウ全開だからさすがに暑くなってきた。

「窓閉めるぞ」

俺と茉莉子は同時に両サイドの窓のハンドルを回した。また車内が冷えてくる。俺はステアリングに両腕を置いてあご乗せて、ゲッツのサックスに聴き惚れているふりをした。茉莉子はシートに身をもたせて、いきなりバタンと後ろに倒した。で、またバタンと戻ってくる。どうやらイライラしておられる。

「店長ー」

「なんだよ」

「さっき、住職さんに私のこと妹って言ってくれなかったね」

「いや、だってあのタイミングでそんなこと言ってもめんどくせえだけじゃん」

でもそのうちちゃんと親戚周りもしなきゃだな。なんて言えばいいんだろ。『妹できました』。頭おかしくなったと思われそう。

「店長、ほんとは私のこと妹だって思ってないんじゃ……」

「思ってないわけないだろ」

「私のＤＮＡを採取して、怪しい機関に調べさせようとか考えてるんじゃ……」

「だから、疑う余地ねえだろが」

つか、疑いたくもねえ。

茉莉子はくちびるを尖らせて、俺を睨みつけてくる。俺はシートを倒して逃げた。案の定、茉莉子もシート倒して追いかけてくる。あーもう。

「スーパーの飯がさ、」

俺はところどころ破れた天井を見ながら言う。

「うん」
「すげー、まずいんだわ」
反応がない。
それどころか、きょとん、へぇー、みたいな空気。
え、これでオブラート巻きすぎか？それこそ勇気出して言ってみたのに。でも言い直すのはマジできっついな。渾身のボケ説明するみたいでさぶすぎる。
「私、作るよ」
でも茉莉子は唐突に、さも当然というふうに言った。俺は体ごと茉莉子のほうに向けた。こっち見て、笑ってた。
「…勝手に風呂のお湯抜くなよ」
「抜かない抜かない。てか、店長が毎日先に入ればいいじゃん。私、本当はお風呂長いよ？」
「じゃあ、そうするわ」
「ありがと、お兄ちゃん」
「だから、お兄ちゃん言うな」
「いいじゃん。私、お兄ちゃんって呼びたい」
「だったらうち来んな。おばさんち行け」
俺はぐーっと伸びをして、反対方向に身を転がした。茉莉子が何も言わなかったから、気になって後ろ見てみたら、なんか寝たままあご引いて、口ぴったり閉じて、スカートぎゅって握ってた。息止めてんのか？
「それ、何してんの？」
「……泣くの我慢してるの」
「ごめん茉莉子」
茉莉子はぷはーっと息を吐いて、目をこすった。って我慢できてねえじゃん。
「ひどいよ。さっきの言い方、すっごい冷たかった……」
茉莉子は目の上に手首を置いて鼻をすんすんさせている。あー、なんかすげーめんどくせえ。妹ってこんなにめんどくせえのか？

「『おばさんち行け』って、ひどすぎるよ…。やっぱり私のこと嫌いなんだ……」
だから好き嫌いの話してねえだろが。
「嫌いじゃないから。うちで俺と暮らそう」
「お」
茉莉子が手首下げたら笑ってる目が出た。こいつどこまでが計算だよ。
「今の言い方は超優しかったね」
「でもマジでお兄ちゃんは勘弁な。なんかほんとにかゆいんだよ」
「わかったよ、店長。ちょっとずつ慣らしてくからね」
ちょっとずつってなんだよ。でも見たら茉莉子はすげーうれしそうな顔してた。また頭撫でてみたくなって、手を伸ばしかけたけど、変な理性が邪魔したから自分の頭かいた。兄妹ってどこまでセーフなんだろな、とか。はは。
「店長」
「んー？」
茉莉子は倒したシートはそのままで、体を起こして、その場にきちんと正座をした。で、三つ指ついて、「ふつつかな妹ですが……」とかやり始めた。
俺はシート起こしてサイドブレーキ下ろしてギア入れて、思いっきりアクセルを踏み込んだ。茉莉子が、「きゃー」って言いながら、貨物シートに吹っ飛んだ。
もううちに帰ろう。

17　よいしょー！

三週間が過ぎた。土曜日の昼下がり。うちに未来と脩平が来てる。いま茉莉子と脩平は二階の居間できゃーきゃー言いながらマリオカートで遊んでる。スーファミ版のふっるいやつだ。

「あいつら仲良しだな」

俺は未来と台所のテーブルで冷やしポッキー食いながらタバコ吸ってまったりしてる。未来は前かがみになって野菜ジュースを一口飲み、舌の先でストローを押す。

「妬いてんの？」

「んなわけねーだろ」

未来は細いタバコをくわえて、にやにやしながら俺見てる。俺は横を向いてふーっと煙を吹き出す。で、思い切って一番気にしていることを話題にしてみる。

「晴香ちゃん、最近どう？」

「どうって、元気だよ」

「そっか」

俺は胸を撫で下ろす。実はあの後、何度も電話してみたのだが、着信拒否され、メアドも変えられ、先週ついに番号そのものが変わってしまった。

「俺、店行ってもいいかな？」

未来はタバコを消しながら眉間を狭めた。

「やめなよ。晴香が嫌がるし、それに茉莉子ちゃんだって嫌だと思うよ」

「だよな」

俺はタバコを灰皿に押し込んで、コップに口をつけた。もちろん中身は野菜ジュースだ。

「晴香ちゃんさ、俺のこと、なんか言ってる？」

「自分からは言わないけど、アタシが『あいつちゃんと謝ったぁ？』

って聞いたら『ちゃんと謝ってくれたよ』って、言ってた」
あれは謝ったうちに入るのかって思って、久しぶりに胸が痛んだ。
「てか、もう虎太郎のことなんかどうでもいいと思うよ。晴香、彼氏できたし」
「あ、そなの？」
未来はポッキーを一本抜いてぽりぽりかじった。
「うん。年は一個下で、才能溢れる役者の卵なんだって」
あいつかよ。
「一回お店にも来たけど、すーごい礼儀正しくてかっこいい子だったよ。虎太郎なんかよりずっと晴香に似合う。晴香もなんかね、うれしそうだった」
「へえ」
「まあ、積年の呪縛から解き放たれたわけだもんね」
未来はそう言って、俺を指差す。
「ひでえ言い方だな」
うまい言い方かもしれない。未来はクスクスと笑う。未来って、昔はこんな笑い方しなかったよな、とかふと思う。
「でもまあ、アタシ的にはこれでよかったのかなって気がしてるんだけどね」
「まあ、な」
「悔しい？」
「いや、肩の荷が下りた、って言うとかなり傲慢だけど、でもすごくよかったって思うよ。ただ、無責任だなって」
「無責任」
「俺がね」
そう言った俺に未来は何故か少し頬を緩める。
「いいと思うよ。誰も虎太郎に責任取らせようなんて思ってないし、それこそ傲慢だって。もう気にすんな」
「そんなんでいいのかね」
俺は頬杖をついて、冷たいポッキーを口にくわえてぽきんと折る。

「いいんだって。晴香にはもうイケメン俳優がいるんだし、虎太郎にだって茉莉子ちゃんがいるんだから」
未来は天井を見上げた。俺もつられて見る。ＴＶゲームやってるくせに、どすんどすんって音がする。脩平、バナナよけるとき自分も飛ぶからな。そのせいでたまにデータも飛ぶし。どうせ茉莉子も真似してんだろうけど。あいつら意気投合しすぎなんだよ。てか、
「あれ、妹だから」
「てかさ、妹なのはわかったけど、それにしてもあんたらベタベタしすぎじゃない？」
「してねえし」
「特に外。手ぇつないでんじゃないかくらいの距離から絶対に離れないよね？」
「いや、拉致られるといけないからさ」
未来が思いっきり顔をゆがめた。壁をゴキブリでも這ってるのかと思って後ろ見たけど、ゴキブリは俺だった。
「過保護。溺愛しすぎ。どこからそういう発想が出てくんの？それでなくても何か怪しい兄妹なんだから、変な噂されるよ？」
何か怪しいってどういう意味だ。
「じゃあ、今度からもうちょっと離れて歩くよ」
もう拉致られる心配もなさそうだしな。未来はテーブルの上に腕を組んで、ため息をついた。
「虎太郎、重度のシスコンだよ」
俺は鼻で笑って、またタバコをくわえた。否定できないってことは、自覚があるんだろうな、とか思う。はは。
「ま、茉莉子ちゃんは極度のブラコンだけどね」
未来は腕時計を見て、腰を上げた。で、階段に顔を向ける。俺は火をつけかけてたタバコを灰皿に置いた。
「脩平ー！帰るよー！」
「やーだー！」
「置いてくぞー！」

「やーだー！」
未来は肩をすぼめて、俺に苦笑い。
「親みたいだな」
「まあね。手がかかるけど、かわいい子だよ」
未来は本当に母親的に微笑んだ。
「明日も八時でいいんだよね？」
「ああ。マジで助かる」
「いいって。明日で最後だしね」
未来は裏口に歩いていく。俺も立ち上がって、見送る。
「仕事がんばってな」
「虎太郎」
サンダルを履いて、未来が振り返る。
「ん？」
「おかえり」
未来はまっすぐ俺を見て、なんか懐かしい顔で笑いかけた。一瞬意味がわからなかったけど、すぐに理解した。
「ただいま、って、別にお前んとこに帰ってきたわけじゃねえけどな」
「いいじゃん。アタシらの虎太郎が帰ってきたってことで」
俺はマジでうれしくなって、たぶん、すげーいい顔で笑った。照れ隠しに鼻をこすってみる。
「サンキュな」
「言ってもまだまだ全盛期には遠く及ばないけどね」
「わかってるって。じゃーな」
「うん。また明日」
未来は小さく手を振って、ドアを開けて出て行った。俺はそのまま、やっぱり未来っていうのは俺にとっていつまでもかけがえのない存在であって、かっこいいし、すげーいい女だなーとか、わかりきったことをしみじみ思いながらゆっくりと閉まる銀色のドアを見ていた。でもその彼氏が階段バタバタ駆け下りてきて、後ろでうる

さい。
「あれー？こーたろー、未来はー？」
「帰ったよ」
「まーじーでー？」
「いま行ったばっかだから、追っかけろ」
「わかーったよー」
脩平は走ってきて、俺の肩に手を置きながらスニーカーを履く。
「明日も頼むな」
「わかーってるよー」
脩平はなんでか俺の肩を揉み始めた。やっぱりあほだ。
「早く行けよ。どうせ未来待ってるんだから」
「あ、こーたろー」
「あー？」
「茉莉子たんのキノピオすっげーはえーよー」
「だから、たん付けんじゃねえよ」
「こーたろー、ばいばーい」
脩平はうひゃうひゃ笑いながら走っていった。てか笑い方きめえ。俺は今度はドアを強く引っ張って、とっとと閉めた。それからテーブルに戻って二人分のコップを片付けて、氷とポッキーの入った器を冷凍庫にしまった。あとちょっとしかないけど全部食ったら茉莉子が怒るだろうしな、とか思いながら。
振り返ったら茉莉子がいた。
夏休みに入って髪を少し明るくした。こないだ海で遊んだから日焼けもしてる。黄色のTシャツにハーフパンツ。腕を組んで、なんだその不敵な笑みは。
「店長！マリオカートやろ」
「やんねえよ」
「私のキノピオ、すっげーはえーよ？」
「脩平が遅すぎんだよ」
「店長のヨッシーよりすっげーはえーって、脩平くん言ってたよ」

それは聞き捨てならねえな。
「小中高と最速の称号を守り続けた俺のヨッシーなめんなよ」
「私のキノピオ超最速」
「そこまで言うなら勝負してやんよ」
「かかってこーい！」
茉莉子はきびすを返して階段に向かう。
「あ、でもその前にスーパー行くぞ」
「はーい」
くるっと回ってまた戻ってきた。俺は財布とキーホルダーを持って、健康サンダルを履く。
「店長、ニケツね」
「自分の乗れ」
茉莉子はくちびる尖らせて、「ぶー」言って、走って自転車の鍵を取りに行く。俺は茉莉子が戻ってくるのを待ってから、ドアノブに手をかけた。でもちょっと思いついて、茉莉子をじっと見る。
「ん、なになに？」
「そういえばお前の髪型キノピオっぺえな」
「ひどーい」
俺は笑って、ドアを開けた。

俺は古本屋をやめるのをやめた。ぎりぎりまで迷ったんだけど、茉莉子が学校通いやすいところに引っ越そうかとも考えたんだけど、結局はやめた。まあ、店散らかりすぎで本持ってってもらえる状態じゃなかったっていうのもあるんだけど、それよりやっぱりここが永友古書店じゃなくなったら、茉莉子が俺のことなんて呼ぶかわかんないし。あの後、三時ちょうどにトラックで来てくれた立花さんに頭下げて謝って、怒られると思ったけど、立花さん、うれしそうだった。親父と仲良かったし、ここがなくなるのはやっぱり寂しいとか思ってたみたい。それから俺は毎日立花さんのところに通って、

古本屋のノウハウをみっちり叩き込んでもらった。勉強っぽいことしたのなんて高校以来で、案外気分良かったりする。店のホームページも作った。ネットに在庫状況アップして、通販も出張買取もバンバンやる。親父のバンでどこでも行く。でもやっぱり漫画は置かない。じいさんの代からのポリシーだからな。もちろんアダルトもお断りだ。そんなレジ茉莉子に打たせたくない。それに、そんなに儲けるつもりはないんだ。別に古本屋王目指すってわけじゃないし。あと俺まだ何にもわかんないからさ。しばらくは親父の真似してやってみようと思ってる。それがいいのかは知らないけど、俺はそれしかやり方知らないし。ま、幸い資金も本も十分あるんだ。ゆっくりじっくりやりますわ。

で、今週から駅前でビラ配り始めた。永友古書店来週月曜リニューアルオープン全品二割引きセールのチラシだ。俺と茉莉子に未来と脩平、他にも高校時代の素晴らしい仲間たちが汗だくになって手伝ってくれてる。なんか本当に、あの頃に戻ったみたいだ。でも、それは単なるノスタルジでしかなくて、戻れないってことは十分承知している。あれ以上がこれからあるとは、やっぱりいまでも思えない。俺はこれから少しずつ確実に、みじめにじわじわ年を重ねていくのだ。とはいえしかし。あの頃は持ってなくて、今ならあるっていうものがいくつもある。まず茉莉子。ものじゃないけど。あとは、えーと、クローズ全巻。親父の位牌……。まあまあ、とにかく茉莉子いるから。だから、それでいいかって思う。俺はね。

自転車並走でスーパー行って買い物して、家に帰って、マリオカートやって、それから茉莉子が飯作った。俺は何もすることなかったからテーブルについて新聞読みながら、三週間前の日曜の朝とは全然違う気持ちで茉莉子の後ろ姿を見てた。

茉莉子が引っ越してくることになって、部屋割りがちょっとした問題になった。俺は親父の部屋を片付ければいいやって思ってたん

だけど、茉莉子が、「お父さんの部屋は抵抗があるからやだ」って言うし、あとは物置になってるじいさんの部屋と仏壇のある居間しかなく、物置片付けるのはちょっと無理だし、居間には仏壇があるからやだとか言ってまたごねるから、結局俺が親父の部屋に移ることになった。せっかく部屋譲ってやったのに、茉莉子は毎晩二時間くらい風呂に入って、上がると俺の部屋に来て、ハービー聴きながら漫画読んで、勝手に寝る。で、結局俺は毎日元の部屋で寝てる。なんだろこれ。

「できたよー」

「おー」

俺は立ち上がって台所に行って、テーブルまで料理を運ぶ。今晩のディナーは鶏肉と夏野菜のカレー茉莉子スペシャル。なにがスペシャルかは不明です。

「スペシャルうめーかー！」

だから、意味わかんねえって。

「ふつー」

「ふつーって。それ、一生懸命作った人に対する最大の冒とくだよ？」

「だから、ふつーにすっげーうめー」

茉莉子はニシッと笑って、水飲んだ。てゆうかこいつの日本語が微妙に汚くなってきてるのがすげー気がかりなんだが。たぶん脩平と遊んでばっかいるせいだな。もちょっと距離置かせよう。うん。

そういや茉莉子はあれから一度も泣いてない。いや、厳密に言えば俺がさっきヨッシーで赤亀ぶつけてこてんぱんにしてやったらちょっと涙ぐんでたけど、それだって親父の墓行ったとき以来だ。もし一日一回泣かないと駄目な体質だったらどうしようとかくだらない心配もしたりしたけど、たぶん、あの頃の茉莉子はどうしようもなく不安定だったんだろう。母親なくして、父親みつける手がかりもなくなりそうになって、あとこれは言いたくないんだけど、会ったばっかでまだなんかよくわからん男と二人っきりだったりで、心

細くて仕方がなかったんだと思う。で、いまは見るからにのびのびしてる。俺は茉莉子が取り戻した心の平穏が二度と失われることがないようにと心から願う。もう壊れることがないように、しっかり大事に見守ってやろうとか、思い上がったことまで思う。兄として、とか。

「かれー！」

それにしても言葉づかいが悪い。

俺は目を閉じて水を一口飲んで喉をしめらせ、コップをテーブルにカツンと置いた。ちょっと真面目モードで話をしよう。ここらでガツンと言ってやらないと、いつか痛い目見るのは茉莉子なのだ。おお、俺すげー兄貴っぺえぞ。よし。

「お前さぁ、」

「店長さー」

茉莉子がタイミング図ったみたいに被せてくる。俺は無視して説教始めようとしたんだけど、茉莉子がくっとあご引いて、先割れプラスチックスプーンの先っぽ噛みながら、じとっとした目で俺見てくるからやめた。

「なに？」

「店長さ、最近ちっとも『茉莉子』って呼んでくれないね」

「呼んでるし」

「呼んでないよー。一番最近いつ『茉莉子』って呼んだかわかる？」

俺もスプーン噛みながら考えてみた。そういえば今日は言った記憶がないな。

「昨日」

「ちがうー。火曜日の朝の、『茉莉子ー、昨日洗った俺のステューシーのTシャツ知らね…ってお前着てんじゃん！』っていうノリつっこみを最後に私は店長から名前で呼んでもらってません」

そんなに言ってなかったっけか？全然気にしてなかったけど。

「『おい』とか、『お前』とか、そんな呼ばれ方ばっかりしてると、私の名前ってなんなのかなって、すごく悲しくなるんだけど」

茉莉子が倦怠期の嫁みたいなこと言い出した。
「でも一緒に住んでたらそうなってくもんなんじゃねえの？」
「もう前みたいに『茉莉子』って呼んでくれないんなら、私も店長の呼び方考えるよ？」
「それはやめてくれ」
茉莉子はしてやったりな顔になって、上唇の端に付いたカレーをぺろりと舐めた。
「じゃあ店長、もう一回最初からいってみよー」
「茉莉子さー、」
「なーにー？」
で、クリスマスの朝の子どもみたいな顔するんだわこいつ。えっと、何の話するんだっけ？
「茉莉子さー、」
「うんうん」
あれ？なんかマジで思い出せねえ。ひょっとしてこれが茉莉子スペシャルか？
「店長、おかわりでしょ？」
それは絶対に違うな。前後合わないし。でもまあ、
「おかわり」
「はーい」
まあ、いいか。楽しいし。

月曜日。
俺は部屋の窓開けて、今日早くも五本目のタバコを吸っていた。空は何もないペキペキのブルーだ。十時の開店まであと十五分。ぶっちゃけかなり緊張してる。茉莉子も落ち着かないみたいで、朝食食べてからずーっと本棚ぱたぱたやってる。今日から俺が名実共に永友古書店の店長だ。まったくの予想外なんだけど、いざとなるとすげー心細いんだよ。親父がいないっていうことが。

「あほくせえな」
俺はタバコをくわえたまま、書き物机の前に立つ。写真立ては二つに増えた。親父と母さんと俺のやつと、親父と大宮美奈子さんのやつだ。俺はその二枚の写真を目を細めてしばらく見てた。なんか親父モテモテみたいで結構むかつく光景だ。本当はここにもう一つ、俺と茉莉子のツーショットを置いてみようかとちょっと前から考えている。そうすると、結構バランスがよくなる気がして。でもなかなか撮る機会がないんだ。今日あたりちょうどいいかもしれない。あとで脩平に撮ってもらおう。あいつが写真撮るとみんなすげーいい顔で写るんだ。
今日は五時で店閉めて、夜はオープニングパーティーだ。さすがにうちじゃできないから、焼肉屋の二階借りた。未来と脩平はもちろん、他にも高校時代のツレが大勢来てくれる。未来を通して晴香ちゃんにも声かけてもらった。演技派の彼氏と愚痴り合う約束もあるし。来てくれたらいいなって、本気で思う。プラダのトートバッグはビニール袋に入れてしまってある。できたらあれだけでももらってほしいんだけど、そういうのって、やっぱり無神経なんだろうな。茉莉子も友達いっぱい呼んでる。俺はその中に男が混じってなければいいなとか、かなり真剣に思っていたりする。だから、兄としてだって。
俺は机の上の灰皿にタバコを擦って、両手の指でピストル作って、二人の親父に突きつけた。ガチガチ顔の親父と、変態スタイルの親父。どれだけ睨み続けても親父は表情を和らげないし、特大サングラスを外したりもしない。そしたらちょっと落ち着いてきた。俺は引き金を引くことなく、ちょっと笑って手を伸ばし、二つの写真をつまみあげた。で、俺なりの決意表明をしようと思ったんだけど、階段がドタドタうるさいから、ため息ついて、写真を机に戻した。あーあ。もうちょっとで俺の自己完結的なナルシズムが完成するとこだったんだけどな。
「やばいよ店長！」

襖がばっと開けられて、折り目の真新しいオリーブグリーンのエプロンをつけた茉莉子がテンパった顔して俺の部屋に飛び込んでくる。
「どうした茉莉子」
「エプロンの紐が結べないよー」
茉莉子は後ろ向いて紐ぴらぴらさせる。俺にやってってか。
「いや、お前そんなに不器用じゃねえじゃん。それ甘えたいだけだろ」
「しかもあと十分しかないよー」
「落ち着け」
茉莉子は俺の手を取って、何故か居間に引っ張り込んだ。
「なんでこっち？」
「お祈りするの」
茉莉子は仏壇チーンて一回鳴らして、手を合わせて目を閉じた。
俺は茉莉子の後ろに立って、背中と腰の紐結んでやった。ええ、過保護ですよ。
「お父さんお母さん店長のお母さんおじいちゃんおばあちゃんペス、どうか茉莉子と店長をお守りください」
最後の犬みたいな名前のやつ知らねえ。
「店長、タバコ」
「あん？」
「火つけて」
俺は言われるままポケットからタバコ出してくわえて火をつけて、茉莉子に渡す。茉莉子はそれを線香立てに突き刺して、「おおー」って言った。
「お前、それがやりたかっただけだろ？」
「よし。ほら、ほんとに時間ないよ」
全然聞いてねえし。茉莉子は一人で居間出て走って階段を下りていった。俺は危ないからタバコ逆向きにして消して、遺影の親父と目を合わせた。そういえばこっちにも親父がいたんだ。俺は姿勢を

正して手を合わせ、もう一度、俺なりの決意表明ってやつを始めようかと思ったんだけど、「ま、がんばってみますわ」みたいなことを言おうかと思ったんだけど、やっぱりやめた。そんなことをしたら親父に笑われそうだとか、別にそんなセンチメンタルなことを思ったわけじゃない。墓ならまだしも、家の中で遺影に語りかけるなんて行為は俺と親父の間にふさわしくないっていうか、要するにそういうキャラじゃないんだ。俺も、親父も。それに下で茉莉子が店長店長うっさいしさ。

店舗に下りると、茉莉子はまたしてもハタキで本を叩いてた。もう昨日からずっとやってる。俺は突っ込むのもめんどくさかったから、カウンターの上に用意しといた茉莉子のとおんなじ色とデザインの新品エプロンをつけ始めた。後ろの紐結んでたら、視界の下っ端がいやに鮮やか。

「なにこれ？」

親父椅子の上に目が痛くなりそうな林家ピンクの丸い物体が乗っかってる。

茉莉子が笑って走ってきて、カウンターに飛び乗るみたいに手をついた。

「店長クッション。その椅子すっげー硬いから、ずっと座ってるとおしり痛くなっちゃうでしょ？」

見たら端のほうにモコモコの刺繍で『店長』って入ってる。漢字かよ。って、

「え、なに、おま…、茉莉子これ作ったの？」

「だーかーらー、母子家庭甘く見ないでって。すっげーいい綿使ったから、すっげーやわらかいよ？」

俺はクッションを持ち上げて、ぽんぽんぽんと叩いてみた。ふっかふかで、いいにおいがした。

「……ありがとう」

俺は息を止めた。
「ん？」
茉莉子が怪訝な顔して俺を見てくる。
「なにその店長史上最も素直な反応？」
首傾げられても俺いま話せませんから、っててしてたらさすがに茉莉子も俺の異変に気づきやがった。
「えー、店長、もしかして泣くの？」
「泣かねえって」
声を出せたことがもはや奇跡。
「なんで？私があまりにも優しすぎるから？」
「泣かねえって」
でも違うこと言えないし。
「えー、どうしよ、ひさしぶりにイイコイイコしてあげよっか？」
「うぜえ」
「うざくないし。てゆうかすぐ泣く店長きめー」
ひでえ。茉莉子は腕を組んで、にやにやする。
「リニューアルオープン前に泣いちゃう店長なんて、店長失格だよ」
店長失格したらお兄ちゃんになっちまう。
「だから、こんなんで泣くわけねーだろが」
「はいはい、もう時間だよー」
茉莉子は壁のカレンダーを立て続けに四枚めくった。で、シャッターの方に駆けていく。
俺はまだふわふわしてる目をこすって、四枚のカレンダーを細く丸めて、ゴミ箱に突っ込んだ。
八月。
「よいしょー！」
茉莉子がバンザイするみたいに、一気にシャッターを押し上げた。薄暗かった店内にまぶしい光が満ちていく。俺はカウンターの下にあるコンポのスイッチを入れた。
二分早いけど始めるか。

ＢＧＭはハービー・ハンコック。またはゲッツ／ジルベルト。
妹に時給七百円。
永友古書店、五十一年目の夏だ

17　よいしょー！（後書き）

こんにちは。松本由樹彦です。

『永友古書店』を最後までお読みいただきありがとうございます。

あとがきっていうのもなんかえらそうですし、今回は書くと長くなりそうだし、言いたいことは本編に全部書いたから論点ずれるだろうし、いいわけがましくなるだけだろうから書くのやめようかなとか思ってたんですけど、完結しないと書けないものなんでやっぱり書きます。読みたい方だけ読んでください。

今作では、『なくした過去』とか『失われた青春』みたいなことがテーマとして一応ありまして、普通なら恥ずかしいんでそんなこと考えたくもないんですけど、僕自身が永友虎太郎以上に過去に囚われてますし、青春って言葉も血ヘドが出そうなくらい嫌いなんで、一回そういう自分の恥部みたいなものと向き合いつつしかも晒してみようというふうに思いいたり書き始めました。ある意味自虐です。

かつて高校生だったり、十代だったりした方たちは、いくらか虎太郎的な思いを抱えているんじゃないかなと思うんです。冒頭に引用したアンドレ・ジイトの格言なんてすごくて、それを言ったらおしまいだろって気もするんですけど、でも少なくとも、僕にとってはそのとおりなんですよね。スパーンときました。

本編中でも虎太郎は高校が楽しすぎて、でもその時間からはこれからどんどん遠ざかっていくだけで、自分も高校生的な要素を失っていくばかりで、周りが順調に変化を受け入れていくのを受け入れがたくて、余計に過去にしがみついて、しかも親父死ぬし、どうでもいいやじゃいけないんだけどどうでもいいやって感じでダラダラしていて、でもいろいろあって「かつての俺を取り戻したぜ！」ってなってうおー！ってなったものの、虎太郎にとっての過去の象徴でもある晴香と親父のそれぞれと対峙した時に虎太郎がしたことは生の感情むき出しのみっともないカラ回りでした。そんな都合よく

ことが運ぶわけないですし、過去はだいたいが裏切り者です。
でも、虎太郎とか、もっと言うと僕とか僕たちが高校の頃にしてたことってほとんどがみっともないカラ回りだったはずなんで、そういう意味では虎太郎ナイスでした。あの頃毎日寝る前とかに今日学校でやったことを思い返して、布団に包まって叫びたくなるくらい恥ずかしくなってた気がします。叫んでましたね。でもそういうことってもう全然ないんですよね。ずっと。恥ずかしいこととかしなくなりました。そしたらつまんないんですよね、やっぱり。あの恥ずかしさっていうのは、清々しさとか誇らしさとかとセットになってたものなんで、当然そっちも感じられないわけです。つまんないわけです。なので今回『永友古書店』をたっぷり時間かけて照れ隠ししながら書いていて、無理してわーわー叫んでみました。バカみたいでした。
青春をひきずったロストチルドレンな皆様に対して『過去を踏みしめて今を生きよう』とか、いま高校生だったりこれから十代後半を迎える皆様に対して『一秒一秒が特別だから大切に』だとか、そんなラリッた猿みたいなことを言うつもりはさらさらないです。楽しい青春でも苦い青春でも、過ぎてしまえば等しくなんか悲しいものですし、過去に囚われようが未来を見据えようが、結局のところ生きられるのは現在だけなわけで、だったらそれでいいんじゃないかなって思います。
やっぱりぐだぐだ書いてますけど、要は一人のシスコンが生まれるまでの話です。今回は主人公の性格的に使える言葉の種類が豊富で、楽しかったです。そういえば僕は最初虎太郎のことが全然好きになれなくて、茉莉子もなんか無邪気ぶってるけどさりげに腹黒いし、これ客観的に見てちゃんとかわいいって思ってもらえるのかなむかつくだけなんじゃないかなとか思ってたんですけど、なんだかんだ言ってみんなを好きになりましたし、この作品も僕にとって特別なものになりました。
ただ、どっちかっていうと僕は『寝顔かわいい』って言う主人公

よりも、『血管可愛い』とか言っちゃう主人公のほうが好きなので、ダークな世界に帰ります。とっとと岡部／吉川３を、『ディナー』の続きを書きます。

余計なことばかり書きました。このあとがきが本編を台無しにしてないことをひたすら祈ります。

最後にもう一度、ありがとうございました。

★ホームページをつくりました★

ｈｔｔｐ：／／ｍａｔｓｕｍｏｔｏｙｕｋｉｈｉｋｏ．ｊｐ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5315e/

永友古書店

2010年10月8日11時57分発行